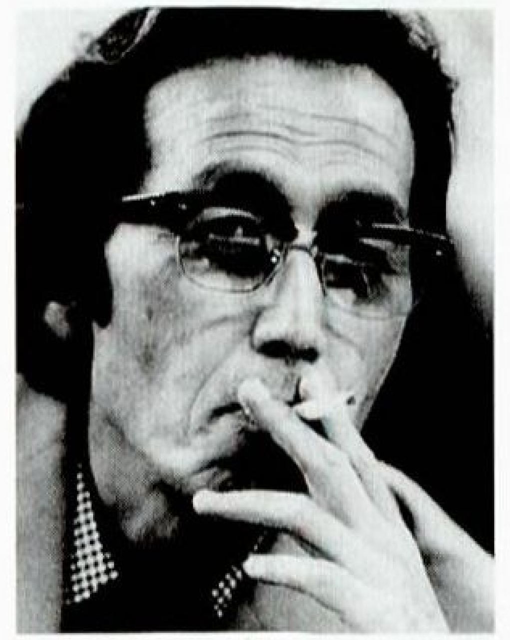
柴田錬三郎

新篇

眠狂四郎 京洛(けいらく)勝負帖



集英社文庫



柴田錬三郎（一九一七〜一九七八）
岡山県生まれ。本姓斎藤。慶大文学部卒。在学中『三田文学』に処女作「十円紙幣」を発表。戦後、編集者生活を経て、五一年「イエスの裔」で直木賞受賞。代表作「眠狂四郎無頼控」「赤い影法師」「曲者時代」他。

カバー・村田涼平
A D・島村 稔

新篇 眠狂四郎京洛（けいらく）勝負帖

柴田錬三郎



集英社文庫

し 1 60

新篇 眠狂四郎京洛勝負帖 柴田錬三郎

集英社文庫

9784087460681
1920193005714
ISBN4-08-746068-1
C0193 ¥571E
定価 本体571円＋税

解説・清原康正

京の千本通り、羅城門跡の旅籠に逗留中の眠狂四郎に、町奉行から呼び出しがかかった。禁裏から高い身分の姫が失踪、どうやら、大阪商人が関係しているようだ。御所が金のために姫を売った!? ひそかに姫を取り戻すべく、狂四郎は動きはじめる——表題作をはじめ、中、短篇八作品を集める。さらに狂四郎の創作秘話を綴ったエッセイ三篇も収録する。

集英社文庫

柴田錬三郎作品

- 度胸時代
- 生死の門
- 大将
- 図々しい奴
- 地獄の館
- 曲者時代
- 乱世流転記
- 貧乏同心御用帳
- 江戸っ子侍(上)(下)
- 遊太郎巷談
- 生きざま
- おらんだ左近
- うろつき夜太(上)(下)
- 花の十郎太
- 毒婦伝奇
- 日本男子物語
- 若くて、悪くて、凄いこいつら(一)(二)(三)
- われら旗本愚連隊(上)(下)
- 忍者からす
- 南国群狼伝／私説大岡政談
- 清河八郎
- チャンスは三度ある(上)(下)
- 幽霊紳士
- 夜叉街道
- 牢獄
- 生命ぎりぎり物語
- 源氏九郎颯爽記 火焔剣・水煙剣の巻
- 源氏九郎颯爽記 秘剣揚羽蝶の巻
- 地べたから物申す
- 復讐（ふくしゅう）四十七士(上)(下)
- デカダン作家行状記
- おれは侍だ
- 宮本武蔵 決闘者 1〜3
- 全一冊 江戸群盗伝
- 柴錬水滸伝 われら梁山泊の好漢(一)(二)(三)
- 徳川太平記 吉宗と天一坊(上)(下)
- 英雄三国志 1〜6
- われら九人の戦鬼(上)(下)
- 新篇 眠狂四郎京洛勝負帖

し-1-60

集英社文庫

新篇　眠狂四郎京洛勝負帖

柴田錬三郎

集英社

集英社文庫

新篇　眠狂四郎京洛勝負帖

柴 田 錬 三 郎

集 英 社 版

目次

新篇　眠狂四郎京洛勝負帖

眠狂四郎京洛勝負帖

一

「失礼でございますが……」
声をかけられて、眠狂四郎は、肱枕の首を擡げて、相宿の男を、視た。
古い小さな旅籠であった。
京の都といっても、八条から九条にかけて——東寺（秘密伝法院）の五重塔を中心にした一帯には、狭い小路に、うす穢い旅籠や怪しげな貧しい家がひしめいていて、他国者を排斥する気風のつよい都でも、ここだけは、素姓の知れぬ者が多勢入り込む余地があった。
千本通りに面した、羅城門跡と称ばれているところにあるこの旅籠は、あたりの旅籠にくらべれば、まだ、ましな方であったが、それでも、三条、四条などのそれとは比べもならなかった。
狂四郎が、ここをえらんだのは、京洛にも、自分の生命を狙う敵が多いために、身をかくした、という次第ではなかった。実は、あるじの、武部仙十郎が、江戸から送り込

んだ密偵だったのである。
本丸老中となった水野越前守忠邦は、幕府と禁裏との間に、かぞえきれぬほど積もった確執を解決しなければならぬ面倒な責務も負ったのである。したがって、かなりの頭数の密偵を、京の都に送り込んでいた。
「千本屋」というこの旅籠のあるじも、その一人であった。
客を泊める部屋は、二階に一室、階下に三室しかなく、狂四郎は、泊って二日目に、相宿を承知しなければならなかった。
相宿の客は、駿河から来た、という商人で、丹後ちりめんの仕入れをしているということであった。
朝早く出かけて行き、夜もかなりおそく戻って来るので、相宿といっても、狂四郎は、五日経っているが、まだ、殆ど口をきいていなかった。
今宵は、珍しく、夕餉がおわった時刻に、男は戻って来て、狂四郎に、声をかけて来たのであった。
「これは、丹後の地酒でございますが、コクがございまして、旦那のお口にも合うのではないか、と存じます。いかがでございます」
男は、そう云って、小樽と一合枡をさし出した。
「頂こう」

狂四郎は、やおら起き上って、一合枡を把った。
唐兵衛と名のる男は、商人にしてはひどく節くれだった手で、小樽を持ちあげると、
「どうぞ――」
と、酌をした。
狂四郎は、この時、はじめて、唐兵衛の顔をまともに視た。
年歯はもう五十路を越えているように思われる。造作はさほどでもないが、自分でつくりあげた貌である。人間ができている貌なのであった。
――ただの商人ではないようだ。
狂四郎は、そう思った。
物腰や口のききかたは、商人以外の何者でもなかったが、こちらと視線が合った瞬間の眸子に、冴えた光が湛えられた。普通、商人というものは、さむらいなどと相対した際、視線が合うと、追従の色をうかべるのを、なかば本能としている。おちつきはらった冴えた光を湛えて、視かえすことのできるのは、ただの商人ではない証左といえた。
「うまい地酒だな」
狂四郎は、飲み干してから、ほめた。
「持ちかえりました甲斐がございました。なんとなく、貴方様は、お酒好きのような気がいたしましたので……」

「べつに、好きな方ではない。ただ、所在ない生きかたをしているので、なんとなく、飲んでいるに過ぎぬ」

「こういうことをおうかがいして、まことに失礼と存じますが……、貴方様は、これまで、何かにしばられるような窮屈なおくらしは、一度もなさらなかった——？」

唐兵衛は、微笑し乍ら、訊ねた。

「そうみえるか」

「はい」

「主取りをしたこともなければ、金でやとわれたおぼえもないゆえ、当人は、気ままに生きて来たつもりだが……、深山で炭を焼いて生涯をすごしているような人間から比べれば、世俗の中でその日その日をすごしているのだ。殺したくもない人を斬ったり、心の美しい女を不幸な目に遭わせて悔いたり——おのれの意志とはうらはらな愚かな行為をくりかえしているようだ」

「勝手なことを云わせて頂けるなら、そのようなくらしをなされたおん身の深い傷痕が、てまえどものような者には、さぞおつらいのではなかろうか、と思われるのでございます」

「無駄な同情だな。他人に憐みをかけられるほど、孤独というものに堪えているわけではない。寝そべっている時は、痴呆でいられるのだ」

狂四郎は、薄く笑って、こたえた。
すると、唐兵衛は、ひとつ歎息して、
「修業をなされたことだ。てまえなどは、この年になり乍ら、時折、無性にさびしくなって、神様におすがりしたくなるのでございます」
「…………」
「たった一人、ということは、辛いものでございます」
「駿府に家を持たぬのか？」
「あるにはあるのでございますが、智能の足らぬ妹が一人、近所となりに嗤われ乍ら、留守をまもって居ります」
「…………」
「十年前に、女房と子供二人が、てまえの留守中、疫病で亡くなって、死んでもよい白痴の妹が生きのこったのでございます。浮世は、ままならぬものでございます」
唐兵衛が、そう云って、かぶりを振った時、あるじが入って来て、
「お使いが、参りました」
と、一通の封書を、狂四郎に手渡した。
披いてみると、それは、京都町奉行からの招待状であった。

二

京都町奉行・寺沢内膳正は、去年、所司代の懇望によって、大阪町奉行から転じて来た人物で、利（き）け者という噂（うわさ）であった。

京都の支配者は、所司代であり、禁中の守護、皇室、公卿（くぎょう）、門跡などに関する幕府の事務を行い、さらに、五畿内（きない）、丹波、播磨（はりま）、近江（おうみ）八箇国の幕府直轄（ちょっかつ）地の統治、西国三十三箇国諸侯の監督、など広い権限を与えられている要職であったが、実際には、名目をたてるだけで、さしたる政治力を必要とせず、実際の事務は、京都町奉行にまかせていた。

したがって、京都町奉行が、事実上の権力者といえた。

所司代の方は、江戸に在ることの方が多かったのである。

町奉行は、禁裏御所の警固を第一目的として相勤める、ということになっているが、実際は、御所方賄（まかな）い、物入りの増減の調査、公卿方の動静の監視など、目付の役目をつとめた。さらに、五畿内の寺社朱印を指揮し、諸宮門跡といえども、その下知に従わせた。所司代に代って、西国諸侯に対する探題の任務をはたすこともあり、また、山城（やましろ）、大和、近江、丹波四箇国は、その支配下にあったので、公卿領であろうと大名領であろ

うと、容赦なく、取締りの権力をふるった。
摂家、宮方、清華、その他堂上公卿の行跡は、すべて、町奉行の監視の中に置かれるのであった。
その勢威は、他の遠国奉行の比ではなく、大臣と雖も、遠慮したものであった。
眠狂四郎が、書院に坐ると、寺沢内膳正は、待たせずに、姿をあらわした。
瘦せこけて、顔色のわるい、鷲鼻の、ひどくおちつきのない人物であった。
「お主、上洛の途次、薩摩の手練者どもを、片はしから、斬ったそうだの」
口調も、せかせかしていた。
狂四郎は、こういう型の人物を、好まなかった。
「お呼びの趣、うけたまわりたい」
狂四郎は、対手が京都町奉行であろうが、べつに、頭もひくめずに、視かえした。
「名は申せぬ。ただ、高貴のお方とだけ申しておく。……昨夜、行方知れずに相成った。いや、さらわれた、と断定した方がよいかも知れぬ」
「…………」
「高貴のお方であるし、また他にも、仔細あって、奉行所で人数をくり出して、公然と探索するわけに参らぬ。お主に、この役目、たのみたい」
「これは、公儀隠密衆の任務かと存ずる」

「お主が、ことわることは、予想して居った。しかし、ことわられては、困る。お主でなければ、やれぬ役目だ」
「…………」
「お主が、なんとなく、高貴な身分らしい姫君だ、と思って、素姓も知らずに、救い出してくれた。そういうことに、いたしたい」
「姫君？」
「左様――。美しいお方だ。どんな場所に置いても、一目で、これは、高貴の身分のお方だ、と判(わか)る。どうだ、お主の役目であろうが」
寺沢内膳正は、にやりとしてみせた。
「他の者に、お申しつけ頂きたい」
狂四郎は、冷やかに、拒絶した。
「ま――そう、にべもなく、かぶりを振ってくれるな。これは、ただのかどわかしではないのだ。一月あまり前から、禁裏の台所が、急に、ゆたかになった。上皇がおすまいの仙洞(せんとう)御所の方も、にわかに、修理(しゅり)やら能楽やら、高野山へご参詣(さんけい)やら、おくらしぶりが派手に相成った。わしが、その金子の出どころを、おうかがいいたしたところ、宝物(ほうもつ)を、大阪商人どもへ下げ渡した、という。調べたが、そのような事実は、ない。どうも、解(げ)せぬ、と思っていたところ、姫宮の突然の失踪(しっそう)だ。……わしの推測するところ、大阪

商人が、これには、一役買って居る。となると、公儀隠密では、歯がたたぬ。対手が、大名ならば、公儀隠密も、働くすべを心得て居るが、大阪商人では、しまつがわるい。なにせ、鼠のように要心ぶかく、牛のように辛抱づよく、貝のように口がかたく、狡猾さに於ては狐狸以上の手輩だ。第一、うなるほど、金を持って居る。わしは、大阪町奉行を、十年勤めた。大阪商人どものしぶとさ、ずるさ、頭のよさを、イヤという程知らされて居る。お主のような八方破れの無頼者でなければ、太刀打ちできるものではない」

「…………」

「火急のことなので、武部仙十郎にたのむのをはぶいて、直接お主を呼んで、こうして頭を下げるのだ。たのむ！」

「…………」

「どうだな？　こうして、頭を下げても、ことわるか？」

そう云って、のぞき込むようにする寺沢内膳正の表情は、人相にも似合わず、ふしぎに、愛嬌のあるものになっていた。

狂四郎は、苦笑して、

「仙洞御所が、美しい姫君を、大阪商人に売られた、と疑われるのか」

と、云った。

仙洞御所には、光格上皇が在す。恵仁親王に譲位されたのは、文化十四年であるから、上皇になられて年久しい。しかし、譲位後も、院政を行われ、事実に於ては、御在位時代と大差はなかったのである。

現天皇は、すべて、仙洞御所の御指図を仰がれる。

光格天皇は、歴代天皇中、傑出した英明の御仁であった。

御在位も、最も久しきにわたったし、漢籍の素養も博く、皇権の恢復にはことのほか熱心で、蒲生君平の「山陵志」にも、林子平の「三国通覧」にもお目を通され、堂々と、幕府閣老と対立して、一歩もゆずらぬ気概を、示されて来た。

光格帝ほど、幕府に対して、憤りを抱かれた天皇もなかったのである。

したがって――。

光格上皇が、大阪商人の金力を利用して、幕府閣老の鼻をあかしてくれよう、と思い立たれた、と推測してみても、べつにふしぎではないのであった。

三

狂四郎が、町奉行所を出て、ものの一丁も辿らぬうちであった。

「旦那――」

うしろから、声をかけて来た者があった。
「千本屋」で相宿の唐兵衛であった。
狂四郎は、べつに、振りかえりもせず、歩きつづけ乍ら、
「書院の天井裏に、人が忍び入っていたようだが、お主だったか」
と、云った。
「おわかりでございましたか」
「奉行は、気づかぬ様子であったが、わたしの方は、すこしばかり五感が鋭くできて居る」
「おそれ入りました。てまえの正体は、もう疾（と）くに、看破（みやぶ）っておいででございましたか？」
「他人の素姓には、興味を持たぬ。天井裏に人がひそむ気配をさとった時、なんとなく、お前ではないか、と思った」
「好奇心のつよい方でございましてね。べつに、欲が深いわけではございませぬ」
唐兵衛が、狂四郎を案内したのは、四条烏丸のとある小さな料亭であった。
唐兵衛は、酒と肴（さかな）だけをはこばせておいて、女をさがらせると、
「眠様。てまえは、貴方様のお生命を狙っていた者でございます」
と、打明けた。

「わたしがねむっているところを、いくらでも、狙うことができたであろう」
「それが……、駄目でございましたね。二度ばかり、匕首を摑んで、にじり寄ろうとしましたが、そのたびに、貴方様の寝息が、ふっと、止まりました」
「目をさましたわけではない。こちらは、夢にも知らなかったことだ」
「つまり、貴方様は、ねむっておいでも、ちゃんと、殺意を抱いて迫る敵に対しては、これをふせぐ用意をなさいます。ひきさがらないわけには参らなかったことでございます」
狂四郎は、手酌で、飲みはじめた。
「何様にたのまれたかは、申し上げませぬ。百両の仕事で、生涯に、いくどもある儲けではございませんが、あきらめました」
唐兵衛は、云った。
「べつに、あきらめずともよかろう。狙ってくれてかまわぬ。刺客だと白状するのも、こちらを油断させる手のひとつだ」
「いや、貴方様には、この唐兵衛も、兜をぬぎました。それだけでなく、貴方様がお引受けになったお仕事を、手伝わせて頂きたいと存じて居るのでございます」
「奉行の依頼を、わたしは、承知して来たわけではない」
「興味がない、と仰言います？」

「わたしに代って、お前が引受ける、というのなら、べつに止めはせぬ」
「いえ、てまえは、ただ、手伝わせて頂くだけでございます。それと申しますのも、思い当ることが、ひとつ、あるのでございます」
「………」
「先月のはじめのことでございました。てまえは、淀川をのぼって来て、伏見の船場へ着いた船から、千両箱が三つ、揚げられるのを眺めて、なんとなく、あとを尾けてみたところ、仙洞御所へはこび込まれたのでございます。むかしから、貧乏と相場がきまって居る御所に、どうして、そんな大金が、運ばれたのか、その当座、ふしぎなこともあるものだ、と思って居りましたが……、お奉行のお話を、天井裏で、ぬすみぎきしているうちに、さては、と思い当ったのでございます」
しかし、狂四郎が、その打明け話に対して、口から送り出したのは、
「唐兵衛、この酒は、お前が飲ませてくれた丹後の地酒よりも、まずいな」
その言葉であった。

四

春は来ていたが、昏れなずんで来たこの時刻、あけはなった窓から入る風は、まだつ

めたかった。

寝そべった眠狂四郎の足は、まだ置炬燵の中に入れられていた。

島原の廓でも、二流の店であった。

狂四郎は、流連けて、五日あまり、ただこうして、寝そべっている。

つめたい風に乗って、道をへだてた向いの店から、三絃の音がひびいて来ていたが、これは、妙にさびしい音色であった。

江戸の吉原とちがって、歌曲も雅で、したがって、三絃も派手ではなく、万事しとやかに立舞う遊びであった。流石に、都の趣があってしおらしい、と受けとるよりも、なんとなく、さびれた気配がただようている、と評した方が、よさそうであった。

古きを尚び、由緒を重んずるのは、土地柄であろうが、百年のあいだすこしも変らぬ島原の廓は、いまは、その繁昌を、祇園に取られている。

土塀もこわれたままになっていたり、揚屋町のほかは、家も巷もよごれていたし、太夫の顔色もあきらかに、祇園に劣っていた。

尤も、狂四郎が、流連の場所に、祇園をえらばずに、島原をえらんだのは、そのさびれたさまが気に入ったからであったが……。

しぎ野という敵娼が、入って来た。

「なにを考えて、おいやすえ？」

顔をのぞきこんだ。

一日中、こうして寝そべっている客なのであった。退屈した様子もなく、じっと動かずにいるのが、女にとってはふしぎなのであった。

狂四郎は、それにこたえるかわりに、

「お前の国は、淡路島といっていたな？」

「あい。そうどす」

「あの唐兵衛という男も、同じ故郷か？」

「あい——」

しぎ野は、頷(うなず)いた。

この敵娼をえらんでくれたのは、唐兵衛であった。

さして美しい顔だちではないが、おっとりとして、いつまでもそばに坐っていても、気にならぬ女であった。

この島原では、女郎といわず、女中と称(よ)ぶが、そう称ぶにふさわしい女であった。すれたところはなく、こまかな心遣いをする小さなしぐさにも、心がこもっているようであった。

「お前たちの故郷では、地下(じげ)者たちは、なにか、公卿に対して、恨みでも抱く理由を持っているのか？」

狂四郎は、訊ねた。

「いえ、べつに……」

「唐兵衛は、公卿を憎んでいるらしい」

「唐兵衛さんは、子供の頃、淡路を出てしもうて、駿府の方へお行きなされた御仁ゆえ――」

「その餓鬼の頃に、唐兵衛は、公卿に対する憎しみを植えつけられたらしい」

しぎ野は、しばらく黙っていたが、やがて、ぽつりと、

「うちらの国の者で、次男、三男は、みな京大阪へ奉公に出るのどす。そのうち、御所にお仕えして、下部になった者もたんと居ります。……苗字を頂戴して、羽織袴の仕丁に出世した人も居りますえ」

御所や、摂家、宮家の館に奉公する小者は、いわゆる鳴門者が多いことは、狂四郎も、以前耳にしたことがあった。

「そのかわり、身分地位だけで、人間を差別する公卿に、牛馬扱いにされて、あるいは、いじめ殺されたりした者も居ろう」

「上つ方のおくらしは、廓の女子などには、一向に判りまへん」

おとなしい女が、珍らしく、きつい語気でこたえた。

それが、かえって、狂四郎に、

——やはり、なにか、かくしているな。
と、直感させた。
しかし、これ以上、しいてきき出す気も起らず、
「酒をくれ」
と、命じた。
急に、廊下にさわがしい数人の跫音がして、
「ここか！」
と、険しい声がかかったのは、狂四郎が盃を手にした時であった。

五

入って来たのは、直衣を着用した公卿であった。
公卿と雖も、廓へ忍びがよいすることはある。しかし、直衣姿で、登楼するなどとは、まずあり得ない筈であった。
着換えるいとまもなく、やって来たものに相違なかった。
供をした五位侍、六位侍らが、険しく気色ばんでいるのも、大急ぎで馳せつけて来た証拠であった。

「眠狂四郎とは、その方じゃな」
公卿は、興奮で、肩を喘がせていた。
「わしは、中院為徳じゃ」
公卿は、名のった。
すると、狂四郎が、呟くように、
「ねぶり大臣か」
と、小声で、云った。
公卿の中に、大臣家というのがある。中院、正親町三条、三条西の三家である。官位昇進の次第は、清華と同様であるが、大納言に任ぜられて、大将を兼ねずに、内大臣に任ぜられる公卿である。その内大臣の職は、清華の持ったあとを、ちょっと任ぜられて、すぐ辞職する。すなわち、内大臣を、ちょっとねぶるだけなので、世間から、ねぶり大臣と悪口を云われているのである。
「なに！　なんと申した！　もう一度、申してみよ！」
中院為徳は、こめかみに青筋を浮かせた。
「おちつかれるがよろしかろう。大臣家ともあろうお公卿が、素浪人の座敷へ侵入して、荒声をたてられるのは、都の風趣にそむく、と申さねばならぬ」
「黙れ！　盗人たけだけしいとは、おのれのことであるぞ！」

「盗人たけだけしい？」
狂四郎は、眉宇をひそめた。
「左様じゃ。……盗み居った二千両を、何処へ匿し居った？　申せ！」
「………」
「神妙次第では、穏便の処置も、考慮してつかわす。その方の態度ひとつで、致し様があるのじゃぞ！」
中院為徳は、早口に、上ずった声音で、云った。
「なにを云われているのか、一向に、こちらにはおぼえがないが――」
狂四郎は、冷やかに、公卿の蒼ざめた顔を見あげていた。
「この期に及んで、まだ、白を切るか！」
中院為徳は、憤りで、全身をぶるぶる顫わせた。
五位侍や六位侍が、とりおさえようと、迫って来た。
狂四郎は、なお、動かずに、
「わたしが、二千両を盗んだ、と云われるのか？」
「何処へかくしたのじゃ？」
「盗みもせぬものを、どうして、かくす？」
「黙れ！　黙れっ！　黙れっ！……ひっとらえい！」

中院為徳は、狂ったように、喚（わめ）いた。

狂四郎は、両腕を攫まれたとたん、

——そうか。

と、合点した。

「わたしが、御所の二千両を盗んだ、と密告した者があった、と云われる？」

「もはや、遁（のが）れられぬところじゃ。かくし場所を白状せい！」

中院為徳は、壬生寺（みぶでら）の壬生狂言見物の桟敷（さじき）から、駆けつけて来たのであった。

この日——。

壬生寺では、毎年恒例の狂言が催されていた。

この壬生狂言と称ばれる無言劇は、壬生寺独特のものであった。

これは、融通念仏宗徒が、その念仏唱名（しょうみょう）の功力（くりき）を増大する目的で、多勢群れ集うて、錫杖（しゃくじょう）をふりかざして、躍りまわりつつ唱名する大念仏から変化したもののようである。

そのむかし、千本の閻魔（えんま）堂、嵯峨（さが）の釈迦（しゃか）堂あたりで、大念仏会（え）がさかんに行われていたが、徳川の世に入って、壬生寺が、これに、室町時代の猿楽（さるがく）及び田楽の所作演芸を合せて、催したのが壬生狂言で、たちまち、京の都の名物のひとつになったのである。

その番数は、桶取（おけとり）、焙烙割（ほうろくわり）、花盗人、狐釣（きつねつり）など四十番もあった。毎年、三月十四日から十四日間、昼は巳刻（みのこく）（十時）から酉刻（とりのこく）（六時）まで、夜はひきつづいて酉刻から戌刻（いぬのこく）

(八時)まで、ぶっ通しで、演じるのであった。踊はすべて所作で、一切言葉を用いなかった。囃は金鼓、太鼓、笛で、かんでんかんでん、かかかん、かかかん、かんでんかんでん、と騒々しいことであった。

いつの年からであったか、仙洞御所の光格上皇が、お忍びで、この壬生狂言に臨まれるようになっていて、摂家、清華、大臣家などの公卿も列席していた。

今日——。

面棒という紅白の紙を巻きつけた長門竹を、舞台下に蝟集した見物人たちへまいたあと、焙烙割が演じられた。

毎年、節分の日、壬生寺に参詣する人々は、堂前でひさぐ焙烙土鍋をあがない、これに、自分の氏名と生年を記して、厄払いのために、納める習があった。この鍋は、数千の多きに達した。

焙烙割というのは、すなわち、この鍋を片っぱしから割る、なんとも派手な狂言であった。この断片をひろって、身に帯びると、疱瘡、麻疹など一切の疫病にかからぬという迷信があって、人々は、あらそって、手をさしのべたのである。

その最中に——。

割れていない土鍋が、上皇の膝の前へ、ぽうんと、投げ寄越されたのであった。

その土鍋には、氏名、生年のかわりに、次のような文句が記されてあったのである。

『姫宮おん売り払いの代金三千両の残り二千両、無断にて、頂戴つかまつり候。浪人・眠狂四郎』

のみならず、ていねいにも、『島原曲輪うちにて』と居どころまで、あきらかにしていたのである。

近習の一人が、大急ぎで、仙洞御所へ馳せ戻って調べてみると、御蔵の中の千両箱ふたつが、消えうせていた。

この急報によって、内大臣中院為徳が、島原の廓へ、網代輿をはしらせて来た――というわけであった。

六

――これは、唐兵衛の仕業だ！

眠狂四郎は、そう直感したのであった。

唐兵衛は、失踪した姫宮をとりもどしてくれ、という京都町奉行・寺沢内膳正の依頼を、引き受けようとせぬ狂四郎に、是が非でも腰を上げさせるために、この非常措置をとったに相違ない。

頭上に火の粉がかかって来れば、狂四郎といえども、払わねばならぬ。

二千両盗んだ下手人にされれば、どうしても、その追及の手をはねかえして、起(た)ち上らざるを得ない。

——唐兵衛の奴(やつ)、考えたものだ。

狂四郎は、苦笑してから、自分の両腕をひっ摑んで、ひき立てようとする五位侍、六位侍たちに、抵抗せぬとみせかけて、腰を上げた。

立ち上った瞬間、どう払われたか、四人の侍が、どどっとよろけて、二人ばかりは、しりもちをついてしまった。

「おのれ、手向いするか！」

中院為徳は、目と歯を、ひき剝(む)いた。

「お公卿という御仁は、頭脳が単純にできておいでだ」

「なに！」

「二千両もの大金を掠(かす)めた盗賊が、わざわざ、居どころを報(し)らせるとは面妖(おか)しい、と疑われなかったのか。どこに、そのような、間抜けた盗賊が居ろうか」

「…………」

中院為徳は、唸(うな)った。

「かりに、わたしが、盗んだことにしてもよい。ということは、仙洞御所の御蔵に、二千両が、在ったということになる。……宮廷に、千両はおろか、百両の貯(たくわ)えもないこと

は、天下周知の事実だ。とすれば、そのような大金が、どうして、御蔵にころがり込んだか、まず、そのことに対する疑惑の念を、こちらは抱く。その出所を、突きとめさせて頂くことになるが、よろしいか？」

「ひっとらえい！　ひっとらえるのじゃ！」

中院為徳は、侍たちに、絶叫した。

侍たちは、総勢で、狂四郎に、とびかかって来た。

しかし、渠らが、一人のこらず、その場へ悶絶するのは、ほんの十もかぞえれば足りた。

「大臣殿――」

狂四郎が、一歩進むと、中院為徳は、あわてて、二歩ひき退った。

「この素浪人を追いまわされるのは、一向にさしつかえない、と申し上げておく。しかし、こちらは、こちらで、盗賊呼ばわりされたおかげで、大金の出所をつきとめる料簡に相成った。覚悟をしておいて頂きたい」

そう云いのこすと、戦慄する公卿のわきを、すっと、通り抜けた。

狂四郎が、羅城門跡の旅籠の二階に戻って来ると、まるで、それを、どこかで、見張っていたように、唐兵衛が、ひょっこりと、姿を現した。

「しぎ野という女中、お気に召した模様でございますね」

唐兵衛は、笑い乍ら、云った。

「さびれた廓の女郎にふさわしい女だな。お前とは、縁つづきではないのか？」

「いえ、まるきりのあかの他人でございます。……ところで、貴方様を、泥棒(どろぼう)にしたててしもうて、まことに、申しわけございませぬ。お許し下さいまし」

唐兵衛は、畳に両手をつかえて、頭を下げた。

「わたしを、働かせるためにやったことであろうが、いささか手荒すぎたな」

「お慍(いか)りでございますか？」

「慍ってもはじまるまい。……まさか、お前は、その二千両を、一人占めにする所存ではあるまい」

「ほどこしてやりたい窮民は、この京の都だけでも、一万人も居ります」

「お前は、どうやら、公卿衆に対して、敵意を抱いている男らしい」

「その理由は、いずれお話申し上げる時もございましょう。……眠様、おやり下さいますか？」

「役者をそろえて、幕をあけるまでにしておいて、踊るかどうか、訊ねるのは野暮だろう」

「有難う存じます。この芝居、逆に、ご見物衆の方へ、木戸銭を払ってやるのでござい

ます。前代未聞と申さねばなりませぬ」

唐兵衛は、笑った。

「それにしても、一人で、どうやって、千両箱を二箇も、はこび出した」

「なに、はこび出したのではございませぬ。御蔵の床下の、土の中へ埋めておいたのでございます。つまり、まだ、二千両は、御蔵の中に在るわけでございます」

「ふむ。智慧をはたらかせたものだ」

狂四郎は、苦笑せざるを得なかった。

「では、てまえは、これから、大いに手伝わせて頂くことに相成ります。明日にも、よいお報せを持参できるかと存じます」

唐兵衛は、もう腰を上げていた。

一人になった狂四郎は、一人の盗賊によって踊らされることになったおのれに、自嘲をおぼえたことであった。

七

——尾けて来ているな。

眠狂四郎が、さとったのは、木辻の往還をひろっている時であった。

しかし、べつに、行先を変えることはしなかった。
唐兵衛と落ち合う場所と時刻をきめていたのである。
妙心寺の門前を通りすぎる時には、すでに、尾けて来ているのが、武士であり、五人が一定の間隔をとって、一列になっていることまで、さとっていた。
雙ケ岡は、妙心寺から数丁西にあった。
南北にわたって、三つの丘陵がつらなっている。一ノ岡、二ノ岡、三ノ岡とも称ばれている。
吉田兼好が、隠栖して、徒然草を草した旧跡は、二ノ岡の西麓にある。
京の都の郊外でも、この雙ケ岡は、松樹のたたずまいに、いちだんと風趣があって、古から、文人墨客に愛でられている。
つつじが咲く季節には、その松かげに夕陽の色が映えて、つつじときそう景色など、われを忘れさせるほどの美しさであった。
そのつつじは、まだ、つぼみであった。
狂四郎が、足を停めたのは、一ノ岡の麓にある草庵の前であった。
これは、もとさる堂上公卿の持ちものであったが、二年前に唐兵衛が、人を介して買いとっておいたのである。
盗賊と雖も、老いが来れば、隠栖する風流心があるのであろう。

手入れがしていないので、荒れた印象はまぬがれないが、いかにも、風雅なたたずまいである。

狂四郎は、庭に入って、縁側へ腰を下した。

すると、あらかじめ唐兵衛から報せがあったものか、すぐに、若い女が、お茶を持って現れた。

京でなければ見られない、おっとりとした面差のむすめであった。

「ようこそ、おこしやす」

そっと、お茶をさし出すしぐさに、京女独特の和らかさがあった。こうした神妙な風儀は、江戸では見受けられぬ。

——京に、十日も逗留すると、なんとなく、呆けて来るようだ。

狂四郎は、春の鳥がのどかにさえずる景色に眼眸を送って、そう思う。

享和年間に曲亭馬琴が著した「羇旅漫録」の中に、次のような文章がある。

『緑山高く聳えて尖がらず、加茂川長く流れて水きよらかなり。人物また柔和にして路を行くも争論せず、家にあるもの人を罵らず。上国の風俗事々物々自然に備はる。予、江戸に生れて三十六年、今年はじめて京都に遊び、暫時俗腸を洗ひぬ。

京によきもの三つ——女子、加茂川の水、寺社

あしきもの三つ——人気の吝嗇、料理、舟便

たりなきもの五つ――魚類、物もらひ、よきせんじ茶、よきたばこ、実なる妓女』

馬琴は、みごとに、京都の特徴をとらえている。

市井では無頼に生きる孤独者にとっては、馬琴よりもさらに、このねむったような世界に在ることに、しだいに、心気が腐って来るような怠惰感をおぼえるのだ。

――この惰気を払うには、ひとつ、威勢よく景色を擾すのも、一手かも知れぬ。

狂四郎は、湯呑みを置くと、腰を上げた。

尾行者たちは、すでに、目の前の松林の中に、姿を現していたのである。

狂四郎は、ゆっくりと、門を出た。

それに応じて、尾行者たちは、一斉に、半円にひらいた。

「お主ら、べつに六位侍でも近習青士でもないようだが……、ただのやとわれか？」

狂四郎は、ふところ手のままで、自ら、その半円陣の中へ、身をはこび入れた。

「それとも、宮廷にも、公儀の庭番に相当する隠密衆を養っているのか」

それに応えて、尾行者たちは、言葉の代りに、抜刀して、それぞれ全く同じ青眼に構えた。

道場で修練を積んだ腕前と看てとれた。しかし、狂四郎のような無数の修羅場を経て来た者の目には、実戦を知らぬ者の極度の緊張が、かえって、一体となるべき陣形を、

各個ばらばらにしていることが、ありありと映っていた。

いずれも、二十歳を越えたばかりの、大人の人生に足を踏み入れたばかりの若者たちであった。

「お主らを無縁仏にする無慈悲を避けたい。と申したならば、傲慢（ごうまん）ときこえるだろう。この京都の雅びな風趣を、血でけがしたくない。と申したら、気障（きざ）ときこえるだろう。……こちらの申したいのは、残念乍ら、お主らとは、いささか腕がちがいすぎる。勝つときまっている勝負は、ばからしくて、やれぬということだ」

五人の剣士は、その言葉に、逆上した。逆上させるためにあびせて来たのだ、とさとるには、あまりに若すぎた。

闘いは、正面の者が、満身からの気合を爆発させて、斬りつけるのをきっかけにして、開始された。

八

もし、近くに行きずりの目撃者がいたならば、その結果のあっけなさに、実感がともなわなかったに相違ない。

狂四郎の迅業（はやわざ）に、感嘆するには、その動きのあまりの早さを見とどけるいとまがなか

ったであろう。
　ことごとくが峰撃ちであった。
　狂四郎のような男にも、古歌になじんだ景勝の地を、血汐で染めることをはばかる気持が働いた、といえる。
　無想正宗を腰に納めて、草庵へもどりかけた狂四郎に、
「お見事でございました」
　と、云ったのは、いつの間にか、そこに佇立て、見物していた唐兵衛であった。
　狂四郎は、無言で、やや不機嫌な面持で、草庵に入った。
　唐兵衛は、女に、酒と肴をはこばせてから、
「姫宮を買うた者が、判りました」
　と、告げた。
「…………」
　狂四郎は、黙って、盃を口にはこんだ。
「やはり、大阪の商人でございました。辰巳屋久左衛門。ご存じでございますか？」
「知らぬ」
「鴻池、加島屋、平野屋とならぶ大町人でございます」
　唐兵衛は、説明した。

辰巳屋は、大阪屈指の両替屋であった。

その先祖は、しがない炭屋であった。才覚があって、炭問屋になり、かけ屋、両替屋を兼ねるようになって、みるみる分限者（ぶげんしゃ）にのしあがった。

炭屋になる前は、自分の邑（むら）の渡し舟の渡守であった。

ある年の暮のことであった。

日向（ひゅうが）国の炭商人が、その渡し舟で、兵庫津に繋泊（けいはく）する船に戻ったが、うっかりして、財布を、渡し舟の中へ落してしまった。それを気がつかずに、船へ戻りついてから、はっとなったが、落したものか盗まれたものか、思いつかぬまま、帰国した。

その次の年の秋、炭商人は、再び、大阪へやって来た。兵庫津から、同じ渡し舟に乗ったが、その若い渡守の顔に見おぼえがあったので、

「わしは、去年の暮に、財布を失（なく）したが、もしや、この舟に落さなんだかな？」

と、問うてみた。

すると、渡守は、

「どんな財布でござりましたか？」

と、ききかえした。

財布の裂（きれ）は何、また、いかほどの金子が入っていたか、とこまかく糺（ただ）してから、渡守は、炭商人を、わが家へともなって、件（くだん）の財布を返した。

金子をしらべてみると、一文も減ってはいなかった。

炭商人は、まだ二十歳あまりの渡守の正直さに、感謝して、金子の半分を謝礼に贈ろうとした。しかし、渡守は、辞して、受けなかった。

炭商人は、ふと思いついて、

「どうだな、ひとつ、炭屋になってみては――？」

と、すすめた。

炭商人は、かねて、大阪に、支店を持ちたいと考えていたのである。

「わしには、店をひらく資金もござりませぬし、また送って頂く炭の代金を支払う能力もありませぬ」

渡守は、こたえた。

炭商人は、店をひらくのは、自分の念願だし、代金は、売ったあとでかまわぬ、という条件で、渡守の正直を見込んだ上での共同経営だ、と云いきかせた。

辰巳屋久左衛門の出世美談として、「浪華(なにわ)百事談」が述べているところである。

こうして、富商となった辰巳屋も、幾代かを経て、騒動を起した。

いつの世もそうであるが、役人と商人との贈収賄関係は、尽きない。

江戸時代にあっても、幕吏の汚行は甚(はなはだ)しかった。殊(こと)に、享保(きょうほう)期以後は、公然たるものであった。

町奉行でさえが、賄賂を容れて、法を曲げた。

当時、南組吉野町に大店をはった辰巳屋久左衛門は、家産二百万両とうたわれ、手代だけでも、四百六十人を擁していた。

先代久左衛門の実弟木津屋吉兵衛は、本家の財産の横領を企て、むり強いに、養子当代久左衛門の後見になろうとした。

しかし、久左衛門と一番番頭新六は、叔父の後見を拒否した。

悶着の挙句、大阪町奉行所へ控訴という事態になった。

ところが、木津屋吉兵衛は、あらかじめ、東町奉行稲垣種信に、その用人馬場源四郎を通じて、多額の贈賄をしていた。

そこで、久左衛門とその番頭の訴状は、一議に及ばず、却下されてしまった。のみならず、番頭の新六は、程をわきまえぬ振舞い、と責められて、投獄されてしまった。

やむなく、二番番頭が、江戸へ出て、評定所門前の訴状箱へ、願書を投げ込んだ。

この願書が、将軍吉宗の目にとどき、関係者一同は江戸へ召喚された。

数回の吟味を経て、東町奉行稲垣種信、用人馬場源四郎、そして木津屋吉兵衛の罪状は、すべて露顕した。

東町奉行は、職を剝がれ、持高を半減された上に、閉門を仰せつけられ、その用人は死罪。それから、吉兵衛は、遠島に処せられた。

この騒動は、こうして目出度く決着したが、富商の家には、多かれすくなかれ、こうした争いは絶えずくりかえされているのであった。

九

「てまえのような貧乏な小盗人には、大阪の大町人のくらしぶりなど想像もつかぬことでございますが、当節、三万石や五万石の大名衆などは、足もとにも及ばぬぜいたくさという噂でございますね」

唐兵衛は、云った。

「…………」

狂四郎は、沈黙をつづけ乍ら、もう銚子を三本も空けていた。

「なにせ、ご公儀から下命の御用金が、莫大でございますからね。どこそこの御普請御手伝いに十万両、飢饉のため米価騰貴、窮民救済の義捐金五万両——といったあんばいに、なにかと、名目をつけて、ご公儀に奪いあげられるのでございますからね。こっちも、ぜいたくをしなけりゃ、損だ、ということになる。ぜいたく、というものはキリがないもので、それが、幾代かつづいているうちには、当主は、百万石のお殿様以上の誇りを持つようになる。そうなると、しまつがわるいもので……、大名衆は、台所が苦し

ゆうて、いくら威張っても、ヤリクリ算段に、家老衆と顔見合せて、溜息（ためいき）をつく夜もございましょうが、こっちは、なにせ、うなるほど蔵に金がある。それに、公方（くぼう）様へのご機嫌うかがいや、参覲（さんきん）交替や、家来衆の忠義に応えるための窮屈な振舞いや、礼儀三千威儀三百、というふんじばられかたをしていないのでございますからね。こんな気楽な身分はございますまい。加茂川の水を逆に流れさせることも、サイコロの目を思う通りに出すこともできる、と錯覚を起した、としてもふしぎはありませぬて」

「…………」

「初代、二代、せいぜい三代までが、始末して着ぬ一張羅（いっちょうら）、という質素と倹約の料簡（りょうけん）を守って、すべて、二一天作の五とはじいた上で、振舞って居りましたろうが、四代、五代ともなると、金儲けのしくみが、できあがってしまっていて、番頭手代まかせで、どんどん、蔵の千両箱は増える一方で、当主はもう何もすることはありませぬ。天下の町人、というおごった気分にもなるわけでございます」

唐兵衛は、日頃（ひごろ）胸に抱いていた憤懣（ふんまん）を、一時にぶちまけるように、よく喋（しゃべ）った。

たしかに、その通りであった。

薩摩の島津家の当主でさえも、参覲交替の途次、大阪へ立寄り、鴻池の店の前へ、乗物を停めて、自ら立ち出（いで）て、

「来年も、よしなに、たのむ」

と、頭を下げる時世なのであった。
その時、鴻池のあるじは、紋服こそつけるが、土下座などはせず、ただ、軽く黙礼をかえすだけである、という。
西鶴（さいかく）も、書いている。
『金銀が町人の氏系図なるぞかし』
金がすべてを支配する、という考えが、大阪町人の一切の行動の根となっているのであった。
江戸に、「天下の旗本」がいるならば、大阪には、「天下の町人」がいるのだ、という誇りも、金力が武力にとってかわったという現実を、身をもってさとった大阪商人の根性のしぶとさが生んだもの、といえる。
「辰巳屋久左衛門が、あろうことか、おのれの妾（めかけ）の一人に、尊いご身分の姫君を加えてやろう、という大それた野心を起したのも、天下の町人のおごった気分と申せます」
唐兵衛は、吐きすてるように、云った。
狂四郎が、その時、はじめて、長い沈黙をやぶって、
「姫宮は、もう大阪へつれて行かれたかどうか——つきとめたか？」
と、訊ねた。
「それがまだ、どうも、つきとめかねて居ります。あるいはもう、淀川夜船で送られた

のではあるまいか、と考えられます。大阪の辰巳屋の店の奥へ、つれ込まれた、ということになると、事はいささか、面倒になります。大商人の家は、大名屋敷よりも、警戒が厳重でございますからね。……どうなさいます？　大阪へお行きなさいますか？」

そう問われたが、狂四郎は、それにこたえるかわりに、ちょっと考えていたが、

「この京にも、辰巳屋の別荘があるだろう」

と、云った。

「それは、あると存じます」

唐兵衛がこたえると、狂四郎は、不意に、すっと、立ち上った。

「どちらへ？」

「辰巳屋の、その別荘へ行く。お前が、案内することだ」

「かしこまりました」

唐兵衛は、一瞬、顔をあかるい色に変えて、

「これア、面白いことに相成ります」

と、云った。

しかし、狂四郎は、歩き出し乍ら、

「面白いことになるかどうか……。もしかすれば、尻尾（しっぽ）を巻いて、退散することになるかも知れぬ」

と、こたえていた。

十

「荒れたものだ」

眠狂四郎は、総門の奥に、夜目にもはっきりと荒廃のすがたをさらしている等持院の境内を視やって、呟きすてておいて、通り過ぎた。

文化年間に、火災に罹って、それなりになっていた。足利氏十三代衣冠の木像及び尊氏の墳墓のある寺院など、すすんで修復しようとする者はなかったのである。

等持院をまわると、衣笠山である。

「あそこでございます。……ほれ、林の中に、灯が洩れて居ります」

うしろを歩いていた唐兵衛が、肩をならべると、指さした。

「むかしは、内大臣の別荘があり、いまは、大阪町人の別荘があるのか。時世も変ったものだ」

狂四郎は、云った。

藤原家良の古歌は、いまも、どこかそこいらの路傍に、石碑へ刻まれてのこっている筈であった。

はるかなる都のいぬゐ我宿は大内山の麓なりけり

宇多法皇が、水無月の炎暑に、深雪の景色をつくろうと思いつかれて、白い絹を松の梢にかけられたこの山も、いまは、その豊かにして迫らざる山容は、ありあまる金力にもの云わせる大阪の商人の観賞するものとなっている。

松の疎林をくぐって、狂四郎は、風雅なたたずまいの屋敷の前に立つと、

「待っていてもらおう」

「町人は、要心ぶかいものでございます。お気をつけなさいまし」

唐兵衛は、忠告した。

辰巳屋久左衛門が、こっそりと、この別荘へ静養に来ていることを、唐兵衛はつきとめてくれたのである。

大町人が、大名よりも、身辺の警戒を厳重にしていることは、狂四郎も、先刻承知であった。ただ、こちらは、常に、おのが身を危険な場所にはこび入れることによって、事を片づけているのであった。そこがたとえ死地であっても、足をふみ込むことをはばからぬように、身心をきたえてあった。

狂四郎は、ふところから両手を抜きもせずに、庭へ入った。

灯かげは、別棟の壁に切られた丸窓に、あった。

念のために、そこへ忍び寄って、隙間からのぞいてみた。茶室になっていた。人影は

なかったが点前がおわった直後の様子であった。炉に火が入っていたし、釜の湯もわいていたのである。

狂四郎は、母屋の前にひきかえすと、音をたてぬようにして雨戸を一枚はずした。

縁側へ、あがった瞬間――縁板を踏むか踏まぬうちに、鈴の音が、右からも左からも、起った。

「風雅な仕掛けだ」

狂四郎は、苦笑した。夜になると、縁側が鳴るようにしておくのだ。

大名屋敷のように、部屋の外へ、二基ばかり、金網行燈が据えてあった。

身をかくすいとまもなく、障子を開けて出て来た者たちの視線に、狂四郎は、姿をさらした。

右側に一人、左側に一人、いずれも、若い女中であった。

女であることに、安堵するのは、はやかった。

二人は、同時に、帯のあいだから、短銃を抜きとって、狙いつけて来た。

――女中たちに、鉄砲撃ちを教えているとは、大名も見習ってよいことだな。

狂四郎は、そう思い乍ら、歩き出そうとした。

「動かれるな!」

一人が、鋭く叱咤した。

「捕虜になったことをみとめる。あるじのところへ案内してもらおう」
狂四郎は、云った。
すると、別の部屋の障子が開いて、これはやや年配の女中が現れて、ひややかに狂四郎へ一瞥（いちべつ）をくれると、若い女中たちに、
「その部屋へ――」
入れておけ、と命じておいて、
「お名は？」
と、狂四郎に問い、すっと、奥へ歩いて行った。
据えられた部屋は、狂四郎が知る武家の屋敷には見られぬぜいたくなものだった。
欄間を泳ぐ錦鯉（にしきごい）のうろこは、純金に相違なかったし、床の間には、獅子（しし）台の和蘭（オランダ）時計が、ゆっくりと時を刻んでいた。
若い女中たちは、一間の距離を置いて、前後に坐って、銃口を、じっと、狂四郎の胸に狙いつけたまま、無表情であった。
いずれも美しい顔だちであったし、袖口（そでぐち）から紅絹（もみ）をこぼし乍ら、白い手に短銃を摑んだ風情（ふぜい）は、一種妖（あや）しい色気があった。
狂四郎は、腕を組んで、正面の女中の眸子（ひとみ）を、視線にとらえて、それなり、微動もしなかった。

女中は、短銃の撃ちかたには熟達の域にいたっているかも知れないが、このような冷たく冴えた眼眸に見据えられて、これを、一瞬もはずさずに、長く受けとめることは、習っていないようであった。

微かにまばたきすると、目を伏せた。

――どうやら、この警戒ぶりは、他愛がないものらしい。

狂四郎が、胸裡で呟いた時、跫音が、近づいた。

十一

入って来た辰巳屋久左衛門は、町人らしからぬ、堂々たる偉丈夫であった。秀でた額、盛りあがった鼻梁、ひきしまった口もと、そして、逞しくいかった肩など、熨斗目の方が、似合いそうであった。

「眠狂四郎様と申されます？」

久左衛門は、強い光のある眼眸を向けて来た。

「はじめてきいた、とは云わぬであろう」

「壬生狂言で、悪戯をなされたとか……」

「お主が、仙洞御所へはこび入れた二千両を、貰った」

「当節は、ご浪人衆も、土蔵破りをしなさる！」
「時と場合によってはだ。……辰巳屋、高貴の姫宮を買った存念を、きかせてもらおうか」
「買った、と申される――」
久左衛門は、はじめて、薄ら笑った。
「三千両で、買った事実を、否定できまい」
「買ったのではなくて、売りつけられた、と申したらいけませぬかな」
「同じことだろう」
「とんでもない。大変なちがいですて。てまえは、ごらんの通り、商人でありましてな。始末、算用、才覚で生きて居ります。損を覚悟で取引をする、などということは考えられません。……たとえ絶世の美人であっても、二十年経てば、男は振り向きもせぬ婆さんになる。それにひきかえて、三千両は二十年経っても三千両。これア、取引にはなりますまい」
「ところが、結果は、その美女を、三千両で買う取引をしている。大阪商人には、分を越えず、分を下らぬ分限意識がある、ときいて居ったが、何百万両もたくわえると、身の程を忘れて、高貴の姫宮を、妾の一人に加えたくなるものらしいな」
「無理矢理に、そうきめておしまいなさるなら、そうしておきましょう。……で、どう

しろ、と仰言る？」
「もう一度、損な取引をしてもらおう」
「損な取引を？」
「二千両で、姫宮を買いもどしたい」
「眠様——」
久左衛門は、一瞬、侮蔑をこめた表情になると、
「貴方は、いま、てまえの捕虜になっておいでだ。あまり大きな口をたたきなさるまい」
「…………」
「この女中たちは、五間の距離を置いて、鶏の卵を打ち砕いてみせるだけの腕前を持って居りますよ。貴方は身動きもできぬ捕虜だ。これまで、強い敵と、さんざ闘って勝ちのこったうぬぼれから、女子風情が何程のことがあろう、とあなどられるのは、とんだ大まちがいだ。等持院には、てまえの頤ひとつで、黙って、屍体を葬ってくれる納所もいる。……誰様にやとわれなさったか知らぬが、勝手のちがったところへ、のこのこ押し入って来るのは、止めなさるがいい。おとなしく出て行って、はずした雨戸もちゃんと閉めておかれるなら、こちらは、何もなかったことにする度量はあるのだ」
「大阪の大商人ともなると、寛大なものだな」

狂四郎は、口辺に、冷たい微笑を刷いた。
「あいにく、この眠狂四郎は、いったん乗りかかった船から、降りたためしはない」
「そのうぬぼれが、今夜は、通らぬと申し上げているのだ」
「通るか、通らぬか——女中どもに、一発、撃たせてみるか？」
「おのぞみなら——」
辰巳屋久左衛門は、別人のように残忍な表情になった。
不気味な沈黙が、そのあとに来た。
久左衛門が、すっと立った。
次の刹那(せつな)——。
二挺(ちょう)の短銃が、轟然(ごうぜん)と火を噴いた。
同時に、狂四郎の前と後の畳が、生きもののごとく、ぱっとはねあがった。
屏風(びょうぶ)と化して立った畳の蔭(かげ)から、風の迅(はや)さですべり出た狂四郎は、あわてて後退しようとする久左衛門ののどもとへ、無想正宗を、突きつけた。
「…………」
久左衛門は、息をのんで、言葉もなかった。
前の畳を片手ではねあげると同時に、うしろの畳を、刀の鐺(こじり)ではねあげて、二発の弾(た)丸(ま)をふせいでみせた迅業は、人間業とは思われなかった。

狂四郎は、女中たちが握っている短銃が、一発籠(ご)め、と看てとって、悠々(ゆうゆう)と、切先(きっさき)を久左衛門の咽喉(のど)へ擬したのである。

「こっちのうぬぼれが通ったな、辰巳屋」

「………」

「さっき、のぞいた茶室には、点前がおわったばかりの空気があった。お主が、姫宮に茶をたてさせたのではなかったか？……姫宮のところへ、案内してもらおう」

「………」

「こんどは、こっちが、大見得をきる番だが、刀を抜いた以上、刀の方にもの云わせるのに馴(な)れている。早くしてもらおう！」

十二

茶室の奥に、かくし部屋が設けてあることは、狂四郎の予測した通りであった。

久左衛門を先に立ててその部屋の前に来ると、

「辰巳屋、ことわっておくが、こちらは、姫宮を拉致(らち)しに来た者ではない。あくまで、当人の意志を重んじて、談合する。お主の妾になるのがいやだ、というのであれば、連れて行く」

「勝手にしなされ」

久左衛門は、吐きすてた。いさぎよく兜をぬいだかたちであった。あきらめはよいのかも知れなかった。

高貴の姫宮を三千両で買ったことに、ひどい無理があったことは、みとめていたに相違ない。

こういう結果も、予想できた筈である。

狂四郎は、その部屋に入った。

さがしあてたそのひとは、白ひと色の衣裳をまとい、顔も、白絹で包んでいた。

目もとのすずしさは、たぐい稀なものであった。

気品が、すがたぜんたいから、花の香のように、こぼれている。

「問答を許されい」

狂四郎は、対座すると、まず、そう云った。

「…………」

すずやかな双眸は、黙って、狂四郎を瞶めかえした。

「おん身を、この大阪町人の別荘へ移されたのは、ご自身の意志ではなかった、と存ずる」

「…………」

「高貴のご身分が、自ら進んで、町人のもてあそびものにおなりになる筈もない、と存ずる」
「………………」
「それとも、全く、何もご存じなくして、御所をお出になったのか。……辰巳屋久左衛門が、おん身を申し受けたく、三千両を献じたこと、ご存じでありましょうか？」
狂四郎は、訊ねた。
やや、間があって、
「存じて居ります」
その返辞があった。
「では、生贄（いけにえ）になることをお覚悟の上で、ここへ参られましたか？」
「はい」
「けなげなお心作ら、これは、世間の常識では、考えられぬところ。いかに、金次第の世の中とは申せ、高貴のおん身を、三千両でお売りになるとは、仙洞御所には、あまりにあさましい料簡を起されたものだ、と申し上げねばならぬ。貴女様（あなた）には、なぜ、かぶりをお振りにならなんだのか？」
「………………」
「御所のお養育のしかたは、一切かぶりを横に振らせぬのか？　下俗のわれわれには、

想像いたしかねる」
「いいえ！」
白絹で包んだ顔が、振られた。
「この儀は、わたくしの意志でありまする」
「…………？」
「御所の貧しいくらしは、その方らには、とうていわかりませぬ。わたくしは、その貧しいくらしが、いやに相成りました」
意外な言葉が、綺麗な澄んだ声音で、きかされた。
狂四郎は、鋭く、見据えたなり、言葉もなかった。
――どういうのだ？
人身御供の立場に置かれた清浄無垢の乙女が、なんのはばかるところもなく、貧しさがいやだから町人の妾になっても、ぜいたくなくらしをしたい、と云うのだ。
「わたくしを、さげすみますか？」
「いや、さげすみはいたさぬ。しかし、意外なお言葉に、正直とまどうて居ります」
「いたずらに身分ばかり高く、それに、ともならうくらし向きが、貧しくては、心が、ひねくれもいたしまする。わたくしは、のびのびとしたくらしが、したくなりました。辰巳屋は、わたくしの希望をなんなりと叶える、と申します」

「………」
「おひきとりなさい。わたくしは、もう、御所へ、もどる意志は、すこしもありませぬ」
「成程――」
狂四郎は、苦笑した。
「貴女様が、そう仰せられるならば、こちらは、力ずくでお連れするのは、間が抜けたことに相成る」
狂四郎は、一礼すると、立ち上った。負けたのである。
廊下へ出て歩き出すと、むこうのはしに、辰巳屋久左衛門の姿があった。
「眠様、手ぶらで、お帰りなさるか？」
「そういうことに相成った」
狂四郎は、わるびれなかった。
「お気の毒だ、と申し上げなければなりませんな」
「辰巳屋。これで、勝負がついたわけではない」
「どういうことでありましょうな？」
「出直す、と云っているのだ。どういうものか、おれという男は、自分でも思いがけぬ局面転回で、勝つようにできている。こんども、そういう気がする」

そう云いすてると、わきを通り抜けた。
見送る辰巳屋は、ほっと吐息した。
「男が惚れたくなる男というのは、ああいうのか」
その呟きをもらした。

十三

夜明けの霧が、雙ケ岡の麓を、帯のように巻いているなかを、眠狂四郎は、ふところ手で、歩いていた。
北野の辻の夜明し屋台で、したたか飲んでいた。酔っても足どりの乱れる男ではなかったが、ひさしぶりに酔眼のさだまらぬ陶然たる心地であった。
やはり、辰巳屋の寮での、姫宮の言葉がこたえたとみえる。鬱憤——そんな気分が、酒の量を増したらしい。
松林の中を、ゆっくりとひろって、一ノ岡の草庵を、むこうに見出した時、霧から生れたように、行手をさえぎった者があった。
「眠狂四郎殿か？」
「左様——」

立ちどまって、酔眼を据えた。
黒い影が、二重になった。
――刺客を対手にするには、酔いすぎたようだ。
狂四郎は、自分に呟いた。
「生命を申し受ける」
対手は、そう云いはなつや、携げていた刀の鞘をはらった。
一瞬、狂四郎は、わが目を疑った。
対手が、中段高めに構えた刀身が、五尺の長さだったのである。酔眼の錯覚か、と思った。
しかし、それは、まちがいなく、五尺の長剣であった。
「膂力がおありとみえる」
狂四郎は、云った。
「天心一刀流・南紀市兵衛」
対手は、名のると、間合を詰めて来た。
狂四郎は、酔眼をほそめた。
――できる！
そうみとめたものの、この長剣をどう使うか、判断する思考の力がにぶっていた。

地摺りに落した無想正宗に、まかせるよりほかはあるまい。そんな、なげやりな気持であった。
宙を截って、長剣が唸った刹那、狂四郎は、反射的に、数尺を跳び退った。
背中が松の幹にぶっつかり、よろめいたところへ、凄じい第二撃が襲って来た。
首ひとつひねって、辛じて躱した狂四郎は、敵の業の冴えに、酔いのふっとぶのをおぼえた。
一颯の刃風の中で、松の幹が両断され、悲鳴のように枝葉が鳴って、地へ墜ちた。
その時、狂四郎は、次の松に倚っていた。
松と松の間隔が、五尺の長剣の横薙ぎの業をはばんでいることに、ようやく気がついて、狂四郎は、にやりとした。
「お主――」
わざと、声をかけた。
「上下のみにふるう業では、この眠狂四郎は、斬れぬ！」
「…………」
南紀市兵衛は、応えずに、じりじりと肉薄して来た。
これほど異常な長さの剣ならば、突きが得手になるのが常識であろうが、それを使わぬのは、こちらの手練を知っている証拠であった。

突きに失敗した時には、むしろ、五尺の長さは、邪魔になる。手元に引くいとまもなしに、敵からとび込まれてしまう。

したがって、南紀市兵衛としては、もっぱら、上段から斬りおろす一手しかないわけであった。

間合がきまるや、狂四郎は、無想正宗の刃を上にかえした。

南紀市兵衛は、一歩踏み込みざま、

「えい！」

凄じい気合とともに、斬り下した。

瞬間——狂四郎の身が沈んだ。

五尺の白刃は、狂四郎が後楯にしていた松の幹を縦に裂いて、狂四郎の頭上へ、紙一重で停った。

松もろとも狂四郎を両断しようとしたのは、よほど膂力と気合に自信があったことである。

もし、狂四郎が、身を沈めなければ、その予測通りに、両断されていたに相違ない。

狂四郎は、振り下されて停止する高さを、正確に知って、身を沈めつつ、刃をかえした無想正宗を、はねあげていた。

南紀市兵衛の顔面は、ま二つに割れて、血汐を、霧の中へ華やかな飛沫にした。

十四

草庵に戻って、炉の切ってある部屋に腰を下すと、すぐに、唐兵衛が、姿を現した。
「土産物がございます」
唐兵衛は、微笑し乍ら、云った。
「土産物？」
「はい。辰巳屋の別荘から、頂戴して参りました」
「…………？」
「貴方様がおひきあげになった直後、さすがの辰巳屋も、油断が生じましたので、その隙（すき）に――」
「そうか。これは、気のきいた土産物だ。礼を云う」
狂四郎は、立ちあがると、奥の部屋へ、入った。
床柱へ、後手にくくりつけられているのは、姫宮であった。
俯向（うつむ）いたその相貌（そうぼう）を、一瞥して、狂四郎は、思わず、息をのんだ。
美しかった。
これほど完全に整った美貌を持つ女性（にょしょう）が、この世にいたのか、と一瞬われを忘れる思

いであった。
　泰山木の花びらのように、ふっくらと厚みをもった白い肌や、絳唇という形容のふさわしい佳いかたちの、蘭の香でも含んだような唇など、女身の情がここに凝ったといえる。
　しばらく、茫然として立ちつくす狂四郎に向って、姫君は、ようやく、顔を擡げた。
「わたくしを、どうなさる、というのです？」
　言葉では咎めたが、その澄んだ眸子は、ただ美しく光っているばかりであった。
　狂四郎は、われにかえったように、近寄ると、柱へ両手をくりつけた細引を解いた。
　自由の身になると、姫君は、
「御所へ送って下さい」
　と、云った。
　その視線を受けとめた狂四郎の眼眸は、いつものこの男のものになって、冷たく冴えていた。
「辰巳屋の妾になることは、思いかえされたか！」
「はい」
「もう、手おくれのようだ」
「え？」

姫君は、眉宇をひそめた。

「辰巳屋の寮で、わたしがおすすめした時、思いかえされていたならば、まだ、間に合ったかも知れぬ。ここへおいでねがったからには、もう、手おくれだ、と申し上げなければならぬ」

「それは……。どういう意味なのですか？」

問いかえした姫君は、はじめて、その美しい貌に、微かな恐怖の色を刷いた。

「市井で、放埒無頼の限りをつくした浪人者が、おん身をとりこにいたしたのだ。ただでは、おかえし出来ぬ」

「………」

「その美しいおからだを、頂戴いたすことになる」

「無礼な！」

「左様——、無礼は承知の上で、頂戴いたすのだ。これほどの美しい女体を抱くのは、男冥利につきる浮世の法楽——」

突如、姫君は、かくし持った懐剣を抜きはなって、突きかけて来た。

苦もなく、その懐剣をもぎとってから、なお、手くびを摑んだまま、狂四郎は、その時、妙な言葉を、姫宮へあびせた。

「この手が、顔ほどに美しければ、このような狼藉は、恐れ多くて、働きはいたさぬ

が……」

すると、姫宮は、急に、抵抗する力をすてて、全身を、微かにおののかした。

狂四郎は、その場へ、女身を押し倒すと、裳裾を容赦なく左右へ散らさせた。

生皮を剝がれた檜の幹のように、しっとりと潤みをおびた白い脛が、膝が、太腿が、春の朝の冷気の中に、あらわにされた。

おそらくは、この清浄な下肢は、白絹に包まれたまま、曾て一度も、男の目にふれたことはなかったに相違ない。

羞恥の本能で、ひしと膝を合して、腰をねじりつつ、前をかくそうとするのが、いじらしく、いたましかった。

数知れぬ人間をあの世へ送った手が、容赦なく、その膝を、ひらかせた。

半刻ののち、狂四郎が、炉のある部屋へ、戻って来ると、粗朶火へ、視線を落して動かずにいた唐兵衛は、ひとつ、溜息をもらした。

その溜息で、唐兵衛が、すでに、奥の部屋で何が起ったか、察知していたことをあきらかにした。

狂四郎が、炉ばたに坐ると、唐兵衛は、依然として、粗朶火を瞶めたなりで、

「むごいことでございました」

と、呟くように云った。
「むごい？」
狂四郎は、冷やかに、唐兵衛を視た。
「お前は、御所に対して、憎しみを抱いている男ではなかったのか？」
「はい」
唐兵衛は、はじめて、みとめた。
「むかし、弟が、御所に仕えて居りました。苗字を頂戴して、羽織袴の仕丁に出世して、有難いことだ、と云いあって居りました。……それが、ある年の夏、死骸になって、戻って参りました。……男の物が、むざんに、切り落されて――」
「………」
「お公卿衆というものは、表面では、優雅なくらしをなされているが、蔭では、どんなあさましい振舞いをしているか、およそ想像がつくことでございました。てまえの弟は、てまえとは似もつかぬ男振りでございましたのでね」
「………」
「旦那！」
唐兵衛は、はじめて、視線を狂四郎に向けた。怒りの色があった。
「だからこそ、こちら側は、むごいことは、したくないのでございます。はっきりと申

します。旦那を、見そこないました。……てまえが、ここへ、姫宮様をおつれしたのが、いけなかった。しかし、まさか、旦那が、あのような料簡を起されるとは、夢にも考えては居りませんでしたのでね。……これア、恥でございますよ」
「唐兵衛――」
狂四郎は、薄ら笑い乍ら、云った。
「あれは、姫宮ではない」
「えっ?!」
唐兵衛は、愕然となった。
「替玉だ」
「ど、どうして、替玉とおわかりになります？」
「手が、ちがっていた、手が――」
「手？」
「あの娘の手は、働いたことのある手だ。姫宮が、洗濯や炊事などやるであろうか。……しかし、わたしは、その手だけでは、まだ、はっきりと替玉とは断定しかねた。貧しい御所では、姫宮も、手ずから洗濯炊事をされることもあり得る。……そこで、試した」
「…………」

「あの娘は、生娘ではなかった。おそらく、公卿の一人が、手ごめにして、因果を含ませたに相違ない」
「そ、そうでございましたか」
唐兵衛は、大きく吐息した。
「それにしても、よくも、まあ、あのように美しい娘を、さがし出したものでございますね」
「辰巳屋から、三千両まきあげるには、それだけの努力は必要であったろう。唐兵衛、もしかすれば、あの娘は、お前の故郷の淡路の出かも知れぬぞ」
「まさか――」
「替玉と判れば、御所へかえすことはない。辰巳屋の別荘へ、送りかえしてやってくれ」
そう云いおいて、狂四郎は、横になると、手枕して、目蓋を閉じた。

十五

桜もおわって、急に、肌が汗ばむ季節が来ていた。京の四季は、移り変りが早いようであった。

眠狂四郎は、八坂の塔の東から、清水寺に至る三年坂を、ひろっていた。

この坂は、清水坂の支坂であった。清水寺の泰産堂があったので、産寧坂と称ばれていたのが、転じて呼びやすく、三年坂になった。

この坂でころんだ者は、あと三年のうちに寿命が尽きるという迷信ができていて、そのためか、人の往来は、まれであった。

葛餅を売る茶店が、坂の途中にあった。

その前を行き過ぎようとすると、

「お寄りなさいませ」

美しい声が、かかった。

何気なく、視線を向けて、狂四郎は、はっとして、眉宇をひそめた。

眉を落し、歯を黒く染め、盲縞の筒袖に、赤い前掛をつけた茶店の女あるじは、まぎれもなく、姫宮——いや、姫宮の替玉となっていた娘であった。

唐兵衛に、辰巳屋へ送りとどけさせて、それきり忘れていたのである。

狂四郎は、落間に入ると、

「ここのおかみになっているとは、意外だ」

と、怪訝の眼眸を当てた。

女は、にっこりして、

「あるじに命じられまして──」
と、こたえた。
「あるじ？　辰巳屋が、そなたにこの店を出させたのか！」
「はい」
「御寮はんになっていたのではないのか。奇妙なはなしだ」
その時、奥から、
「お京、できたよ」
と、呼んだ。
その声に、ききおぼえがあった。
女が、葛餅を受けとって出て来るのを待って、
「あれは、辰巳屋ではないのか？」
と、訊ねてみた。
「はい──」
「どういうのだ？」
「隠居して、ここに移って来て居ります」
「そうか」
狂四郎は、合点(がてん)した。

——辰巳屋は、替玉と知っていて、三千両で買ったのだ。

あらゆるぜいたくをつくしてみて、ふと思いついた隠居ぐらしが、この小さな茶店であったのだ。

——そうか。あの折、すでに、辰巳屋の心の裡には、この茶店で、この娘とくらす計画が、あったのだ。

狂四郎は、茶代を置いて、腰を上げた。

「有難う存じました」

女は、ふつうの見知らぬ客を送り出す態度で、頭を下げた。

それが、狂四郎には、気持がよかった。

「おころびなさらぬようにお気をつけなさいませ」

その言葉に送られて、歩き出した狂四郎は、

——京のくらしもよいものだ。

そう思った。

消えた兇器（きょうき）

一

　　ちらりと姿を、三囲(みめぐり)の
　　仇(あだ)し契りを枕橋(まくらばし)、と来た
巾着切(きんちゃくきり)の金八(きんぱち)が、やぞうをきめて、とっとと、小走りに、言問橋(ことといばし)を、渡って来た。
　　恋の闇路(やみじ)に言問いの
　　お茶屋がとりもつ
　　縁かいな
そのお茶屋ののれんをはねて、
「ほい、ご免よ。お雪ちゃん、うちの先生は、ここかい？」
と、訊(たず)ねた。
赤いちりめんのたすきと前かけをつけた娘は、うなずいて、二階を指さした。
金八は、すれちがいがけに、その臀(しり)をすばやく撫(な)でて、
「そうかい、ここかい、二階かい。……お雪ちゃん、おめえ、うちの先生に、二階を占

領されて、男と逢う場所がなくなったろう」

「男なんて……」

「へへ、かくすな。その器量じゃ、松吉とか竹太とか、おめでてえ情夫がいらアな。可哀そうにうちの先生も野暮天だあ」

とんとんと、階段をのぼり乍ら、

「松と竹との話をきけば、雪と寝た夜は苦労した。畜生、今年になって、やけに、雪が降りやがる」

今朝も、江戸は銀世界で、金八は、ここへ来るまでに、二度ばかり、ひっくりかえっている。

障子を開けると、眠狂四郎が、炬燵に足を入れて、仰臥していた。

巾着切でも、作法は心得ていて、炬燵に入ろうとせず、

「えへん、国家昏乱して忠臣出で、街に異変起って金八現わる。先生、岡っ引や巾着切の脳みそでは、どうにも判断できねえ事件が起きましたぜ」

と、云った。

「云ってみろ」

狂四郎は、目蓋をとじたまま、促した。

蒼白な面貌に、相変らず、虚無の翳が濃い。生きることになんの執着も持たずに生き

ていると、しかし、その妖しい虚無の翳も、いっそ、知命の士の静けさに通じているものであろうか。

「三千石の旗本のご大身が、湯殿の中で、お陀仏でさあ。湯につかって、謡かなんか、うなっているところを、殺られたんですがね、その殺られかたが、ちんぷんかんぷんと来てやがる」

「……………」

「湯殿には、一緒に、湯もじ一枚の若い女中が入っていた。生娘だから、殿様のはだかをまともに見ちゃいられませんや。隅っこにひかえて、うつ向いていたところが、謡をうなっていた殿様が、不意に、げっと呻いたんでさ。びっくりして、顔をあげると、殿様は、いったん、ぶくぶくっと沈んでから、首を突き出した時には、もう、断末魔のもの凄い形相になってやがった。湯槽の中は、たちまち、血の海。女中め、仰天して、家来たちがとび込んで来てみると、観音様をご開帳あらせられて、てんかんみてえに、口から泡を吹いて、ひきつけていやがったそうでさ」

「……………」

「気がついてから、いろいろ尋問してみたが、さっぱり、要領を得ねえ。ぎゃっ、ぶくぶく、血の海——それっきりしか、おぼえていねえ」

狂四郎は、目蓋をとじたまま、きいているのか、いないのか、わからぬ。微動もせぬ。

「殿様はね、背中を、ぐさっと刺されていたんですがね、さて、何で突かれたか、そいつが、どこにも見当らねえんだから、奇妙奇天烈ってわけでさ」

「湯殿に、兇器が落ちていなかった、というのか？」

「そうでさ。たしかに、殿様の背中には穴があいちまったのに、穴をあけたしろものがねえんだから、こいつは、全く判じものでさあ」

狂四郎は、起き上ると、炬燵の上の冷酒を、茶碗についで、ひと息にのんだ。

「いつのことだ？」

「昨夜のことでさ。雪はしんしん降りつもる、恰度時刻も丑の刻――。殿様は、妾とひと合戦やったあとで、湯に入るくせがあったんでござんすね。肥って、汗っかきだったに相違ねえ。おっと、そんなことより、敵は、ちゃんと、去年の暮から、殺るぞ殺るぞ、と脅していたそうでさ。流石は、三千石のご大身だあ、糞くらえと、屁でもないつもりだったところが、いけねえ、敵は、天狗の術を心得ていやがった。という次第で、先生のお知恵拝借と来た」

外聞をはばかる事件なので、奉行所にたのむわけにいかず、用人が、西丸老中水野越前守の上屋敷へやって来て、側頭役の武部仙十郎に、平伏したのであった。

仙十郎は、すぐに、金八を呼んで、狂四郎をつれて来い、と命じたのである。

二

大番頭、三千石の布衣であった石脇内蔵助信親は、去年大阪在番をおわって、帰府し、最近出仕を止めて小普請に入った人物であった。

大阪在番中に、何か不正の行動があったために、小普請入りになった模様であるが、お咎め小普請ではなく、役寄合になっていた。先代が、若年寄の下にあって、中川番衆として、江戸海辺の交通について大いに功績があったためであろう。

内蔵助は、豪放磊落の気性で、あまり閣老に頭を下げたりせず、貧しい小普請旗本たちの面倒をみて、いわば、八万騎中の親分格であった。金も散じ、酒もよく飲み、女色の点でも相当であった。大阪在番時には、大阪町人たちが、せっせと、贈賄して来たが、平気で受けとっておいて、いざとなると、公の席上で、これをあばいて、金品を突き返す芸当も演じてみせて、人気とうらみを半々に買ったりした。

旗本のうちでは、一種の型破りの存在であった、といえる。

石脇邸に、何者とも知れず、奇怪ないやがらせが、されはじめたのは、昨年暮からであった。

贈賄品とみせかけて、大きな包みものがおくりとどけられ、ひらいてみると、猫の死

骸が出て来た。

　また、内蔵助が登城すべく、駕籠に乗ろうとすると、その中に、白蛇がとぐろを巻いていた。

　その程度の悪戯ならば、見のがすことができたが、ゆるすべからざるいやがらせが、正月早々に、なされた。

　一昼夜降りつづいた雪がやんで、美しく晴れた朝、書院の前の庭に、誰が作ったか、大きな雪だるまが、忽然として据わっていた。

　のみならず、その腹には、赤い南天の実で、

「死霊」

　という文字が描かれてあった。

　家来たちがとり除こうとすると、内蔵助は、とどめて、

「そのまま、すてておけ」

　と、命じた。

　翌日、あたたかい陽ざしに、雪だるまは、溶けた。

　その中から、現われたのは、一糸まとわぬ若い女の死体であった。

　奥に勤めていた女中の一人で、三日ばかり前に、姿を消していたのである。

　気絶させられたまま、雪だるまにされたものであろう。どこにも傷はなく、死顔

にも苦悶の色を、とどめていなかった。
下手人は、当然、邸内の者と判断できたが、誰であるか、見当もつかないままに、日が過ぎた。
内蔵助は、こういう残忍な悪戯に対して、べつに、躍起にはならなかった。
「どうやら、さいごには、わしの生命を狙う模様じゃが、まあ、討てるものなら、討つがよかろう」
平然として、そう云っていた、という。
内心、心あたりはあったに相違ないが、邸内の誰をも、吟味しようとはしなかった。
で――。
ついに、予想通りに、内蔵助は、殪された。
勿論、女中の死体が雪だるまの中から現われて以来、用人の指令によって、内蔵助の身辺は、昼夜、かなり厳重に護衛されていたのであった。
げんに――。
内蔵助が、湯殿に入った時も、ふつうならば、湯番の女中は、襷がけで、裾をからげただけで入るのであるが、湯もじ一枚にされていたし、また、脱衣の間には、宿直の士が二人、詰めていたのである。
だから、女中の悲鳴をきくやいなや、かれらは、板敷へとび込んでいたのである。内

蔵助が、げっと呻くのはきこえなかったが、いったん湯の中へ沈んだ内蔵助が、断末魔の形相を突き出したのを視て、女中が悲鳴をほとばしらせるまでは、ほんのわずかの時間にすぎなかった筈である。その護衛に落度があったとはいえぬ。

まことに、奇怪であったのは、内蔵助の背中には、ふかぶかと、刺し傷がのこされたにも拘らず、刺した兇器は、浴槽の中にはもとより、板敷にも落ちてはいなかった。いや、常識としては、その背中に、兇器が突き立っていなければならなかった。

家中の推理は、ふたつ――。

ひとつは、高いところに切られている明窓から、紐つきの短剣を投じて、内蔵助の背中を刺しておいて、さっと、たぐりあげてしまったこと。

もうひとつは、湯もじ一枚の女中が、股間に短剣をかくしておいて、隙をうかがって、内蔵助の背中を刺しておいて、その兇器を、窓から外へ投げすててしまったこと。

しかし、このふたつの手段も、すぐに否定されなければならなかった。

前者の手段をとったとすれば、紐でたぐりあげられる時、短剣からしたたった血汐は、板敷にも、板壁にも付着している筈であった。どこにも、血は落ちていなかった。

後者の場合は、不可能はさらに明白であった。十八歳の生娘は、すでに衣裳をつける際に、三十余年も勤めている老女の監視下にあったし、その素姓もあきらかで、怪しむべきふしは何ひとつなく、また殿様を殺す度胸などあろうとは思えなかった。また、窓

の外に、兇器は投げられていなかった。
では、窓の外に忍んだ者と、生娘との共謀であったという推理は、どうであろうか。
手裏剣の名手が、紐つきの短剣を投じて、内蔵助の背中を、刺した。女中が、すばやく抜きとって、血を洗う。紐はたぐられ、短剣をとりもどした曲者(くせもの)は、にげ去り、女中は、悲鳴をあげて失神を装う。
考えられないことではなかった。
とすれば、女中は、まことに巧妙な仮面をかぶった悪女ということになる。
人々の目には、絶対に、そうは映らなかった。
内気で、やさしい生娘でしかなかった。
やはり、通り魔のような曲者が、高窓へ忍び寄って、内蔵助を殺したと、考えたかった。
霏々(ひひ)として降りしきった雪は、忍び寄った痕跡(こんせき)を消してしまっていた。

三

遺骸を安置した仏間に、香煙がたち罩(こ)め、詰めた家中一同は、しわぶきひとつせずに、沈黙をまもっていた。

そこへ、すっと入って来た黒の着流しの眠狂四郎は、合掌もせずに、
「ご免――」
と、ことわって、掛具をはねると、遺骸をごろっと俯伏させた。
白羽二重の死装束を、容赦なく脱がせて、背中の傷を、一瞥した狂四郎は、眉宇に、かすかな困惑の色を刷いた。
それは、槍で突いたのでも、手裏剣で刺したのでもなかった。
もっとちがった兇器で撃った傷であった。その兇器は、狂四郎にも、見当がつかなかった。
狂四郎は、仏間を出ると、老女の案内で、湯殿へむかった。
湯殿は、どの旗本屋敷にもありふれたつくりで、昼なお薄暗く、灯を必要とした。ただ、板敷も板壁も浴槽も、最近に替えられたばかりで、木の香がしていた。
明窓は、はるかな高処に、二尺四方ぐらいは切られていて、菱格子がはめられてある。せいぜい、腕一本がさし入れられる程度である。
もし、ここから、兇器を撃ったとすれば、よほどの達人に相違ない。
狂四郎は、書院にもどると、用人と対座した。
「夫人にお目にかかれますか？」
「あいにく、奥方様は、中風にて、三年ばかり前より、お牀に就かれたきりでござる」

「起き上ることは叶いませんか？」
「左様、とてもご自身のお力では……」
と、こたえてから、用人は、はっと狼狽の気色を示した。
「どうされた？」
狂四郎は、薄ら笑い乍ら、訊ねた。
「い、いや、別に――」
「かくされておいでだが、それも云って頂こう」
「なんでもござらぬ。ただ、奥方様が、ご自身で起き上ることもでき申さぬのは、それがしの目で見とどけて居り申す。お手前が、奥方様を、疑うような口ぶりをなされたので、それがしは……」
「これは、妙だ。わたしは、夫人に嫌疑などかけたおぼえはない。夫人については、いまはじめて、貴方におうかがいするのだ。貴方の方で、勝手に狼狽されたのは、貴方ご自身が、夫人を怪しい、と疑われたからではないのか？」
「い、いや、そのような……滅相もござらぬ」
視線をそむけた用人を、冷やかに見据えていた狂四郎は、
「次におうかがいしたいのは、雪だるまにされた女中のことですが……」
と、云った。

用人は、ほっとしたように、狂四郎を見かえした。

「御主人は、その女中に、手をつけておいでだったか、どうか——これは、たしかなことをうかがいたい」

用人は俯向(うつむ)いて、ひくい声音で、

「お手つきであり申した」

と、こたえた。

「湯殿付きの女中を、ここへお呼び頂こう」

その女中は、次の間に据えられていたので、すぐ、ひき出された。うしろ手に縛りあげられていた。

小柄(こがら)な、ういういしい娘であった。

おそろしい衝撃をうけた怯(おび)えはなお去りやらぬ様子で、おどおどと顔を伏せた。

じっと見すえていた狂四郎は、

「そなた、雪だるまにされたつやの妹か？」

と、問うた。

「は、はい——」

娘は、うなずいた。

「姉があのようなむごたらしい最期(さいご)をとげたのは、殿様のせいだ、とうらんで、殿様に

讐を復したか？」

ずばりと云われて、娘は、はっと顔を擡げると、

「ち、ちがいまする！　わ、わたくしは、何も存じませぬ！」

と、はげしくかぶりをふった。

「たしかに、何も知らぬのだな？」

「は、はい――」

「そなたは、湯殿の中へ、兇器が飛んで来る音をきいたか？」

娘は、その尋問に、当惑気味な表情を泛べていたが、

「おぼえて、居りませぬ」

と、こたえた。

「殿が呻きを発した時、そなたは、すぐ、そちらを視たのだな？」

「はい」

もし、突き立った兇器が、ひき抜かれて紐をたぐられたとすれば、それを見のがす筈はない。

娘が視たのは、内蔵助が、湯の中へずぶずぶと沈み、そして、浮きあがって来たのだけである。

「下ってよい」

狂四郎は、娘を去らせると、かわって入って来た用人に、
「夫人は、病気のゆえに、生来の強い妬心が、さらに増した——そうですな？」
と、云いあてた。
用人は、こたえかねて、もじもじした。
「御主人が、若い女中に手をつけるたびに、狂おしい妬心をむき出して、のろい殺してやりたい、などと喚かれたのではないか。貴方は、そのことを思い出して、狼狽されたのですな」
「左、左様、そ、それは、その通りでござるが、なにさま、奥方様は、訇うことさえも叶わぬおん身なれば……」
「殿に兇器などを投げつけることは、全くの不可能である、と申される。その通りでしょう。但し、四肢は萎えていても、知恵を働かせる頭脳の方だけは、むしろ嫉妬のために冴えていたとすればだ……」
と云って、狂四郎は、立ち上っていた。
「夫人の寝所へ、ご案内願おう」
ためらう用人よりさきに、狂四郎は、歩き出していた。
白一色の美しい庭景色を眺めやりつつ、長い縁側をひろって行った狂四郎は、ふと、足をとめて、とある箇処へ、眼眸をとめた。そして、何を合点したか、にやりとした。

——そうか、判った！

四

西丸老中より遣わされた吟味役、と取次がれては、内蔵助夫人も、面接をこばむわけにいかなかった。
枕もとに坐った狂四郎は、いきなり、妙なことを云った。
「御主人は、大阪定番の頃は、町人どもの袖の下を、平気で、いくらでも、受け取られた由ですな」
「…………」
夫人は、にくにくしく、狂四郎を、にらみあげて、口をひらこうとはしなかった。
「その奥方であられる貴女が、賄賂というものについて、充分の心得がおありのことは、申上げるまでもない」
「…………」
「それがしは、西丸老中より遣わされた吟味役ではあるが、もともと、市井無頼の浪人者。その日の風向き次第で、どうでも豹変いたす」
そう云ってのけて、にやりとした。

夫人は、色あせたくちびるを、微かにわななかせつつ、ひらいた。
「い、いくら、欲しいと、お云いじゃ？」
「さあ、安くまけて、二百両——」
夫人の痩せさらばえた小さな貌が、ぴくぴくと痙攣した。
しかし、必死に、感情を抑えると、枯木のような腕をのばして、女中を呼ぶ銀製の鈴を把ろうとした。
すると、狂四郎は、
「女中をお呼びになるに及ばぬ。不正の金子を頂戴するのだ。こちらが、勝手に分け取らせて頂く。……どこに？」
と、問うた。
夫人の視線が、厨子棚へ、ちらと送られた。
狂四郎は、すっと立って行き、古びているがみごとな平蒔絵の手函を携げて来た。
蓋をひらくと、切餅（二十五両包み）が、びっしりと詰めてあった。
「ほう、奥方様は、大層なお金持ですな」
狂四郎が、微笑すると、夫人は、苛立たしげに、
「は、はよう……取るがよい！」
と、云った。

「頂く。……さて、ものは相談ですが、こちらは、貴女のへそくりはタカの知れたものの、と存じて、安くまけて二百両と申出たが、さて、こうした金持ぶりを拝見いたすと、人間は生来欲ぶかいもの、もうすこし、値あげをいたしたくなりましたが、いかがであろう？」

「い、いくら、欲しいのじゃ？」

狂四郎は、嫌悪（けんお）と憎しみをこめた夫人の眼眸を受けとめて、にやりとした。

「いっそ、この手函そっくり、頂戴いたそうか」

これをきくや、夫人は、なんとも名状し難い呻きを迸（ほとば）しらせた。

「はははは……山吹色に飢えた素浪人に、そっくり見せたが因果とあきらめて頂くことだ」

狂四郎は、手函を携げて、すたすたと寝所を出た。

けだものじみた叫び声が、うしろから追って来た。

書院にもどってみると、用人が坐っていて、

「殿は、すでに、昨夜、曲者（くせもの）めに襲われることを、ご存じでござった」

と、云いつつ、一通の書状をさし出した。

内蔵助の手文庫の中に、これがあったのを、たったいま、発見したのだ、という。

それには、達筆で、

「ここ数日中に、意外の場所にて、おん生命、頂戴つかまつりそろ。もし、おん生命惜しくそろ節は、おん身持おつつしみあるべくそろ」
と、記されてあった。
「これで、いよいよ、下手人は、明白となった。あとは、これを、どう処置するかだ」
狂四郎は微笑し乍ら、呟（つぶや）いた。
深更——丑の刻に入った頃あい。
音もなく、夫人の寝所へ、黒い影が、忍び入って、褥（しとね）の裾へうずくまった。
「奥方様——」
ひくいが、しかし、鋭利なひびきをもった声音で、呼んだ。
「今夜中に、お屋敷を退散つかまつる。お約束の金子五百両、頂戴いたしたく存じます」
それに対して、夫人の返辞はなかった。
「奥方様！」
黒影は、畳をすべって、枕もとへ来た。
「お約束でございますぞ！　松田五平の投剣術、だてに使ったのではありませぬ。五百両頂戴いたしましょう」
「…………」

「奥方様！　なぜ、ご返辞をなさらぬ！　五百両は、どこにしまってござる？」
「…………」
「それがしを、あざむかれたか？　あざむいたのであれば、それがしにも、致し様がござるぞ！」
黒影が、のしかかろうとした刹那、襖をへだてて、
「無い袖は振れぬ、ということわざがあるぜ、松田五平氏」
あざけりの声が、かかった。
猫のようにうずくまった黒影に、殺気がみなぎった。
「奥方のへそくりは、あいにく、この眠狂四郎が、そっくり頂戴した。で、奥方にかわって、こっちが、お主にくれてやろう。但し、金は金でも、延べ金だ」
さっと、襖が開かれた。
間髪を容れず、黒影から、つづけざまに、手裏剣が、投じられた。
狂四郎は、無想正宗を抜きつけに、それらを、ことごとく、払い落した。
「庭へ出ろ、松田五平！　貧窮して両国の見世物小屋で芸人の真似をしたり、欲に目くらんで足軽に化けたりしても、秩父山中で修業した貫心流の腕前は、まだ荒れては居るまい。試してやろう」
雪を蹴散らしての決闘ではなかった。

耿々と冴える月明りに、地面を掩うた雪もまた皓々と映えて、一間をへだてて対峙した二個の影を、そのまま、そこに、凍りつかせるかとみえた。

狂四郎は、地摺りに。

松田五平は、中段やや高めに。

時刻が移って、夜明けを報せるように、遠くで、鶏が啼いたのを、それを合図のごとく、松田五平が、雪をふんで、二歩進んだ。

と——同時に、無想正宗は、円月殺法の、ゆるやかな移行を示しはじめた。

その切っ先が、半円を描いて、天をさした時、松田五平は、雪を蹴って、五体を跳躍させた。

星が流れるに似た一条の白光が、狂四郎の顔面すれすれに落ちた。

松田五平は、振り下した肢態を、そのままに、細めた眸子を、狂四郎に当てて、動かなかった。

無想正宗は、その肩から胸まで割って、停止していた。

狂四郎が、すっと、引き抜くや、松田五平は、生命なき個体を、ゆるやかに、傾けた。

雪に、どさっと、俯伏した瞬間、黒い血汐が、四方へはね散った。

五

内蔵助の初七日の日、高輪の菩提寺の方丈において、夫人をいかに処置すべきか、評定がひらかれた。
さまざまの意見が出たが、一同すべてが頷く意見はなかった。
眠狂四郎は、片隅の柱に凭りかかって、終始沈黙をまもっていた。
やがて、狂四郎に、意見がもとめられた。
狂四郎は、口をひらくと、無造作に、
「武士の妻ならば、良人と同じように、死なれてみることですな」
と、云った。
「同じように、とは？」
一人が、訊ねた。
「良人が非業の最期をとげたのであれば、妻もまた非業の最期をとげる。それが、夫婦の道と申すもの」
云いすてて、狂四郎は、立ち上ると、一人さきに、方丈を立去った。
一同が、石脇邸へ帰ってみると、異変が起っていた。

夫人が、いつの間にか、湯殿で、浴槽につかって、こと切れていたのである。
女中たちの知らぬあいだに、何者かが、その全身不随のからだをはこんで、浴槽につけていたのである。
そのせなかには、良人内蔵助がつけられていたと全く同じむざんな刺し傷がつけられていて、湯を真紅に染めていた。
兇器は、どこにも見当らなかった。
次の朝、巾着切の金八は、雪解け道をふっとんで、言問の茶屋へやって来た。
「一人来て、二人つれ立つ雪道に、下駄のあとさえ、二の字、二の字と書いてある。とくらあ、おっ、お雪ちゃん、どうだ、あとで、両国へつれて行ってやろうか」
ぽんと、肩をたたいておいて、階段をかけあがると、
「武部仙十郎が使者にて候。……先生、きかせてくんねえ。刃物なしで、湯ん中の裸を、どうやって、ぐっさりと、殺るんだか」
と、仰臥した狂四郎のわきへ、膝小僧をそろえた。
狂四郎は、目蓋をとじたなりで、
「窓を開けてみろ、金八」
と、云った。
「へい。開けるにゃ開けるが……」

障子をひきあけて、
「で——どうなんです。先生？」
「兇器は、そこにある」
「え？　どこに？」
「軒からぶらぶらさがっている」
「ぶら下っているのは、氷柱だけだが……あっ！　なアる——」
金八は、首をふった。
「こいつが、手裏剣の代りをしやがったか。うめえや。突き刺す役目がすんだら、湯に溶けて、かげも形も無しだあ」
狂四郎は、起き上って、あくびをひとつしてから、云った。
「金八。吉原へでもくりこもうか」

花嫁首

一

市には、正月の静かな賑いがあった。
初荷の車の上の獅子舞いの囃しや、鳥追いの三味線の音や、三河万歳の鼓の音や、そして子供たちが打ち合う羽子板の音など……。
眠狂四郎は、不忍池に沿うた池之端仲町の湯屋の二階の掃出縁の手すりに凭りかかって、青空に舞う紙鳶を、見上げていた。
町方で、子供の往来遊びは、珍しくないことだが、紙鳶あげだけは、年に一度、正月にだけ許されていて、男の子たちの最上の愉しみであった。
田舎とちがって、寸地をあまさぬ市中なので、平常は、紙鳶あげは、許されていなかった。
ただ、立春の季には、空を仰ぐのを養生のひとつとかぞえていたので、大人たちも、通行をさまたげる遊びに、文句を云わなかったのである。高位の士たちも、正月だけは、紙鳶あげに夢中になっている男の子たちの脇を、よけて通ってくれた。

——おれには、紙鳶をあげる愉しみもなかったな。

淋(さび)しい孤独な少年の日をかえりみて、狂四郎は、胸のうちで、呟(つぶや)いた。

母は、陰惨な、姦淫(かんいん)の子である狂四郎を、素姓正しく生れた子以上に、きびしく、さむらいとして、躾(しつ)けようとしたのであった。

母と子と、二人きりの、沈黙裡(り)の屠蘇(とそ)汲(く)みが終ると、狂四郎に課せられたのは、吉書(かきぞめ)と弓馬槍剣(そうけん)の芸と、耳朶(じだ)のひきちぎれるような乗馬初めであった。

わずか五歳の正月から、その躾は、はじめられ、母が逝(い)くまで——十四歳まで、つづけられたのであった。弓馬槍剣の諸芸初めは、もとより、士家の子弟たちの正月行事であったが、これは形式化しているだけで、汗を流すようなことはなかった。狂四郎の母は、しかし、わが子に、必死の試みを、つよく命じたのであった。

したがって、狂四郎の脳裡には、正月は苦痛なものという記憶しかないのである。

いまは、正月という儀式とは全く無縁な、異端無頼の徒となって、こうして無為の時間を、湯屋の二階ですごしている。

家もなく、妻子もなく、そして友もない身であった。

中空で舞う紙鳶を、おのが身になぞらえて見ている狂四郎であった。

「旦那(だんな)——」

二階番頭が、客が履物を置く下足段から、顔をのぞけた。

「お玉ヶ池の親分が、旦那をたずねておいでですぜ」
佐兵衛という老いた御用ききとは、つきあいが久しい。
狂四郎は、上って来た佐兵衛の表情が、いつになく、ひどく、緊張したものであるのを視て、
――浮世は、目出度いことばかりではないらしい。
と、思った。
「お願いがございます」
佐兵衛が、年始の祝辞をはずして、そう云ったのは、起った事件に心がとらわれていて、祝辞を忘れたわけではなかった。そういう儀礼は、狂四郎には、不必要だと心得ていたからである。
西丸老中水野越前守の側頭役・武部仙十郎を除いては、狂四郎という人物を、いちばんよく知っている老人であった。それだけに、狂四郎に、頭を下げに来るのは、よくよく、手にあまる大きな事件に相違なかった。
「春から縁起がわるいようだな」
「左様で――。もう四十年も御用をつとめて居りますが、正月早々、こんな途方もない出来事にぶつかったのは、はじめてでございます」
「どうした？」

「昨夜、婚礼がございました。元旦の婚礼は、滅多にない例でございますが、その閨で、花嫁御寮が殺されて居りました。それも、ただの殺されかたではなく、首を斬られて、その首が失くなって居ったのでございます」

「………」

「ご存じ寄りかと存じますが、西丸御老中様の遠縁にあたるお方で、奥祐筆を勤めておいでの、加倉井耀左衛門様のお屋敷で耀左衛門様の御次男と、蔵前の料亭『江戸金』の一人娘とが、婚礼の式をお挙げになったのでございます」

二

この時代は、士家はもとより、民間においても、婚礼の儀式は、大変なものであった。五代将軍の頃、水島卜也という者がいて、小笠原の家伝を得たと称し、種々の説を捏造して教えたのが、いつの間にか、礼法をもって家を立てる者たちの間に浸透して、士家民間ともに小笠原流に順わざるを得ないようになっていたのである。

花嫁の輿を逆さに舁ぎ出すこと、その輿が婿の家に入る時、門内に、うちあわせの餅といって、還暦の老人夫婦が餅を搗くこと、召替えの輿には、筒子、這子、犬張子などを載せて、その戸を開いて、衆民に観せること、あらたに鴛鴦の衾、長枕などを作るこ

と、かつら女、とどわげ（悪魔払い）という女を花嫁に随伴すること、婿から舅に贈る紅白の餅は五百八十七個であること等々。

昨夜――。

加倉井耀左衛門邸では、三河譜代の名門らしく、最も物々しく、小笠原流の婚礼を挙行したのであった。

正月元旦に、挙行したのも、古代の暦に従ったところ、大吉日と出たからであった。（普通、嫁入り月は、正月、五月、九月を忌み、三月は去られ月、八月は離れ月として取らぬのである）

合卺の式をおわり、色直しの座もすませて、婿と新婦は、寝所に入って、床盃を交して褥に入った。

しかし、宴は、つづけられていた。宴が長引くのをその家の誇りとするならわしであったので、招かれた者は早く帰るのを非礼としたのである。その広間から、酔いつぶれていた最後の客が、目ざめて立ち上ったのは、そろそろ夜も明けかかった頃合であった。

仲人夫婦には、まだ、勤めがのこっていた。

寝所に入って行き、婿と新婦を起して、夫婦の契りを、ぶじにむすび了えたかどうか、たしかめることであった。

仲人役は、書院番の長老・四つ木喜左衛門という老人であった。

この問いは、屛風をへだててなされるのであったが、四つ木喜左衛門は、古稀を迎えて、耳も遠くなっていたし、気ぜわしくなっていたので、つかつかと褥のそばまで、ふみ込んだ。

一瞥して、仰天した。

老人が見出したのは、美しい新婦の寝顔のかわりに、人相凶悪な男の首だったのである。

のみならず、それは、鉛色と化した死首であった。

婿は、その横で、口を半開きにして、熟睡していた。

四つ木喜左衛門は、あまりの奇怪な光景に、しばし、瞠目したまま、棒立ちになっていたが、急に、憤然となって、その死首を、足蹴にした。

すると。

死首は、ごろごろと、畳へころがり落ちたではないか。すでに、胴から離れていたのである。

二度愕然となった喜左衛門は、掛具を、はねのけてみた。

そこには——。

首を喪った真白い、豊かな、女の裸身が、純白の二布をまとっただけで、横たわっていた。新婦のものにまぎれもなかった。

すなわち。
新婦は首を刎ねられ、代りに、どこかのいやしい男の首を継ぎ合せられていたのである。
まさしく、奇怪な事件であった。
直ちに、町奉行所に通報されずに、佐兵衛が、そっと呼ばれたのは、世間へきこえるのをはばかって、極秘裡に、解決しようとする仲人役の四つ木喜左衛門のはからいであった。
喜左衛門と佐兵衛は、ふるい知己であった。
佐兵衛は、しかし、当惑した。岡っ引は、武家屋敷の生活ぶりについて、知識が乏しかったし、武家をとらえて、直接尋問することができなかったからである。
ただ、料亭「江戸金」の娘である花嫁素江の日常を洗うには、小半刻も費せば足りた。
素江は、料亭の一人娘らしく、勝気で、わがままで、時には、若い板前と口論の挙句、手をあげて、その頬桁を鳴らしたこともある、という。
素江が、加倉井耀左衛門の次男耀次郎に見そめられたのは、三年も前であった。
素江は、しかし、夢中になってかよって来る耀次郎に対して、むしろ、すげない態度を示していた、という。
女中たちは、のぞみもないのに、どうしてあきらめないで、かよって来るのだろう、

と耀次郎を多少さげすんでいたものであった。

急に、素江が承知して、ある旗本の養女になる手続きをふんで、加倉井家へ輿入れすることにきまった、ときいて、女中たちは、唖然としたことだった。

素江は、耀次郎の熱意にほだされて承知するような気象ではなかった。なにか、別の事情があったに相違ない。

佐兵衛は、まだ、その事情を探るまでには、至っていなかった。

黙然として、きき了った狂四郎が、口をひらいて、訊ねたのは、

「屍体は、まだ、そのままにしてあるのか！」

そのことだった。

「そのままにしてございます」

「耀次郎という新郎は、まだ睡りつづけているのだろう」

「よくおわかりでございます」

「床盃の酒に、ねむり薬が仕込んであったとみた」

「てまえも、そう思って居ります」

「見物に行ってみようか」

狂四郎は、立ち上った。

三

初春の装いにつつまれた通りを、くたびれた黒羽二重の着流しの狂四郎は、ふところ手で、ゆっくりと歩き乍ら、

「おやじさん、生れて何回、正月を迎えた？」

と、訊ねた。

「六十三回めでございます」

「なにが、残っている？」

「え？」

「なにか、お前さんに、残っているものはあるか？」

佐兵衛は、ちょっと、考えていてから、

「何も残っては居りませぬ」

と、こたえた。

「人間とは、そういうものであろうか」

「まず——」

佐兵衛は、小僧に年玉の品物を入れた風呂敷包みと小盆を持たせて、年礼にまわって

いる麻上下(あさがみしも)姿の大店の主人らしい男を視(み)やり乍ら、

「人生というやつは、短いものでございます。てまえは、亡(な)くなった人のことを思い出すことにして居りますが、あの人が亡くなって、もう五年、この人が亡くなって、もう三年――と、かぞえて居りますうちに、つくづく、年月の過ぎることの無情をおぼえるわけでございます」

と、云った。

狂四郎は、そう云われて、はじめて、妻の美保代が逝ってから、すでに二年が過ぎ去っていることに、気がついた。

「……大慈大悲の春の花、十悪の里に芳(こうば)しく、三十三身(じん)の秋の月、五濁(ごじょく)の水に影清し」

謡曲・田村を、ひくく口ずさみはじめた狂四郎の、虚無の翳(かげ)の濃い横顔を、佐兵衛は、そっとぬすみ視て、

――生きて行くことが、さも面倒なような、このお人が、いざとなると、一番役に立つのは、どういうのであろう。

と、ふしぎな思いをわかせた。

加倉井邸は、昨夜の盛儀にひきかえて、家人ことごとく死に絶えたように、ひっそりとして、門をくぐって、奥庭へまわるまで、人影も見せなかった。

狂四郎は、まず、鬼門角のつくばいの蔭(かげ)に据えてある死首を検分した。
これ以上いやしい造作はない面貌(めんぼう)であった。
ところが、その皮膚には、うっすらと、化粧した痕(あと)をとどめていた。
狂四郎は、合点(がてん)した。
これは、獄門首であった。これほど凶悪な骨相の男が、自らすすんで化粧する道理がない。
獄門になるので、化粧をさせられたのである。それが、当時の、ならわしであった。
「おやじさん、この首が、何者か、もうわかっているのだな?」
「わかって居ります。大晦日(おおみそか)に打首になりました秩父(ちちぶ)無宿の仙六という極悪人でございます。牢内(ろうない)で、二つ胴の様物(ためしもの)にされて、この首は、小塚原(こづかっぱら)にさらされて居ったのでございます」
狂四郎は、それときくと、独語するように、
「素江という娘の首は、もしかすれば、この囚徒の代りに、小塚原のさらし台に、のせてあるかも知れぬ」
と、云った。
「お――そうかも知れませぬ」
佐兵衛は、思わず、声をあげた。

「うかつでございました。てまえは、これから、ひとっ走り、行って参ります」

狂四郎は、建物の中に入った。

茫然と、虚脱のていで、座敷に坐っている仲人の四つ木喜左衛門に会って、寝所へ案内をたのんだ。

喜左衛門は、眠狂四郎の名を、噂できいていたので、ほっとわれにかえった様子で、先に立った。

狂四郎は、首のない白い肢体を、褥の中に、しばらく眺め下していたが、なにを思ったか、両膝に手をかけると、大きく、股を拡げさせて、秘所へ、視線をそそぎ、中指を、すっと挿入してみた。

抜きとった中指には、べっとりと、血汐がついていた。

狂四郎は、懐紙でぬぐいとってから、

「耀次郎殿をお起ししねがえまいか」

と、たのんだ。

「もう目ざめて居り申すが、まだ、うつけのていで、なにを問うても、満足にこたえられ申さぬ」

喜左衛門は、云った。

狂四郎は、耀次郎の居間に入った。

旗本大身の次男坊らしい、無能を示す生白い風貌の持主であった。

狂四郎は、正対すると、鋭い眼光を、対手（あいて）のうつろな双眸（そうぼう）へ、射込んだ。

耀次郎は、次第に、怯（おび）えた表情を泛（うか）べて来た。

「お手前は、牀（とこ）に入るや、直ちに新婦を抱かれたな？」

「さ、さよう……」

耀次郎は、頷（うなず）いた。

「契りを済まされたか？」

「…………」

「新婦の体内に、容（い）れられたか、とお訊ねして居る」

「い、いたした」

「では、おねがいする。濡（ぬ）れた手拭（てぬぐ）いで、股間（こかん）を拭（ふ）いて、それを、視せて頂こう」

「…………」

「はやく、されたい」

耀次郎は、なにゆえにそうしなければならぬのか、見当もつかないままに、屈辱で顔面を歪（ゆが）め乍ら、次の間へ立って行った。

やがて、もどって来た耀次郎は、濡れ手拭いをさし出した。

狂四郎は、受けとってみて、それに、一点の血汐も付着していないのを知って、眉宇（びう）

をひそめた。
「お手前は、嘘（うそ）を吐（つ）かれているようだ」
　耀次郎は、憤然となって、
「そ、それがしは、嘘など、つ、ついては、居らぬ！」
　と、叫んだ。
「たしかに――？」
「八幡（はちまん）、誓って！」
「奇妙なことだ」
「なに？」
「新婦は、月水（げっすい）中であった。新婦は、そのことを告げて、拒んだのではなかったか？」
「い、いいや、一言も、申さなんだ」
「では、お手前が、契られたのであれば、当然、お手前の股間は、不浄の血でよごれている筈（はず）。それが、ついてないのは、どうした次第か？」
「そ、それがしは、容れたぞ！　た、たしかに、容れたのだ。まちがいない。容れているうちに、遽（にわか）に、眩暈（めまい）が襲うて来て、それきり、意識をうしなったのだ！」
　必死に言訳する新郎を、じっと見戍（みまも）って、狂四郎は、
　――嘘を吐いては居らぬようだ。

と、みとめた。

佐兵衛が、重い風呂敷包みをかかえて、戻って来たのは、それから一刻ののちであった。

それが、素江の首であることは、きくまでもなかった。

耀次郎は、その首を一瞥して、失神した。

佐兵衛は、狂四郎と二人だけになると、首をひねり乍ら、

「どういうので、ございましょうな、これは？」

「闇夜の手さぐりだな」

狂四郎は、薄ら笑ってから、

「判ったことは、ひとつだけある」

「なんで、ございます？」

「首を切ったのは、刀ではないことだ。睡っているのを、ほかの刃物で、切り落した。そうだな、さしずめ、刺身でも作るようにだ」

この言葉をきくと、佐兵衛の目が、急に、光った。

狂四郎は、別の神経を働かせていた。

襖のむこうに、ひそんでいた者が、そっと立去って行く気配があった。ひそんでいることは、すでに、狂四郎は、察知していた。

しかし、狂四郎は、それが何者か、敢えて、咎めようとはしなかった。

「江戸金から、この屋敷へ、料理作りに、やって来た板前の一人を、つかまえてみることだ。謎解きは、それから、さきの話になる」

狂四郎は、云いすてると、廊下へ出た。

歩き出し乍ら、物蔭でき耳たてている者がいるならば、それにきこえるように、

「この屋敷には、なにやら、怪しげな臭気がたちこめているようだ」

と、呟きすてていた。

四

翌日——三日の日も、狂四郎は、湯屋の二階に在った。

平常は、湯屋の二階は、年季奉公人の遊山場のように騒々しいものであったが、正月三カ日は、ふしぎにもの静かで、風呂の中で、うたう調子はずれな清元の梅の春が、はっきりときこえて来るくらいであった。

手広い二階に、湯上り客は、わずか三四人、それぞれ、はなればなれに、一人で、お市豆をつまんで、お茶を飲んでいるばかりであった。

正月が来ても、屠蘇を祝う家族のない独身者たちが、ひまつぶしに来ているものとみ

えた。
佐兵衛が、姿を見せたのは、日の昏れかけた時刻であった。
「旦那。判りました」
「うむ」
「江戸金の二番板前の、嘉助という若い者でございました」
「捕えたか？」
「いえ、それが……」
「殺されていたのだな！」
「どうして、それを――？」
「なんとなく、そんな気がしていた」
「大川の百本杭にひっかかって居りました。……昨夜は、暇をもらって、自分の家に戻っていたそうでございますが、店から使いが来て、急に、手が足りなくなったから、来てくれと云われて、出て行ったきり……、店へは帰らずじまいになったのでございます。途中で、殺られたらしゅうございます」
「素江の首は、嘉助が、刺身庖丁で、切り落したことになる」
狂四郎は、宙に、冷たい眼眸を置いて、云った。
「つまり、小塚原から獄門首を盗んで来て、素江の首と、とりかえて置いたのも、嘉助

のしわざであったのだな」
「嘉助は、かなり前から、素江と、通じて居ったのでございます。これは、嘉助の妹が、打明けてくれました。素江が、自分を振って、生(なま)っ白(ちろ)い、旗本の次男の、ひょうろく玉に嫁ぐことになりやがったから、婚礼の晩に、殺してやる、と鬼のような形相になった兄を見て顫(ふる)え上った、と申して居りました」
狂四郎は、ごろりと仰臥(ぎょうが)して、手枕(てまくら)になり、目蓋(まぶた)を閉じてから、
「素江が、なぜ、耀次郎に嫁ぐ肚(はら)をきめたか――その事情を、さぐったか？」
と、訊ねた。
「それは、まだ、摑(つか)みかねて居りますが、判ったことがございます。あの娘は、江戸金の本当の娘ではなく、もらい子のようでございます。江戸金の女房は、石女(うまずめ)で、七年前に、亡くなって居ります」
「もらい子か。どこの胤(たね)か、知る必要があろう」
「一両日に、調べあげてごらんに入れます」
狂四郎は、しばらく沈黙を置いてから、ぽつりと云った。
「おやじさん、素江を、ころしたのは、嘉助とおもうか？」
「それは、もう」
佐兵衛は、狂四郎が今更、なにを疑うのか、と訝(いぶか)り乍ら、

「首を切り落したのは、刺身庖丁をふるった嘉助のしわざと、旦那ご自身が仰言ったのではございませんか」
「首を切り落すことと、殺すことは、別だな」
「………？」
「死んだやつの首を切り落す場合もある。板前が庖丁をふるうのは、大方は、死んだ魚だろう」
「すると、嘉助が、獄門首をかかえて、寝所にしのび入ったときには、花嫁は、もう死んでいたと、お考えになりますので？」
「まずな。生きている首は、刀の手練でない限り、あのように手際よく、切れぬものだ。すでに死んでいたから、あまり血も流れなかった。……もしかすれば、嘉助は獄門首を投げ込んで新郎新婦をおどしてやろうと、それだけしか、考えていなかったのかも知れぬ。ところが、しのび入ってみると、素江は、死んでいた。死んだやつを料理するのは、板前として、たとえ、それが人間であっても、さして、恐れるしわざではなかろう」
「下手人が、ほかにいるとなりますれば、これア、いよいよ、いそがねばならなくなりました」
「そうしてもらおう」

佐兵衛が、狂四郎の住む下谷稲荷裏の裏店へ、急ぎ足に入って来たのは、それから、八日後——ようやく、正月気分もぬけた頃であった。

無想正宗の手入れをしている狂四郎の前に、極度に緊張した様子で、坐った佐兵衛は、

「判りました。旦那。素江は、お大名のご落胤でございました」

と、告げた。

「そうか。どこの大名だ？」

「下妻一万石の井上遠江守様のお子で、ただのご落胤ではなく、双生児の一人でございました」

当時、双生児が生れると、あとから生れた方を、捨てる風習があった。勿論、ちゃんとその与え先をきめて、捨てるのであった。

「その、双生児のひとりは、姫ぎみとして、現在も、井上邸に生きているのだな？」

「生きている段ではございませぬ。初午の頃には、大奥へ上って、公方様お附きの御中﨟におなりになる噂でございます」

「ふむ」

狂四郎は、無想正宗を、ぴたりと、鞘におさめると、

「それで、どうやら、読めた」

「はあ——？」

佐兵衛には、合点がいかぬ。

「おやじさん。素江という娘は、自分が、井上遠江守の落胤であることを知っていた。勝手で、わがままで、板前の横面を張るほどの娘が、自分のかたわれが、将軍家の妾になる、ときいて、嫉妬し、逆上せぬわけはなかろう。そう思わぬか」

「それは、そうでございますね」

「そこで、自分も、旗本の家に嫁ぐことにした」

「しかし、殺されております」

「たしかに、殺された。……殺されるのも、あらかじめ、きめてあったことだろう」

「え？」

佐兵衛は、ようやく、のみこめそうな表情になった。

「どうやら、芝居は、大詰に来たようだ。そこで、この眠狂四郎の登場となる」

五

深更――。

針ひとつころがっても、遠くにひびきそうな寂寞の占めた大名屋敷の、長局の廊下を、狂四郎は、進んでいた。

闇に目が利（き）き、跫音（あしおと）を消して歩くことのできる男であることは、云うまでもない。
それに、大名屋敷の構造を、すみずみまでも知っているのである。
長い廊下の端に来て、右に折れた畳廊下へ目をやり、赤い灯（ひ）が、ぼうっと、闇に滲（にじ）んでいる部屋をみとめて、
——あれだな。
と、さとった。
障子に手をかけた時、べつに、内部の気配に、耳をすますでもなかった。
すっと開いて、一歩入り、障子を閉めた。
広い室には、灯があるばかりであった。
むこうに襖があった。
その襖を無造作に開いた狂四郎は、やはり灯のある部屋の中央に、敷かれた緋縮緬（ひぢりめん）の夜具を見出（みいだ）した。
やすんでいる者の寝顔が、幻影のように美しい印象であった。
掛具をはねのける瞬間、狂四郎は、対手（あいて）が目をさますように、あらあらしい動作をとった。
ぱちりと、双眸をひらいた刹那（せつな）——間髪を容れず、狂四郎の片手は、その口をふさいでいた。

次いで——。

もう一方の手は、容赦なく、下へ延びて、白羽二重の、寐召のまえを捲っていた。

息をのむ程の、絖のような白い柔肌は、ひいしと膝を合せて、開くまいとした。

狂四郎は、冷やかに笑った。

「嘉助に与え、耀次郎に与えた肌を、なぜ惜しむ？」

この言葉をあびせられて、女は、四肢から力をぬいて、ぐったりとなった。

狂四郎は起き上ると、

「お留守居」

と、呼んだ。

控えの間とを仕切る襖が、ひらかれた。

白髪あたまの、老いた武士が、顔面をこわばらせて、入って来た。狂四郎が、あらかじめ、ひそませておいたのである。

「おききおよびの通り、奸婦であったことを証明いたした。と申して、貴殿にとっては、殿の息女であることに、まちがいないところだが……。お引渡し願って、連れて参る」

その時、姫君になりすましていた素江が、ううっ、と呻いて、俯伏した。

留守居役が、あわてて、抱き起してみると、みるみる、かたくひきむすんだ唇から、血汐がしたたった。舌を嚙みきったのである。

そのさまを見戍る狂四郎は、眉宇も動かさなかった。

木綿の綿入に小倉の帯を結(し)め、千種(ちくさ)の股引、白足袋に粗末な雪駄(せった)をはき、帯の結び目に扇をさした丁稚(でっち)小僧たちが、つぎつぎと、河岸道を往くのを、両国の並び茶屋の床几(しょうぎ)に腰かけて、狂四郎と佐兵衛は、眺めていた。

今日は、藪入(やぶい)りであった。

「世間を渡って行くには、やはり、実直に働くことでございますね」

沁々(しみじみ)とした口調で、佐兵衛は、云った。

狂四郎は、こたえず、腕を組んだままであった。

「……井上遠江守様のお姫(ひい)様を、かどわかして、息を絶えさせて、素江の替玉にさせたまでは、あざやかな、手口でございましたが……。嘉助が、逆上して、獄門首を盗んで来てお姫様の首を切って、すりかえようなどとは、よもや、夢にも想像しなかったことでございましょうな」

この陰謀を企てたのは、素江の養父の「江戸金」の主人と加倉井耀左衛門であった。

すでに、「江戸金」の主人は一昨日、獄門になっていた。

加倉井耀左衛門は、切腹、耀次郎は、遠島になっていた。

「もし、嘉助が、あのような気ちがい沙汰(ざた)を起さねば、素江は、婚礼の牀(とこ)で急死したこ

とになり、まんまと、公方様の御中﨟になりすますところでございました。……悪事というやつは、こういう具合に、思い設けぬことから、失敗するものでございますね」
「失敗しない奴(やつ)もいるだろう」
「いえ、悪のさかえたためしはございませぬ」
「そうかな。……徳川家は、天下をとるために、どれだけの悪業(あくごう)をかさねたか――」
「旦那！」
佐兵衛は、あたりをはばかって、たしなめた。
「おやじさん。悪と善とに拘(かかわ)らず、女の美しさとか、ひとつの商いとか、一国の繁栄とかは、盛りがすぎれば、ほろぶもののようだ。わたしは、そう思っている」
云いすてて、狂四郎は、茶屋を、ふらりと出て行った。
遠ざかる痩身(そうしん)を見送り乍ら、佐兵衛は、なぜともなく、ふかい溜息(ためいき)を、ついたことだった。

悪女仇討(あだうち)

一

冬陽(ゆうひ)が、松の梢(こずえ)を縫って、白い土の斜面に仰臥(ぎょうが)したおれのからだに、あたっていた。

静かであった。鳥の声もなかった。

下の街道には、もう一刻(とき)も人影を通して居(お)らぬ。

おれにふさわしい憩(いこ)い場所であった。

江戸を出て二十日あまり経(た)っている。西へ向かって、ひろうともなく街道をひろっているうちに、山陽道に入って、姫路を過ぎた。

今朝から、山中を数里、歩いて、なお、田野(でんや)に出るには、数里あろう。

からだから、陽ざしが引くまで、こうして、路傍にじっと仰臥しているならわしは、この旅でおぼえた。生きていることが面倒になった男の怠惰である。

……遠く、街道に、女の悲鳴があがった。

おれは、目蓋(まぶた)をとじたまま、その悲鳴をきき、

――どうする？

と、自分に訊いた。
奔って来る跫音にまじって、宙を截る刃音もきこえた。
——おれの縄張り内まで、遁れて来る運があれば、だ。
おれを、むっくりと起き上らせたのは、女に運があったことだ。
武家の妻女で、眉目をひきつらせた必死の貌は、美しさに凄味を帯びさせていて、これが、おれの好色に叶うた。
追って来たのは、悪役を買うために、その面になったかと、苦笑させられるいちめん孔あき痘痕であった。のみならず、一瞥して、相当に使える腕を持ち乍ら、一太刀で斃そうとせぬのは、憎悪が深いあまり、一寸きざみ五分だめしの残忍な料簡と見えた。
その残忍さを、猫背にしめしつつ、木株につまずいて倒れた女の上へ、のしかかるように迫ったのへ、おれは、不意に、頭上から、声をかけた。
瞬間、敏捷にとび退ったのは、おれの魔性の剣気に反応する心得があったことだ。
おれが、跳んで、路上に立った時、はね起きた女の口からほとばしったのは、意外な言葉であった。
「良人の敵でございます！　お助太刀を——」
おれは、男を見て、
「まことか？」

と、訊ねた。
すると、男は、自嘲して、
「姦婦に謀られたおのれ自身の恥は云わぬ。……助太刀すれば、こんどは、おぬしの恥となるぞ、引けい」
と、こたえた。
これは、堂々として、面目のある態度といえた。
これに対して、女は、狂ったように、仇討免許状が懐中にあることを叫びたてた。
おれは、男の痘痕面に、暗い虚無の翳が刷かれるのをみとめるや、ふと、気まぐれを起した。
「ご妻女、てまえは、見るからの素浪人。生命をなげ出して助太刀するからには、報酬を頂かねばならぬ」
そう云った。
「おのぞみのものを――」
「左様か。では、首尾よく本懐をとげられたならば、貴女の白い肌を、一夜だけ抱かせて頂こう」
おれの要求がなされるやいなや、突如として、男が、なんとも異常な哄笑を噴かせた。
それは、後日まで、おれの耳底に、のこった。

男は、笑いを納めた刹那、地を蹴って、凄じい気合で、襲って来た。
おれは、体を空けざま、抜きうちに、男の小手を峰打った。
女は、たたらをふむ男へ、とび込み、懐剣で、脾腹をえぐり、折重って、倒れた。
次の瞬間――。
おれは、見た。男が、双腕で、女のからだをかき抱きつつ、断末魔の形相の中へ、ふしぎな喜悦の色を交えるのを――。
惚れていたのか！
おれは、胸の奥に、微かな痛みをおぼえた。
屍をつきのけて、身じまいをととのえた女は、蒼褪めた横顔に、冷たいおちつきの色をとりもどして、代官所から検使をよんでもらえまいか、とおれにたのんだ。
有年坂峠というここは、森和泉守領と松平内蔵頭領との境であったが、おれは、女の希望によって、赤穂郡へひきかえした。
一刻後、おれが、役人をともなって、戻って来た時、女の姿は消えて居り、屍は、崖下の灌木の茂みの中へつき落されていた。
屍は、頭髪と右手の親指が切られていた。

二

有年から三石へ三里、そこから峠ふたつを越えて和気へ出て、さらに一嶺を越えて、片上まで三里の夜道をひろったおれが、女の泊った旅宿を脇本陣と推察したのは、理由があった。

女が持っていた懐剣の柄の紋が、輪蝶であったのを、おれは見てとっていた。この備前の国主松平内蔵頭の家紋であった。すなわち、その懐剣は、良人の讐を、これで復と、下賜されたものと思われた。

めでたく本懐をとげた女が、故国へ戻って、第一夜をすごす旅宿に、脇本陣をえらぶのは、まず常識であろう。

脇本陣のもてなしも違うし、すでに、岡山城下へ、吉報の早飛脚も出して呉れていよう。

おれが玄関からおとずれても、女の口止めによって、番頭は、白ばくれるに相違ない。

おれは、汐香を含んだ夜風の渡る宿場町を、何気ないふりで通りすぎ、はずれにある立場の居酒屋の、白馬を染め抜いた紺暖簾をはねて入り、半刻をすごした。

三更を報せる番太の木の音が、おれを立ち上らせた。

裏手から、脇本陣の屋内へ忍び入り、まず、帳場の宿帳をぬすみとって、女の泊った部屋をつきとめ、そこへふみ込むのに、なんの造作もなかった。

次の間、三の間つきの貴賓部屋を与えられていることは、想像していたところである。

おれは、わざと、次の間にふみ込むや、気配をつくって、褥（しとね）へ伝えておき、女が起き上って、身構える時間を置いてから、仕切襖（しきりぶすま）を、ひらいた。

はたして、襖へ吸いついていた者の、風のような襲撃があった。

懐剣を空に流して、その利腕（ききうで）を摑（つか）んで、逆にねじったおれは、

「この挨拶（あいさつ）は、貴女が待っていてくれた証拠だと解釈させて頂く」

と、皮肉をあびせた。

無言で、必死に抵抗するのを、ずるずると褥へひきずって、押えつけた。

「約束は、実行して頂く。女を犯すことには馴（な）れている男だと、観念されるがいい」

もがくたびに、はだけてゆく胸や、太股（ふともも）の白いふくらみが、闇（やみ）に利（き）くおれの目を刺戟（しげき）し、ひさしぶりに、冷たい血を、残忍なものにかりたててくれる。

なおも抵抗を歇（や）めぬ女に、悲鳴をあげさせ、力を四肢（しし）からすてさせる手段を、おれは、知っていた。

そうしたおれは、左手でつまみ抜いた幾本かの細毛を吹きすてて、愛撫（あいぶ）に移った。

闇は、おれと女を深くおしつつんで、時を刻んだ。

……やがて、やおら起き上ったおれは、死んだように動かぬ女をすてて、有明（ありあけ）に寄ると、燧石（ひうちいし）を打った。
灯（ひ）が、そこから、闇を、部屋の隅（すみ）ずみへ押しやった時、女は、起き上って寝間着の乱れをなおすと、肩を落して、うなだれた。
おれは、黙って、立ち上って、部屋を出るつもりであった。
おれが居直るものと思い込んで、次の言葉を吐いた女は、不運であったというべきであった。
「助太刀をして頂いたことを、もはや、家中へつつみかくしはいたしませぬ。城下まで、ご同道下さいませ」
おれは、こたえず、わざと、女を熟視した。
女は、堪え難い気色をしめし、
「まちがいございませぬ。良人の敵でございました。城下まで、ご同道下されば、ご得心なさいます。……檜垣（ひがき）清十郎と名のって居りましたが、まことは、三年前、良人佐藤嘉兵衛を闇討ちして、退転いたしました須貝修之進にまぎれもございませなんだ」
ほとばしるように、云った。
おれには、紏（ただ）すべき疑念が、いくつかあった。
だが——わざと訊かなかった。

ただ、
「ひとつだけ、うかがっておこう」
「はい」
「敵という者は、通常、国から遠くはなれたところに身をかくして居るものだが、あの御仁が、隣国にひそんでいたのは、如何なものか？」
女は、しばらく、俯向いて、返辞をためらっていたが、ついに、意を決した様子で、
「須貝殿は、江戸にすまいいたして居りました。わたくしが、とものうて、国許へもどる途中でございました」
「どういうのです、それは！」
「須貝殿は、良人の墓前で、切腹なさる約束でございました」
「貴女の願いを容れてか？」
「はい！」
「豹変して、貴女を返り討ちにしようとしたのは？」
「国に入る前に……肌身をゆるす約束でございましたが……」
「それをしなかったために、怒った、というのですな？」
「はい」
須貝修之進が、佐藤嘉兵衛を闇討ちした原因というのも、この女を奪われた怨恨であ

った、という。
話のつじつまは、一応合っていた。おれは、納得した態度をみせた。
女は、ほっとした様子になると、
「今宵のことは、他聞をはばかることとゆえ、そっとお立去りになって、明朝、玄関より、助太刀した者と名のって、おたずね下さいますまいか」
「承知いたした」
「わたくしは、本懐をとげた安堵のために、気力が落ちて、牀から起き上れぬことにいたします」
「明朝発たれても、てまえの方に異存はない」
おれが、あっさりこたえると、女は、怨じ顔で、じっと、食い入るように見入って来た。
「わたくしを、一夜限りで、おすてなさいますのか」
これは、思いがけぬ口説であった。
鼻の下をのばして、受けとるには、おれはすこしばかりひねくれていたし、ひねくれていることが、この場合、役に立つようであった。
但し、即座に、女の肚が読めた次第ではなかった。
翌朝、おれが、この脇本陣の玄関に立った時、すでに、岡山城下からは、数名の士が、

かけつけて来ていた。

しかし、女が、部屋に通したのは、おれだけであった。疲れた身は、容易に牀から起き上れぬとみせかけたのである。

家臣たちは、おれをとらえて、矢つぎ早やに、質問をあびせたが、おれは、行きずりに、一臂（いっぴ）を貸したにすぎぬ、とこたえたきり、無愛想に終始した。

それから、十夜、女は、ひそかに、おれのものとなり、烈（はげ）しく身もだえて、陶酔した。

女――きいの女が、おれをともなって、池田侯の別墅（べっしょ）である烏城（うじょう）西方の後楽園に入った時、迎える家臣たちは、いずれも、祝福を惜しみなく面上に湛（たた）えていた。

この日は、主君に拝謁（はいえつ）する前に、城代によって、一応その真偽の程がたしかめられるべく、召致されたのである。

きれ者らしい五十年配の城代は、きいの女とおれを小半刻も待たせておいて、書院に入って来ると、ひどくむっつりした面持（おももち）で、挨拶を受け、自身からは、なんのねぎらいもせず、早速に、証拠の品を所望した。

きいの女がさし出した白絹包みをてのひらにのせるや、

「太刀を合せて、討ちとったに相違あるまいな？　寝首を掻（か）くがごとき卑劣の振舞によったのではないな？」

と、念を押した。

「これなる眠狂四郎殿のお助太刀により、作法たがえず、討ちとりましてございます」

きの女は、つつましくこたえた。

城代は、白絹を披いた。

一握の頭髪と、ひからびた右手の親指が、あらわれた。

城代は、頷いた。

「……ふむ」

「修之進のものにまぎれもない」

城代は、その親指に、見おぼえがあったのである。十年前、城中において、紅白試合が催された際、勝ちのこって、幼年からの競争相手である佐藤嘉兵衛と、勝負を争った修之進は、みごと嘉兵衛の木太刀を空中へ刎ねあげたが、おのれも、勢いあまって、篝火まで奔って、親指を灸いた。それ以後、爪が波型に変形して、黝い筋がついたのである。

城代は、小姓がさげて来た三方へ、白絹包みを置くと、

「三年の苦労、大儀であった。明日午後、拝謁の儀、さしゆるす。衣服は普通にて、化粧してよいぞ」

それだけ云いのこして、さっさと立って行った。

おれに対する礼の言葉は、なかった。
その宵、佐藤家に於て、祝宴がはられたが、おれは、辞退して、大黒町の旅籠にひきこもった。
嘉兵衛には、老いた母がひとりあるばかりで、兄弟はなかった。席上、きいの女に婿をとる話が、早速にもち出されたに相違なかった。
深夜――三更すぎて、おれは、予定通り、佐藤家へ忍び入って、きいの女の寝室にひそんだ。
きいの女の身もだえぶりは、片上の脇本陣におけるよりも、さらに一段と烈しいものであったが、おれには、それが、かなり技巧を加えて、誇張されている、と受けとれた。
おれが、出て行く気配をしめすと、きいの女は、狂ったようにすがりついて、
「当地に、いつまで、おとどまり下さいましょうか？」
と、訊ねた。
おれは、こたえた。
「貴女にあきるまで、としておこうか」
当然、女には、これをうらむ口説があるべきであった。なぜか、きいの女は、口を緘じていた。狂ったようにすがりついて訊ねる必死な心根にしては、その態度は、訝しかった、というべきであろう。

次の夜も、そのまた次の夜も、おれは、その寝室におとずれた。

五日目の夜、きの女は、おれの腕の中で、ささやいた。

「親戚たちが、わたくしの婿を、えらぶ模様でございます。……堪えられませぬ」

「…………」

おれは、わざと、沈黙をまもった。

「わたくしは、わが身をすてて、良人の敵を討ちとりました。妻として、わたくしのつとめは、はたしました。……これからは、じぶんの望む道を、ふみたく存じます」

「…………」

「眠様。わたくしを、妻にして下さいますか？」

「…………」

「肚をおきめ下さいませ。ひと足お先に、江戸へお帰りになって、わたくしを待っていては、下さいますまいか。かならず、神明に誓って、わたくしは、おあとをお慕い申し上げます。……女は、恋のためには、いか様にも、決意をなしとげてみせまする。敵討ちのために、わが身をすてたとは申すものの、本懐とげたあとの虚しさを思いやり乍らの、暗い苦労でございました。それにひきかえて、恋のよろこびを知らされたこのたびのわたくしは、貴方様の許でくらせる希望を叶えるために、この家を出て参るのでございます。なんの未練もあろう筈がございませぬ。かならず、かならず、江戸へ参ります。

……どうぞ、ひと足お先に、お帰りになり、待っていて下さいませ」
おれは、なおしばらく、無言をつづけてから、おもむろに、口をひらいた。
「わたしが、江戸へ帰らずともよいてだてがある」
「それは——どういう？」
「この家へ、入婿すればよかろう」
おれは、あっさりと、云ってのけた。
「そ、それは、わたくしも、一度は考えましたなれど……なにぶんにも親戚の者たちが——」
「どこの馬の骨とも判（わか）らぬ浪人者を、婿にするわけにはいかぬ、恩義は恩義、婿は婿——と主張する人々に対して、貴女が、臆（おく）せず、申し分をたてることは、べつだん不貞にはならぬだろう」
「…………」
こんどは、きの女が沈黙する番であった。
「須貝修之進は、醜い痘痕面（あばたづら）のために、貴女を、佐藤嘉兵衛にゆずったのであろうが、あいにく、同じ悪覚面はしていても、わたしには、貴女を他人にゆずる劣等感はない」
おれの、何気ないこの言葉が、きの女に与えた衝撃が、いかに大きかったか——これは後になって、思いあたった。

沈黙したままのきの女を、褥の中にのこして、おれは、去った。

しつっこくも、おれは、次の夜も、おとずれた。

その帰途、覆面の士の襲撃があった。

旭川に架けられた五十九間の京橋を、渡りかけたおれは、欄干の根かたに、菰(こも)をかぶってながながと寝そべっている乞食ていの男を見た。

その前をゆっくりと通りすぎて、

――来るな！

そう感じるのと、はね起きた男が、かくしていた手槍(てやり)を、突きかけて来るのが、同時であった。

――出来る！

と、見た。

おれは、迫られるままに、すこしずつ、退り乍ら、

「きの女に、無報酬でたのまれたとは、思えぬが……」

と、冷やかに云った。

「おぬしが、婿にえらばれた御仁ならば、仇討(あだう)ちの栄誉をになった女を妻にするよろこびが、いずれ水の泡(あわ)となることを、予告しておく。きの女が、いかなる事由をたてて、この素浪人を討って欲しいとたのんだか知らぬが、助太刀してくれた者を暗殺しようと

するところに、かくさねばならぬやましさがあろう、というものだ。悪女に手玉にとられる愚をさとることだ」

そう教え乍ら、おれは、苦笑した。

女の色香に血迷った者に、忠告して、未だ曾て、ただの一度でも、肯き容れられたためしがあったろうか。

死に急ぎする者に対しては、こちらも、作法通り、尋常に立合って、あの世へ送ってやるべきであろう。

気合烈しく、突き出して来た槍を、身をひねって、かわしたおれは、ゆっくりと、腰から、無想正宗を滑り出させた。

「この世の見おさめに、てまえの円月殺法をごらんに入れる」

過去に、幾十人かの敵へ向かって口にした台詞を、おれは、ここでもまた、くりかえした。

おれが、切っ先を、地摺りに落して、構えるや、けなげにも、敵も、汐合をはかるべく、腰を落して、ぴたっと、穂先を、おれの胸さきへつけた。

敵は、おれが、しばし、構えを不動にするのを、自身の鋭気が吸いとられるためであることを知らぬ。

不動の中に、無量の変動が生じ、懸る中に待ち、待つ中に懸る覚知がある。懸待一致

すれば、技熟して理に至り、理きわまって技に至る——これが剣の奥義だが、おれの兵法は、おのれの太刀をして無想剣たらしめず、敵をして、空白の眠りに陥らしめる殺法であるからには、汐合がきわまるあいだに、その用意をする。おのれ自身が、真我の我を得て、身を真空の中に置こうとするのではない。

おれは、月明を透して、敵の眼裡が潤むのを見てとった。

無想正宗の湾刃の鋩子に業念が罩る瞬間が来た。

おれは、無言で、しずかに、大きく、左から、円を描きはじめた。

敵の双眸は、それにつれて、徐々に、瞠かれ、眦が裂けんばかりとなった。

……その瞳孔から、闘志の光が消えた。

憑かれた者のむなしい色を、顔面に滲ませた敵は、地を蹴った。

「ええいっ」

突き入って来た刹那、円月を描く切っ先は、恰度、まっすぐに、おれの頭上に立っていた。

おれは、刀身を、一直線に、振り下した。

噴出する血煙りの下に、敵は、よろめき、膝を折り、そして次第に首を垂れて行った。

おれは、その夜のうちに、岡山城下を立去った。

三

おれが、まっすぐに、片上宿へひきかえして、「つるや」という旅籠へ入った時、すでに、江戸から呼び寄せた人間は、到着していた。

二階の部屋にあがってみると、まだやっと二十代になったばかりの、誠実そうな、骨の細い男が坐（すわ）っていた。

「檜垣清十郎殿の弟御か？」

「左様です」

「御家人――ですな？」

「いかにも――」

おれは、それだけ訊けば、充分であったが、わざわざ、路銀を添えて、早飛脚を遣（や）って、呼び寄せたからには、一応のしめくくりをつける必要があった。

きいの女が、迂闊（うかつ）であったのは、斃（たお）した敵の懐中から、おれが、その素姓をあきらかにする手形を抜きとっておいたことに、気がつかなかったことである。それは檜垣清十郎の姓名と江戸の住所が記されてあったのである。

檜垣清十郎は、仮名ではなかった。すなわち、きいの女の良人の敵須貝修之進とは、全

くの別人であった。
おれは、それを、この肉親を呼び寄せて、たしかめたのである。
「兄上は、放埒をもって、廃嫡となり、お手前が、家督を継がれた——そうですな？」
「左様です」
「兄上が、その後、どのようなくらしをなされたか、ご存じか？」
「存じ申さぬ。消息は絶えて、すでに、三年あまりになって居りました故——」
「江戸に住んでいたかどうかも？」
「小田原のあたりにいる、と風の便りを耳にして居りましたが……。兄の身に、どのようなことが起ったのか——それがしを招かれた程の、何事か、大事をひき起しましたか？」
真剣に凝視して来る若者から、おれは視線をはずして、
「兄上は、すでに、この世には居られぬ。池田藩士須貝修之進として、同藩の朋輩を闇討ちした咎により、その妻に敵討ちされた。てまえが、助太刀した」
「莫迦な！　……兄が、須貝なにがしなどで、あろう筈がない。兄は、年少より檜垣清十郎にまぎれもありませんぞ！」
「その事実をたしかめるために、お手前に、ここまで来て頂いた」
「兄を討ちとった後になって、それがしを呼び寄せたとて、何になろうか！」

若者は、激昂した。

「兄上の不慮も、身から出た錆と考えられなくはない」

おれは、冷やかに、云った。

「わざわざ、遠い旅をされたからには、兄上の仇討ちを、されるのも、弟御として、供養になろう。こんどは、お手前に助太刀することになる」

佐藤嘉兵衛の三年忌が、仇討本懐の報告をかねて、操山山麓の菩提寺で、盛大に催されたのは、それから、二十日あまり後のことであった。

法要の順序が、遅滞なくすすめられ、やがて、喪主きいの女が、焼香すべく、すすみ出て来た時、おれは、須弥壇の陰から、躍り出て、片手で、その身の自由を奪い、片手に無想正宗を抜き持った。

騒然となった堂内を、冷やかに見わたしたおれは、

「この妻女が、ここで焼香する代りに、墓前にぬかずいて、懺悔しなければならぬことは、当人自身、いちばんよくご承知の筈だ。その時間を頂こう」

と、云いはなった。

城代が、一同を制して、おれの前に立った。

「仔細を述べい。きこうぞ！」

と、云った。

おれは、にやりとした。この人物が、信頼するに足りる器量の所有者であることは、すでに、後楽園で対面した際、おれは見てとっていた。

「この妻女が、良人の仇討ちをしたことは、まちがいありませぬ」

おれは、云った。

「ふむ、それで——？」

「助太刀いたしたのは、てまえではない。てまえが助太刀して討ちとった檜垣清十郎なる人物が、助太刀して、敵を討ったと心得られたい」

「…………」

「この妻女は、小田原において、敵須貝修之進の在処をつきとめた。しかし、女手ひとつで、討ちとることは叶わぬと知り、檜垣清十郎なる御家人崩れの、腕の立つ人物をさがしあてて、これに操をゆるし、夫婦の約束までして、助太刀を乞うた。敵討ちは、首尾よく、遂げられた。……檜垣清十郎は、その直後、女が自分をすてて、国許へ逃げ帰ったのを知らされて、激怒して、あとを追った。……ようやく追いついたのが、隣国の有年坂峠であった。檜垣清十郎にとって、不運であったのは、そこに、てまえという気まぐれな素浪人が、居合せたことであった。こちらもまた、良人の敵討ちと呼ばわることの妻女の、年増盛りの色っぽさに、つい、浮気の虫を起したのが、因果と申すものであ

った。……これで、お判りであろう、御城代」
「きいの女の処置を、自身にまかせよと申すのか？」
「なろうことならば、です」
「どういたす？」
「墓地に、檜垣清十郎の弟が、待って居ります」
城代は、ほんのしばし、おれを睨みつけていたが、大きく頷いた。
「よし！　存念通りにいたせ！」

それから一刻ばかり後、おれと檜垣清十郎の弟は、街道を東へ向かって、歩いていた。
若者の懐中には、自害したきいの女の黒髪がひとにぎり在ったし、おれの胸の裡には、なんとも名状しがたい、暗然たる不快感が澱んでいた。
と――。
おれは、後方に、騎馬の音をきいた。十騎をこえている。
おれは、若者に云った。
「先に行って頂こう」
「どうなさる？」
不安の眼眸に、おれは、笑ってみせた。

「あの老獪（ろうかい）な城代が、われわれを、このまま、腕を拱（こま）ねいて、国の外へ出してくれる筈はない。白刃の土産をくれようと、いう。せっかくの好意だから、貰（もら）って行こう。逃げたと思われるのは、首がちぎれてもいやな、困った性分にできている男なのだ、わたしは――」

おれは、若者を行かせると、やおら踵（きびす）をまわして、無想正宗が、またもやまきおこすであろう修羅場（しゅらば）へ向かって、自身の方から、足をふみ出していた。

狐(きつね)と僧と浪人

序の章

長野県の東部・佐久平（さくだいら）の西方に、八ケ岳の連峰が、紛々たる千年乱離の間に、永久かわらぬ偉容を、雲霧を開いて、そびえさせている。その裾（すそ）が、前山（まえやま）となって、ゆるやかに、千曲（ちくま）川原へのびている。

この前山村と大沢村との境にあたる一筋の径（みち）を、前山に向かって登ること一里あまりで、一ツ松と呼ばれる台地へ行き着く。この先は額を打つがごとき険路となる。

一ツ松の左手に見える半球状をした美しい丘陵を、土地の人は、「お狐塚（きつねづか）」と呼び、そこに小さな一宇の祠（ほこら）をまつっている。祠の前に、色褪（あ）せた赤い鳥居が、風雨で傾き乍（なが）らもならんでいるのは、これが稲荷（いなり）神社であることをしめしていた。

ところが、昭和の初年に、この祠の奥に、安置してあった木像の貌（かお）に、作りは稚拙乍ら、異様な美を発見した郷土史研究家によって、これが観音像であるという事実を明らかにされたのであった。

即（すなわ）ち、これは、神仏混淆（こんこう）の祠ということになり、以来、稲荷観音、と呼ばれるように

なった。

さらに、前山村の禅寺貞祥寺の書庫から発見された古びた文書によって、この木像の作者が、禅門中興の偉業を大成した白隠の門下所謂鵠林の逸材良源であることが立証された。と同時に、その観音像が刻まれるにいたった因縁は、いかにも神話的色彩をおびた風土から生まれた逸事として、郷土史研究家の興味を大いにそそったのである。

その文書を草した人は、かなり文学的表現に意を用い、まず、水滸伝の筆法を模して、「草木百年、雨露新たに、車書万里、江山旧し。尋常の巷陌も、綺羅を陳ね、幾処の楼台か管絃明かなり。天下泰平、無事の日、鶯花限りなく、日高く眠る。されど、ここに、駿河国駿東の人、幼にして得度し、朝夕法華経をひもとき、教旨を会得せんとすれども、至らず、また寺を移って掛錫すれども、参禅の巨益を信ずる能わず、ついに、一処不住の行脚の途にのぼり、飄々として山野を遍歴の果て、ここ信濃国八ケ岳の麓前山の奥に辿り着きて、黙照枯坐誓って解悟せんと、樹下に軟草を敷き、石と化したるごとく瞑目合掌し給う……」

と、書き出している。

作者は、この古びた文書に、土地の古老の話と、聊かの自身の空想を加えて、これから、一篇の物語を述べてみようと思うのである。

その一

良源は、伊豆竜沢寺の僧であった。住持は、白隠の高弟東嶺であった。

文書にあるごとく、良源は、東嶺に侍して、仏道修行に精進して、すでに三十歳を迎え乍ら、まだ「人天眼目」の妙理に契当することが出来なかった。

達磨(だるま)大師が、修行二十年におよんで漸(ようや)く蘊奥(うんおう)を尽したのを思って、自分のような鈍才が大悟するのは、さらに二十年、三十年の刻苦研鑽(けんさん)をつづけなければならぬ、と覚悟していた。師の師たる白隠禅師も、悟道の日にいたるまでは、おそろしい煩悶(はんもん)、懊悩(おうのう)、焦慮を経て、大悟したと覚っては自負慢心して、さらに参禅精進し、あるいは心労のあげく病痾(びょうあ)に犯されて、血を喀(は)きつづけ、絶望しては諸国を放浪しているのである。宗統白隠禅師の法統(ほうとう)を継ぐためには、それに百倍する努力をつくさねばならぬ、と良源は決意をしていた。

にも拘(かかわ)らず、良源は、毎夜、ひそかに、うめきをたてて、牀中(しょうちゅう)にのたうたねばならなかった。良源は、異常な精力の所有者だったのである。一夜のうちに、数回の自瀆(じとく)を犯さないではいられなかった。

良源が、師に、悲痛な告白の一書をのこして、竜沢寺を脱走したのは、三十歳の生誕

日を迎えた夜明け前であった。

雲遊三歳ののち、良源が、信濃にあらわれたのは、そのむかし、白隠禅師が、この国の飯山に赴いて、其処ではじめて、遂に苦悩を解消して大悟した、ときいていたからであった。

八ケ岳の神秘的な山容は、良源の心をとらえるに充分であった。

前山の奥にわけ入って、一樹の下を金剛の座とさだめ、心しずかに、結跏趺坐した。

曾て、白隠禅師が、美濃の岩滝山に登って、頂上の岩に坐して、古聖先徳の修行を思って、「やすれては寒しとぞ思ふ床の雪をはらふひまなき人もありしに」と、一首を口誦んで苦行した――それを偲びつつ、良源は、三日三夜を、そうして、微動もしないで、すごした。

だが――。

目を開いた時、良源の体内から、煩悩は、去ってはいなかった。

もとより、体力は衰え、思考の力も乏しくなっていた。にも拘らず、良源が、目を開いて、まず、見たものは、澄んだ青空に、ふうんわりと浮んだ一斑の吊し雲であったが、それは鮮かに、女の白い裸体にまぎれもなかったのである。

良源は、おのがまなこを刺したい、と思った。

がっくりとうなだれて、少時、名状すべからざる絶望に、身を浸していた良源は、や

がて、のろのろと立ち上って、幽鬼のごとく、蹌踉たる足どりで、山を下りはじめた。

虚脱の歩みは、道にふみ迷い、鬱蒼たる唐松の密林が、良源をおしつつんでしまった。

ふと――。

顔を擡げた良源は、二間の彼方に、ひとりの若い娘が、立ちどまって、じっと自分を瞶めているのを、みとめた。

一瞬、良源は、あまりの美しさに、茫然となった。

その眉目と肌は、まさしく、下界の女たちの持合わせぬ魅力をそなえていたに相違ないとしても、煩悩の僧を目眩ませるほど、神秘めいていた次第ではない。良源をして、自失せしめたのは、その華やかな、赤い衣裳であったかと思われる。山中に棲む娘のまとうべき着物ではなかったのである。いや、下界にあっても、これは、かなりな身分と地位をそなえた家の息女のいでたちであった。

折も折であった。男と同じみなりをした木樵の娘に出会うたとしても、その煩悩の火に容易に油をそそがれるであろう状態にあった良源である。

際立った美しい貌と白い滑らかな肌と、そして、彩りあでやかな衣裳を見せつけられた良源が、咄嗟に、途方もない錯覚を起したとしても、咎めるにはあたらない仕儀であったといえる。いや、この場合、良源が、おのれを救う唯一の、無意識的な内観法であったろう。

良源は、その場へ、べったりと坐るや、女にむかって、合掌したのである。
迷妄の凡心、惑溺の罪障、業感縁起、救済の誓願、寂光土の久遠の生命、大円鏡知、仏性の光明……仏教の持つあらゆる人間の現実と理想のかけはしであるロマンティシズムが、ここに、観世音菩薩として具現された——。

良源の脳裡には、あるいは、継母に悩まされて雲雀山の難を遁れ、当麻寺に入って蓮糸を蒐めて曼陀羅を織った中将姫あたりの麗容が、掠めていたかも知れぬ。

いずれにせよ、いま、眼前に彳む姿は、おのれの仏道に大いなる黙示を与えるために出現した、と良源は、信じたのである。

いくばくかの合掌瞑目を終えて、良源が、目を開くと、其処に、すでに観世音菩薩の姿はなく、かわりに、一匹の狐が、前足を揃えて坐っていた。

「お——」

瞠目して、凝視していると、狐は、ゆっくりと起きあがって、歩きはじめた。良源は、縄で曳かれるように、そのあとに従った。

消え消えの杣道をみちびかれて、良源が、やがて、見出したのは、攀じもならぬ絶壁の下に、ぽっかりと口をあけた洞窟だった。狐は、その中へ、悠々と入って行った。

洞窟の中には、さらに、良源の信仰心を満足せしめる用意があった。古びてはいるが、褥が設けられ、古樹の切株で作った卓の上には、乾飯、糜餅、乾魚、打鮑、鰹節、乾味

噌、海草類、梅乾、氷砂糖などのほかに、万里酒までもそなえてあった。万里酒は、大麦の粉を味淋と焼酎と等分して煉り丸めて陽に乾したものである。温湯に入れて溶けば、ただちに酒になる。

良源は、霊狐を使って、此処へみちびいてくれた観世音菩薩に、声高く感謝をとなえておいて、それらの食料を夢中で口にした。

心身の力を整え了えた良源は、結跏趺坐すべき場所こそ、此処にえらばれた、と信じて、あらためて、その座に就いたのであった。

その女が、この洞窟内へふらりと入って来たのは、それから、小半刻のちのことであった。

女は、良源の姿を発見すると、さっと身を翻して、おもてへ走り出て行った。

彼女がつれて来たのは、くくり袴に、けものの皮の袖無しを羽織った若い男であった。

これもまた、山の男ではなかった。皮膚こそ陽焼けているが、面貌はかなり品もあり、目くばり、口のひき緊りぶり、身ごなしなど、人間と人間の闘争場裡において、瞬時も油断なく生きて来た者のみが持っている鋭さをしめしていた。

「おい、お坊さん、ここで修行されるのは、迷惑だ。出て行ってもらおう」

語気鋭く、男はあびせたが、良源は、耳がないごとく、微動もしなかった。

——千仏場中、千仏に嫌われ、群魔隊裡、群魔に憎まる……。

そんな言葉が、胸中で、力強く誦されていたに相違ない。

「糞坊主！　こっちから、引導を渡してやろうか」

埒があかぬとみて、男は、いきなり、懐中から匕首をひき抜いて、良源の咽喉さきへ、突きつけた。

だが、良源の自若たる態度は、寸毫も変らなかった。

良源は、巨漢であった。幾歳月の苦悩の漂泊が、その魁偉へ、さらに凄味を加えていた。

おどしても、すかしても、さらに動ずる気色をみせぬ生きた羅漢は、ついに、男を譲歩させた。

「勝手にしろ、糞坊主！　だが、いいか、貴様も生身を持っているからには、こっちがやること次第で、いつまでも石仏面はしていられねえ筈だぞ。その時になって、ビクとでもしてみろ！　ただでは済まさねえぞ！」

まさしく――。

それから、一刻も過ぎない頃合、したたか酒をくらった男と女は、良源の存在をかえって刺戟として、みだらに、もつれ合って、褥へ倒れたのであった。

良源は、半眼裡に、ひきはだけた緋のものから、空ざまに投げられた白いゆたかな下肢が、逞しい筋骨の黒い軀幹へ、蛇のように巻きつく光景を、目撃した。

そして、それは、あまりにも、本能をほしいままに狂おしくむき出したが故(ゆえ)に、良源をして、官能の衝動を抑える必死の道心をふりしぼらせる逆効果があった。
男と女が、褥の上で、ぐったりと動かなくなった時、良源は、心中で、
——克(か)った！
と、叫んでいた。

その二

物語の舞台は、下界へ移る——。
前山山中に、その出来事があってから、二月あまり経(た)って、雨期を迎えた千曲川の流れは、水勢を増していた。（当時、この川は、蜘蛛手(くもで)に乱れて流れ、川原は広かった。普段は、その広い砂磧(させき)の処々に、ほそぼそと流れていて、ひとたび雨期となるや、一に合して、奔流と化すのであった。臼田(うすだ)町の奥に、今日でも、三分(みぶん)という地名がある。川が三流に岐(わか)れていた故に、この名が生れたのである）
左岸に野沢、右岸に中込を置く法度(はっと)川原も、水の涸(か)れた時期は、子供たちの恰好(かっこう)の遊び場所となっていたが、いまは、満々たる流れに、両岸にむらがる群衆の険悪な様相を映していた。

野沢側は、松平縫殿頭の領土であった。中込側は、天領であった。

すでに、このことだけで、両岸は、敵視し合う宿運を背負うていた。曾て、天明三年、未曾有の饑饉に見舞われ、上州碓氷郡方面の一揆が、横川の関所を破って、信州へ乱入した騒動があった。その際、暴徒は、南佐久、北佐久一帯を荒しまわり、勿論、野沢をも蹂躙し去ったが、天領たる中込だけを避けて通過して行ったのであった。

のみならず、饑饉の年に、上納米を免じられるのは、常に天領のみであった。

その天領の右岸が、雨期に入るや、直ちに、大規模な堤防を築きはじめたのである。

一方の岸が堤防を築けば、片方の岸は、必ず、決潰して、人家田畑は漂蕩し去る。川で貫かれた小盆地の信濃にあっては、記録された水害が、夥しいのである。

もし、護岸工事をやるとするならば、両岸同時になさねばならぬ。しかし、相呼応するには、松平藩の内政は、あまりにも窮迫していた。

当然、近い将来の洪水が予想され、左岸の百姓はもとより、陣屋の武士たちも、右岸の工事を睨む目に殺気を帯びさせて来ていた。

暗夜に、新堤を崩す冒険は、すでに、数度演じられていた。天領側は、躍起になって、その破壊者を捕えようと、夜警の人数を増していた。数日前に、百姓を一人捕えたが、これは年寄りで、夜鰻をとりに来たのであった。しかし、代官は、弁解をきかず、見せしめのために、川原に曳いて、首を刎ねた。左岸から、この光景を目撃した百姓たちは、

三塚の陣屋へ走って、この残虐(ざんぎゃく)を訴えた。激昂(げきこう)した若い藩士たちは、数騎つらねて、右岸へ乗り込もうとして、はせつけた重役に諫止(かんし)されたことだった。

小藩としては、天領のいかなる横車をも、唇(くちびる)を噛(か)んで、通さねばならなかった。反抗の記録を重ねるうちに、それが藩の運命を左右する罪状として、幕府大目付の手に握られる危険があった。

天領側では、鰻とりの老人の首を刎ねる光景を見せつけて、露骨に挑戦して来たのである。

これに対して、松平藩の重役は、こちらもまた夜警を置いて、対岸の堤を破りに行く者を取締る自重策をとらざるを得なかった。

そうした危機を孕(はら)んで、来る日も来る日も雨に降りつづけられているうちに、珍しく、からりと、雲ひとつない晴天の一日を迎えた。

人の気分は、天候によって、かなりかわる。眩(まぶ)しい陽光にかがやいた千曲川の美しい景色は、ひさしぶりに、殺気を払って、平和な、のびやかな空気を満たした。

陽が傾いて、松平藩の年配の士が、重役の内意を携えて、右岸へ渡るべく、小者一人したがえて、葦(あし)の茂みをわけて、砂磧へ降りて来た。

渡り口のある小高い場所へ歩み出し乍ら、ふと、夕焼空を仰いで、

「このぶんなら、明日も晴れであろう」

なごやかな気色で、呟いた——その刹那のことであった。

うしろで、あい槌をうとうとした小者が、ごくっと息をのんで、立ち竦んだ。笠を被った主人の首が、その五体をはなれて、二尺あまりも、刎ね飛ぶのを見たのである。信じられないことであった。小者は、わが目を疑った。

次の瞬間、主人の首が、自分の足もとへ落ちて来たのを見、同時に、首なき胴が、頸口から真紅の血を噴き上げつつ、撞と横倒しになるのを見て、小者は、世にもおそろしい悲鳴をふりしぼった。

へたへたと、その場へ腰を抜かした小者は、恐怖動転の眸子に、映すでもなく、葦の茂みから、一匹の狐が、さっと躍り出て、風のように、野の方角へ走り去るのを映した。

百姓が三四人、かけつけて来た時、小者は、両手を砂について、小児のように慟哭していた。

近くに設けられた警備小屋から、急報を受けてとんで来た若い士たちは、当然、天領側のしわざと見てとって、蒼白になり、無言裡に互いに顔を見かわすや、一斉に、渡り口へ奔ろうとした。

すると——。

その行手をはばむように、そこの小高い地点に、うっそりと立ち現われた者があった。黒羽二重着流しの浪人者であった。異相というに足りる彫のふかい、暗い虚無的な翳

を刷いた風貌の持主であった。年齢は、三十前後であろう。
ふところ手で、素足に雪駄をつっかけた様子は、つい、そのあたりから、ぶらりと出て来たとしか見えなかった。
「おいっ！」
気早やな一人が、もう敵意をみなぎらせて、睨みつけた。
「どこへ行く？」
それに対する浪人者のこたえは、小莫迦にしたような冷やかなものだった。
「べつにきめては居らぬ」
視線は、士たちの頭上を越えて、砂礫を朱に染めた無慚の死骸にあてられていた。
「刀をあらためさせてもらうぞ！」
そう迫られると、薄ら笑って、
「あの御仁の首は、刀で斬られては居らぬ」
「なにっ?!」
「わたしは、首が飛ぶさまを、向う岸から眺めて居る。……おぬしたちも、小者から、対手の姿を見なかった、とききとっている筈だ。その不審をたしかめに、こちらへ渡って来た者だ、と思って頂こう」
浪人者の口調も態度も、明快で、冴えていた。そのまま、すたすたと歩き出すのを、

士たちは、疑惑の目を光らせつつも、さえぎるすべを知らなかった。

浪人者は、ひとときの明るさを増した斜陽をあびて横たわっている死体に跼みかかって、その切口を調べた。それから、ずうっと視線を、前方の葦の茂みへ移して、何事かを思案していたが、つと立ちあがると、集った人々を見渡して、

「首を刎ねた武器は、どこにも落ちてはいなかったな？」

と、たしかめた。

奇怪な事件というよりほかはなかった。

あたりに、人影はなかったのである。葦の茂みに、曲者がひそんでいたとしても、五間余もはなれていた。何かの飛道具を使用したのなら、当然、それは、被害者のかたわらに落ちている筈であった。小者は、全く人影をみとめず、ただ一匹の狐が、葦の茂みから躍り出て、野の方角へ掠め去るのを見ただけであった。

仆れた士の、使者としての目的は、隠密裡のものではなかったし、右岸側に於て、来るのをはばむ理由があるべくもなく、また左岸側としても、それに、平和をもたらす希望をかけこそすれ、嘆願哀訴を卑劣と憤ってこの暴挙を企てる者があらわれたなどとは到底想像できなかった。使者は、温厚な気質の所有者であったが、武士道の吟味にはずれるような振舞いをとるような士ではなかった。藩中、驕傲な代官と対座して、謙譲の態度を持しつつも、最後の面目を立て得る、殆んど唯一の人格者といえたのである。

この平和の使者を暗殺する、いかなる動機も考えられなかった。
浪人者は、続々と集って来た人々の言葉をきくともなくきいて、この暗殺が不可解であることを知った。
そのうちに、小者が、譫言のように、狐を見た、と口走るのをききとがめた浪人者は、それが走り去った方角を訊ねた。
「……そうか！」
浪人者は、合点した。
「貴公、下手人の仕業について、何か思いあたるふしがおありか？」
士の一人が、すがるように問うた。ほかの士たちが、浪人者を見る目も、ひとしく、期待に光った。
浪人者のただよわせる不思議な雰囲気は、いつの間にか、自身を、好まずして、この場の中心的存在にしていた。その行動も、期待させるだけの、無駄のない、落着きはらった頼もしいものだったのである。
浪人者は、士たちの期待に、口でこたえるかわりに、一人の百姓が腰にさしている大鎌を借りうけると、十間彼方のひょろ高い一本松へ、目をそそいだ。
とみた一瞬、浪人者の片袖が躍って、大鎌は、その手からはなれると、きらっと斜陽をはじきつつ、宙を飛んだ。

人々は、松の一枝が、幹から刎ねられて、高く舞いあがるのを見た。

浪人者は、士たちをかえり見て、

「あの葦の中から、この様な真似が為せぬことはない。但し、兇器が、消えうせたことに疑念はのこるが……」

「狐の仕業か！」

真剣な表情で、そう云う一人へ、浪人者は、微笑して、

「そうかも知れぬ。狐はとび出したが、ついぞ、人間はあらわれなかったと、小者が申しているのだから――」

「織田殿には、狐に祟られる因果があったのか？」

素朴な疑問を口にする者への、浪人者の返事は、

「この川原のもめごとを、円満に納めたくない狐が、この地に棲んでいるとみえる」

その皮肉なせりふだった。

そのせりふをのこして、浪人者が歩き出すと、士たちは、あわてて呼びとめて、この野沢の大庄屋の離れを宿にするようにすすめた。何処の何者とも知れぬこの浪人者が、いまや、巍然たる大きな存在となって、自分たちの楯になってくれることを、もはや、誰人も疑わなかった。

浪人者の目は、その時、ひとりの醜い百姓娘へあてられていた。

娘は、怯えて、顔を伏せた。
浪人者は、その前へ歩み寄ると、
「娘さん、お前の家に泊めてもらおうか」
そう云った。
一同は、呆気にとられた。娘の家は、村でも最下位に属する水呑百姓だったのである。その貧しさは、娘のみなりにもあらわれていた。
えらぶにことかいて、何故に、浪人者が、その貧農の家をえらんだのか、人々には、全く納得がいかなかった。
理由は、あった。
娘の髪に、簪がさしてあった。いかに貧しいとはいえ、娘であるからには、簪をさしていることに不思議はなかった。不審なのは、その簪の素晴らしさであった。鼈甲で作られていて、玉は珊瑚にまぎれもなかったのである。よもや、この娘が、十数金のねうちのある品を髪に飾っていようなどとは、誰一人気づいてはいなかった。いや、娘自身、それがそれ程の高価なものとは夢にも気づいていないに相違ない。そうでなければ、こんなにも無造作に、さしているわけがないのである。
浪人者は、それが真物であると見抜き、その不審に、どうやらこの男生来の鋭い直感力を働かせたとみえた。

その三

当時――。

山間地の村落の貧しさは、今日それを眺めて感じる悲惨とは、比べもならぬ状態にあった。

海へそそぐ野の川では、三角洲が年々伸びて、つぎつぎと豊沃な新田ができてゆくのにひきかえて、山間地にあっては、上流へ溯りつつ、渓谷の斜面へ、石垣を築いて水田を造りあげるのであった。山一面を、それで覆うている光景は、いたるところに見出される。そのおどろくべき努力にも拘らず、地味と水量の乏しさ故に、むくいられるところは、あまりにも尠かった。のみならず、つくった穀物の大半は、上納しなければならなかった。隠し田に対する幕府の厳罰政策は、いかなる山奥にも、ゆきわたっていたからである。

その住む家は、太古の家と大差はなかった、といっても過言ではない。

丸太を横に積みあげた、所謂校倉造りの壁は、寒気をふせぐために考えられたものだが、土間の囲炉裏の煙で、襤褸のように、煤をぶらさげていた。屋内は、殆んど土間であり、囲炉裏は、じかに土を掘り剜られたものであった。まわりには、小板が張ってあ

るだけである。奥に、蓆を屋根裏から吊してあるが、その中が、寝床であった。ここだけは、床を張ってあるが、夜具は、藁であった。

土間には、炊事の道具と農具が、わずかばかり置かれ、木箱にのせられた数基の位牌が、自分たちが送った生涯と全く同じ暮しをつづける子孫たちを見まもっている。

戸口に据えられた肥料桶は、即ち厠であった。

そして、それへすてる汚物も乏しいくらい、家族の腹の中が、年中ひもじかったことは、いうまでもない。

いま——。

昇って来た十三夜の月を背中に受けて、のそのそと、杣道を辿って来た百姓も、そうした家に住む一人であったが、どうしたことか、貧困におしひしがれて肩重く首をたれるかわりに、陽気そうに、調子はずれな草刈唄を、口ずさんでいたのである。

　おかか、呼んどくりゃ
　朝草刈るよ
　人が二把刈りゃ、三把刈る

ひとり、にたにたし乍ら、はこぶ足どりは、餓えた者のそれとは、到底思えない。

「おや——？」

ふかい竹藪をまわって、わが家を、彼方にのぞむ地点へ出た時、吾七というこの百姓

は、びっくりして、立ちどまった。

開けはなった戸口から、あかあかとした明りとともに、笑いさざめく声が、流れて出ている。それも、二人や三人ではないようである。

——娘め、なんのために、人を寄せ居ったんか？

烈(はげ)しい疑惑を、全身にあふれさせつつ、吾七は、そっと跫音(あしおと)しのばせて、横手へ忍び寄ると、丸太壁の隙間(すきま)から、土間を覗(のぞ)いた。

唖然(あぜん)としたことだった。

十数人の村民たちが、囲炉裏をかこんで、酒をくらっているではないか。炉にかけられた大釜(おおがま)からは、鶏の煮える旨(うま)そうな匂(にお)いが、湯気に乗って、舞い立っているのである。

見知らぬ顔が、その中にあった。これは、浪人者であった。腕を組んで、囲炉裏をへだてた正面の者から、話をきいているのであった。粗朶火(そだび)の赤い炎をあびた彫のふかい横顔は、面相を観(み)る力に乏しい吾七をして、その神経に微(かす)かな戦慄(せんりつ)をつたわしめるほど冷たい色をたたえていた。

吾七は、首をねじって、苦心して、話し手の顔を見てとって、さらに、愕然(がくぜん)となった。大庄屋ではないか。どんなに遠くからその姿を見かけても、頬(ほお)かむりの手拭(てぬぐ)いをとりはらって、腰を折らなければならぬへだたりのある人物が、わが家にあらわれているのである。

――狐め！
咄嗟に、たぶらかされまいと、吾七は、四肢に力をこめた。
――くそ、どうしてくれようぞ！
ぬけぬけと、わが家へ乗り込んで来た古狐を、ひっ捕えてやろうと、吾七は、きょろきょろと、てごろの得物を物色した。
ところが、この時、吾七の耳にきこえたのは、その見知らぬ浪人者が云った言葉であった。
「では、ひとつ……狐の話をきかせてもらおうか」
――狐が、狐の話を……？
吾七は、ふたたび、怪訝の視線を、隙間から、内部へ投じないではいられなかった。
「左様でございます。狐の話と申しますと、当地では、それはもう、掃いてすてる程ございますので……」
大庄屋をはじめ、村人たちの目が、急にかがやいたのは、いかに、この地方に、そうした迷妄が根強く信じられているかという証拠であった。
皆が、こもごも、大真面目で語りはじめるのを、浪人者は、微笑し乍ら、ききとりはじめた。
岸野村今岡の医師が、大沢へ行く途中、この前山村の貞祥寺まで来ると、村境の夫婦

柳の方から、使いが来て、いま難産で困っているから、是非寄って診て貰いたいと、ねがった。そこで、早速に行って、ぶじに産ましてやった。後日、また大沢へ所用あって赴くところ、件の使いがあらわれて、先日のお礼に一献さしあげたい、と誘った。大変な御馳走だったし、こどももまるまると肥って元気そうだったので、医師は、大いに満足して、辞した。恰度、その日、貞祥寺に、檀家を集めての振舞いがあったが、どうしたのか、御馳走が、一人前、足りなくなっていた、という。

切原村から栄村へ越える雁峰という山には、おくら狐というのが棲んでいた。栄村に、おくらという美人がいて、屢々その女に化けて、通行人を騙したので、その名がつけられた。ところが、某日、本物のおくらの方が、行方をくらました。村人総がかりで捜しまわっていると、むこうから、紺の大風呂敷の包みを背負ったおくらが、戻って来た。自分の名をかたる狐めを捕えて来たという。みなが用心しつつ、風呂敷をひらいてみると、死んだようにぐったりとなったおくらがあらわれた。その時もう、背負って来たおくらの方は、姿をかくしてしまっていた。背負って来たおくらの方が、狐だったのである。本物のおくらが、男にすてられて、自殺しようとしたところを、たすけてくれたのであった。

栄村上村新田の山に、すごっぱというところがある。そこにお蝶という狐が棲んでいて、時々雁峰のおくら狐と一緒になって、三味線に月琴を弾いて、村里を流し、若者た

ちを誘き寄せたものだった。尤も、その時は、いたずらは、決してしなかった。

切原村勝間の大嫗堂にも、美人に化けるおさき狐というのがいた。どんな用心ぶかい男でも、大嫗堂を通れば必ず化かされるので、ある男が、遠く北川の田圃をまわって、臼田へ出かけた。坊主山の清水辺まで来ると、素敵に美しい娘とすれちがった。ふらふらとなって、あとを尾けて行くと、いつの間にか、大嫗堂の前に来ていた。娘が、堂内へ、すっと消えたので、男は、そっと忍び寄って、格子戸の破れ穴から、中を覗いた。とたんに、イヤという程、背中をなぐりつけられて、われにかえった。ふりかえると、馬方が、睨みつけている。男は、馬の尻へ、顔を寄せていたのであった。

「ふむ――。この地方の狐は、美人に化ける術に長けているとみえるな。いたずらも、愛敬のあるものらしい」

浪人者が、云うと、一人が、

「いえ、旦那様。性悪な狐も居りますでございます。……その鳴きかたも、ちごて居りましてな。人間を仰天させる不思議を起す時は、カインカインと鳴きますするし、何かよろこびごとを知らせる時には、普通にコンコンと鳴きますでございます」

「つまり、近頃は、狐は、カインカインと鳴くというわけだな？」

浪人者は、真面目な面持で、訊ねた。

すると、大庄屋が、自分は、以前はそんな鳴きわけなど信じなかったが、二年ばかり

前から、たしかに、それがあることを知らされた、とこたえた。

ある者が、神社わきの夜道を辿っていると、境内の石燈籠(いしどうろう)の明りの中で、天狗(てんぐ)そっくりの神様と狐が、博奕(ばくち)をしているではないか。立ち竦(すく)んで、見戍(みまも)っていると、どうやら敗(ま)けたらしい神様が、すっくと立ちあがって、狐にむかい、「約束通り、これから夏山で、狐狩りをするものがあれば、神罰を下してやる故、安堵(あんど)せい」と云いきかせていた、という。

また――。

血気の若者が三人、神罰があたるかどうか、ためしてやれ、と弓矢をもって、前山へ登ったところ、突如、頭上の絶壁から、大石が降って来て、色をうしなって、遁(に)げもどった、という。

そうした不思議な話を、さらに、二つ三つきいてから、浪人者は、

「しかし、その神罰をおそれずに、人目をしのんで、山へ行く者が、一人や二人、村には居るのではないか？」

と、問い糺(ただ)した。

一同は、とんでもない、そんな不埒者(ふらちもの)は一人もいない、と強く否定した。

この時、吾七が、息をつめ乍ら、そうっと、そこから離れていた。こっそり、山へ行ったのは、この吾七だったのである。また、山へ行ったのが、自分以外に誰もいないこ

とも、吾七は、知っていたのである。

それから、一刻あまり後のことであった。

吾七は、隣村との境にある桑畑の中の、傾きかかった物置小屋にひそんで、苛々と、闇の中で、目を光らせていた。

小走りに近づいて来る跫音がして、

「お父——」

と、呼ぶ声に、吾七は、いきなり、戸をひき開けてひきずり込むやいなや、無言で、力まかせの平手打ちをくらわせた。

ひィいっ、と小さな悲鳴をあげてぶっ倒れた娘は、そのまま、息をはずませて、動かなかった。

「ど阿呆っ！　……な、なんじゃ、あ、あの有様は——」

吾七は、闇にしろじろと、めくれ出た娘の太股のあたりを、蹴とばした。

「どうしたんじゃ、あれは——、ぬかせ！」

「お、おさむらいが、大庄屋様はじめ、村の衆をつれて、わしの家へついて来てしもうて……」

「なんで、ついて来た？」

娘は、磧（かわら）におけるいきさつを、きれぎれに、要領わるく、説明した。
娘にも、どうして、あの浪人者がついて来たのか、わからぬ以上、吾七にわかる筈もなかった。
「おのれが、うろうろと、見物に行き居ったからじゃ……山のことが、ばれてみい、村から、どんな仕置きを受けるか……くそめ！　あの浪人者は、わしらの秘密を、かぎつけたにちがいないんじゃ！　もう、村には居られんわい。今夜のうちに、逃げ出すよりほかは……」
そこまで云った時、不意に、戸がひき開けられた。
吾七親娘（おやこ）は、撥（はじ）かれたように、片隅（かたすみ）へ跳び退（の）いて、からだをくっつけあった。
月を背にして、うっそりと、戸口に立つ浪人者は、冷やかな声音で、
「山で、何をひろった？」
と、ずばりと訊ねた。
二人が、唖（おし）のように口をつぐんで、おののいていると、浪人者の顔は、声なく笑ったようであった。
「白状させたからといって、こちらへ取りあげようとはいわぬ。……娘のあたまの簪（かんざし）も、ひろいもののひとつであろう。……どこで、どのようにしてひろったか、それだけを打明けてもらえばよい」

穏かに、促した。
吾七は、膝をそろえて、頭を垂れて、観念した。
この春さきのことであった。前山へ入るな、という村の申合せを裏切って、吾七は、こっそり、のぼった。前山の奥に、いちめんの竹藪がある。ここに生える、小指のさき程の筍は、珍味とされていて、小諸や岩村田の城下へ持参すれば、かなりのあきないとなるのであった。吾七は、それを採る欲望に克てなかったのである。
七合目あたりに、狐をまつった祠がつくられていて、のぼって来た者は必ず、これへ供えて、そのいたずらをまぬがれることを祈るならわしだった。
この日、吾七は、殊に、敬虔に、その前へぬかずいた。
合掌をおわって、腰をあげようとして、吾七は、格子戸の中に、きらっと光るものを発見した。おそるおそる覗き込んでみると、焙烙に、銀の小粒が盛られてある。そして、それへ、まっすぐに、簪が立てられてあった。
焙烙がおさえた紙には、この祠より奥へ入ることは断じてゆるさぬ、敢えて犯せば一家鏖の祟りを受けるであろう、ただちに、この銀子を頂いて下山せよ、と平がなで記してあった。
ききおわった浪人者は、ひくく声をたてて笑った。
「狐も、山奥へ人を入らせないためには、いろいろ苦心するな。天狗の面をかぶって博

奕をしてみたり、大石を突き落してみたり、銀子を呉（く）れたり……、それだけでは、あきたらずに、川争いへ、皆の目を向けさせておくために、人殺しまでやってみせたか」

その四

数寄（すき）を凝らした草庵（そうあん）式の小座敷であった。杉の長片（のね）天井、吹寄桟の横繁の腰障子、霞（かすみ）床（どこ）、次の間との境は七宝透彫（しっぽうすかしぼり）の欄間、すす竹の透窓、間仕切る襖（ふすま）は金泥（きんでい）が散らされてある。

木目が白く、その香ものこっているま新しい作りであった。

これが、大庄屋の離れで、領主を迎えるために、ごく最近建築されたばかりであった。

そして、その領主は、いま、この小座敷に敷きのべられた褥の中に、大庄屋の養女とともに在った。

二十歳ばかりになる養女は、緋縮緬（ひぢりめん）の寝衣をはだけて、太腿（ふともも）もあらわに、しなやかに肢態をくねらせつつ、領主松平縫殿頭（ぬいのかみ）の狂おしい愛撫（あいぶ）に、わざと小さな悲鳴を発したり、笑い声をたてたり、不意に、鋭い目つきになって、肩や腕へ噛みついたりしていた。

際立（きわだ）った美貌（びぼう）であったが、それよりも、その魅力は、雪をあざむく白い滑らかな肌であった。さらに、いちじるしい特徴は、一瞬毎（ごと）に烈しい迅（はや）さで変る表情であり、これは、

いかなる男をも眩惑してしまう魔力と思われた。

縫殿頭が、おりょうというこの娘を目にとめたのは、昨秋の狩の折であった。昼憩のため、この大庄屋の屋敷に立ち寄って、急に午後の予定を変更して、その権威によって、おりょうと一室に籠ったのであった。おりょうの奔放な情熱の応対ぶりは、縫殿頭を、完全にとりこにした。しかし、養子であった縫殿頭は、妬心強い奥方をはばからねばならなかった。そこで、月に一度の狩にことよせて、此処へ休息し、おりょうとの一夜を持つことになり、それが、今日までつづいているのであった。

ところで——。

今春の祇園祭に、このおりょうのあで姿が、天領側の代官の目にも、とまったのである。これは、公然と、使者をさし向けて来て、おりょうを所望した。もとより、領主の想いものを、父親と雖も自由にはできなかった。さりとて、このことを表示もならなかった。大庄屋は、一時のがれの口上で、ことわったが、催促は急であった。そして、拒絶の理由を、代官は、知るところとなったのである。

千曲川をはさんでの対立は、この娘をはさんでの敵視といいかえられなくもなかったのである。

ひくい唸りをあげて、おりょうの白いからだの上で蠢いていた縫殿頭は、

「……おりょう、そちは、幾人の男を知って居るのだ？　……もう白状してもよかろ

う！　云わぬか……」
「ほほほ——また、そのようないじわるを……。お殿様は、ほんに、やきもち焼きじゃ！」
おりょうは、不意に、邪険に、縫殿頭を突き落すと、くるっと、むこう向きになってしまった。
湯の具はひきめくれていて、むっくりとむき出され、盛りあがった臀部が、縫殿頭の目の前にあった。
縫殿頭は、たちまち、気弱く、くびれた胴のあたりから、そろそろと撫でおろしていたが、やがて、そうっと、臀部の柔襞へ、口をあてがおうとした。
この時、母屋の方から、置石をふんで近づいて来る跫音があった。
「殿——、江戸の浪人者儀、御命令により、罷り越し、あちらにひかえて居ります」
そう促されて、縫殿頭は、うるさげに、
「待たせておけ」
と、云いすてた。
まことに、おりょうは、男を物狂わせるように生れて来たような女であった。はじめて伽に出たその夜から、おりょうは、処女らしい羞恥をみせぬばかりか、対手が、領主である畏怖すらも感じていない模様だった。縫殿頭が、抱きすくめようとするや、おり

ょうは、強い抵抗をしめしたものだった。人形のようにおとなしく、身をちぢめている女しか抱いたおぼえのない縫殿頭にとって、これは、烈しいおどろきであった。縫殿頭は、その抵抗を、かえってよろこび、昂奮（こうふん）した。おりょうが、領主を嫌ったわけではない証拠は、抵抗しつつも、突如として、唇へ唇をおしつけて蛭（ひる）のように吸いついたりしたことであきらかであった。おりょうの白いからだのなかには、この信濃の山中を拓（ひら）いた先祖の野性の血が、流れているようであった。異性に挑（いど）まれるや、抵抗することで、自らの官能をあおりたてることを、本能的に知っているようにみえた。

反抗というものを知らぬ大名が、その野性の血に魅せられたのは、当然であった。

烈しい営みは、それから、さらに小半刻（こはんとき）あまりもつづけられた。

やがて、母屋の表座敷にあらわれた縫殿頭は、そこに端座している着流しの浪人者を見て、微かな不快の色を、その眉間（みけん）にしめした。袴もつけぬ無礼ないでたちの人間を、はじめて謁（えっ）するのであった。

「その方、織田六郎右衛門の死因をつきとめ、下手人を捕えてみせると公言致した由（よし）、左様か？」

「いささか、心あたりがございました故（ゆえ）――」

「下手人は、何者じゃ？」

縫殿頭が、せっかちに訊ねた時、襖が開いて、おりょうがあらわれ、自分の座に就い

た。そこは、浪人者の横顔を自由に眺め得る位置であった。

その異相に目をとめた瞬間、おりょうは、急に、強く惹(ひ)きつけられる表情を、かくさなかった。このような烈しい顔色の動きを、男に対して示したことは、いまだ曾てなかった。

おりょうの野性の血が、浪人者のあくまでも冷たい、虚無の翳濃い面貌が漂わせる不思議な雰囲気に接して、遽(にわか)に、いきいきとさわいだのであったろうか。

その灼(や)くような眼眸(まなざし)を送られて、浪人者は、視線をまわした。

瞬間——互いの心中に来た直感は全く別のものであったとしても、宙で合わせた眼光は、同じくらい強く烈しいものだった。

浪人者は、すぐにそらして、もとの無表情にもどると、

「てまえ愚考いたしますに、おそらくは、化生魔身の仕業かと存じます」

ぬけぬけと、そうこたえた。

縫殿頭は、迷妄を信じない点では、領主たるの品位を備えていた。

「その方、まやかしを信じて居るのか？」

極度な軽侮の色を、その顔に刷いた。

「御意——」

浪人者は、頷(うなず)いてから、

「およそ——天地の起源、万有の本体、霊魂の本質、生死の道理、鬼神冥界の有無、吉凶禍福の原理、栄枯盛衰の規則、天災地変の理由、迷心妄想の心理、賢愚資性の差異——等々、人知をもって説き明すことの不可能が、この世に瀰漫いたして居る以上、妖怪変化も起り得るものと信じて、あやまりではありますまい。……人心に、何故に、狂気が起るか——この一事すらも不明ではありませぬか」

一気に述べておいて、語気を穏かなものにかえると、

「てまえは、当地へ参った夜、地民を集めて、この土地に於て最も多くの妖狐譚があるを知りました。……まさに、狐は、妖獣かも知れませぬ。獣経にも、狐その類を悪むは鬼の乗ずるところなり、一名玄丘校尉、千年なれば淫婦に変ず、とあります。てまえは、いまだ、狐狸の妖を為すのを見たことはありませぬが、地民たちは、その目で、しかと見とどけて居ります」

そこまで語ってから、浪人者は、なぜか、うすく、口もとをほころばせた。

「狐めは、こうして居る時も、庭のあたりに、ひそんで、人間どもの振舞いを、ぬすみ見て居るかも知れませぬぞ」

「なんと申す——」

思わず、縫殿頭はじめ、侍臣たちが、庭へ目を投じた刹那——。

浪人者の右手が躍り、小柄が白光をひいて、そこへ、飛んだ。

しかし、庭の木立の中は、なんの反応もなく、依然として、ひそまりかえっていた。

縫殿頭が、さげすみの視線をもどすと、浪人者は、侍臣の一人にむかって、

「あの一番高い檜（ひのき）の根かたから、小柄が縫いつけたものを持参されたい」

と、たのんだ。

侍臣が、持って来たのは、黒い布であった。これは、顔を包むために作られたものにまぎれもなかった。

妖狐は、それを刺されて、周章（あわ）てててぬぎすてると、気配もなく、遁（のが）れ去った、とみえた。

「明日、狩をなさいませぬか」

唐突に、浪人者は、縫殿頭にすすめた。

「化け狐を捕えるのか？」

「いえ、狐ではありませぬ。てまえは、数年前、前山の山中で、珍奇なる鹿（しか）を見かけて居ります。珠数（じゅず）かけの鹿――とでも申しましょうか、その頸を、白毛が、珠数のように巻いて居る鹿であります」

「ほう――そのような鹿が、前山に棲んでいるのか？　噂（うわさ）はきかぬぞ」

狩好きな縫殿頭は、たちまち、興味をそそられて、目を光らせた。

「いつわりは申しませぬ。殿が狩をなされば、必ず、珠数かけの鹿は、お目の前を走り

ましょう」

浪人者は、確信をもって、明言した。

「よし、面白い。やろう。……したが、もし、その鹿が出なかったら、どうする？」

「てまえのそっ首でよろしければ、さしあげるにためらうものではありませぬ」

深夜——亥刻（いのこく）をまわっていたろうか。

黒い影がひとつ、そっと、裏口から忍び出た。

先刻まで、樹木を鳴らしていた風も落ちて、割れた雲間から月がのぞき、靄（もや）の野を照していた。

地を滑るようにして、裏庭をつききった影は、いぬつげの籬（まがき）を沿うて行き、萱葺（かやぶき）門の唐戸を、そうっと開いた。

おりょうであった。

この地方では、狐が里へ降りて来て、若者を誘い出す時には、「しょきしょき……」という、小豆磨（と）ぎの音で告げる、という。

その音を、おりょうはきいたのである。

裏手は、唐松の林になり、細い径がくぐっているのであった。

十歩ばかり進んで、おりょうは、小声で、

「松次郎さん——」
と、呼んだ。
木漏れの月明りを截りぬいて、数間むこうに、忽然という形容がふさわしい出現ぶりで、人影が、立った。
けものの皮の袖無し、くくり袴のいでたちは、漂泊の禅僧良源が、前山山中の洞窟で出会ったものであった。ついでに明かしておけば、良源が、その美しさに目晦んで、観世音菩薩の具現と錯覚した女は、おりょうだったのである。
おりょうは近づくと、
「昼間、大丈夫だったのかい？」
と、訊ねた。
「ひどい目に遭った。あの浪人め、ただものではないぞ。お前も、油断すな」
「今夜は、この家に泊っているよ」
「そうか。……彼奴、なんとかして、息の根を止めてくれる！」
呻くように、松次郎は、云った。
「それよりも、明日、山狩りがはじまるよ。浪人者が、そそのかしたんだよ」
「畜生！　野郎、感づきやがったか！」
「あいつは、前山に、頸を白毛が巻いている鹿がいる、と云い出したんだよ。そんな鹿

がいるのかい？」
「いねえ。いるもんか」
「浪人者は、見たと云って……嘘だったら、自分の首をやると、殿に誓うてみせたよ」
松次郎は、舌打ちした。
「そんな鹿をさがしに、頂上まで登られたんじゃ、これまでのせっかくの苦心が、水の泡だ」
「どうにか、おしよ」
「よし——。おっ！」
松次郎は、おりょうから、ぱっと跳び退くや、身を翻して、風のように奔り出した。
籬の陰に、人の気配があるのを、さとったのである。
唐戸を開いて、出たのは、浪人者であった。
おりょうの脇を駆け抜けざまに、脾腹へ拳を入れて、当て落しておき、松次郎を追った浪人者は、林を出ると、ぴたっと足を停めた。
そこは、青草の原がひろがり、あたりにちらばっている木は、みな幼かった。
径は、小川に沿うて居り、斜面に、大きな柳の木が、一本立っていたが、松次郎の速影は、その陰へ、とび込んでいた。
そして、次の瞬間には、そこから、いっぴきの狐が、非常な迅さで、躍り出ると、い

っさんに、月の野を掠め去ったのである。
それを見とどけて、浪人者は、月光を宿した眸子に、微笑を泛べたことだった。
「よほど、辛抱強く飼いならしたとみえる」
ひくい独語は、それだった。
浪人者が引きかえして行くと、おりょうは、まだ、そこに、死んだように俯っ伏していた。
無造作に、かるがると、かかえあげた浪人者は、そのからだを、自分の部屋へ運んで行った。
おりょうが、意識をとりもどした時、わが肢体は、一糸まとわぬ素裸に、ひき剝かれていた。
あっとなって、はね起きるや、数尺はなれて端座して、腕を組んでいた浪人者は、にやりとして、
「やはり、にらんだ通り、お前さんは、山窩の出であったな」
と、云った。
山窩の女は、その証しとして、腋の下に、朱で十字のいれずみがほどこされている、と浪人者は、きいていたので、それをたしかめたのであった。
おりょうの顔から、血の気が引いた。

数秒の沈黙を移してから、おりょうは、ふっと、目もとに、妖しい媚を刷き、そして、その媚を、白い裸像のすみずみまでひろげると、浪人者へ、いざり寄った。

ゆたかな双腕をさしのべて、浪人者の肩にすがると、徐々に近づける顔へ、もう官能の疼きに堪え得ぬ恍惚とした陶酔の色を滲ませていた。

熱い息が、浪人者の頬へかかった。

唇が、唇へ、ふれようとした瞬間、おりょうのからだは、他愛もなく、撥ねとばされていた。

「あいにく、わたしは、そこいらの大名とちがって、淫婦の数を知って居る。お前さんよりも、もっと巧みな手練手管を持っていた女ばかりをえらんだ、と自慢してもいい。……きものをひろって、うせろ！」

おりょうが、屈辱で、唇まで蒼褪めさせて、出て行くと、浪人者は、暗い自嘲の眼眸を宙に置いて、しばらく、微動もせずにいた。

「……このおれが、稀にみる百媚の美色を素裸にし乍ら、腕を拱ねいている。ふん、このおれとしたことが、だ。……美保代の霊が、おれの無頼の性を、このように白く晒してしまったのか」

鵠は浴せずして白し、という。おのれの天性は、泥まみれと思いなして、無頼に生きて来たこの浪人者が、ふっと洩らした感慨には、美しく貞節であった亡き妻が、自分に

捧げてくれた、限りない愛情を、日々新たなものに甦らせている悲痛を罩めているとみえた。

その五

領主の狩の行列は、その日、未明に、大庄屋の屋敷を出発した。略式であり、年に数回催されることとて、供揃いは、すくなかったが、それでも、もののしい眺めであった。

先頭を、狩場の標識とする家紋を染めた金の麾をさした竿と、大きな吹貫が行き、槍、弓、鉄砲、長刀などがそれにつづいた。

縫殿頭は、白銀の網代の端ぞり笠をかぶり、黒羅紗の陣羽織をまとっていた。徒士たちは、くくり袴に、それぞれの先祖伝来の陣羽織をつけて、白い鉢巻をしていた。

勢子は、いつもの倍の頭数が揃っていた。

勢子が、帯のように前山の裾野に一列横隊となって、法螺貝と鉦鼓を鳴らしつつ、一斉に登りはじめたのは、卯の下刻であった。

裾野は、末端を幅広い谿谷としている。谷の両側に亘れるのは、凝灰岩の累層よりなり、火山灰泥土を混じて、奇怪な大塊が、重畳していた。

いかにも、妖怪変化が棲むにふさわしいたたずまいであった。
磧(かわら)に異変があって以来、晴天つづきで、今日も、東天に、覆輪(ふくりん)を描きはじめた太陽は、光の潮を、山々の襞へ浸して、明暗を織っている。遠い八ケ岳は、水気の膜に掩(おお)われて、淡くかすんでいる。さらに遠い、雪をかぶった山嶺(さんれい)は、雲のように、蒼穹(そうきゅう)に溶けあっていた。
鯨波(げいは)は、こだまを招きつつ、山腹を揺りつづけた。鳥影が、絶え間なく、虚空(こくう)へ、翔(か)け去っていた。
この光景を、落葉松(からまつ)の林の上の、とある大岩から、眺め下していたのは、松次郎であった。
「……来やがったぞ！　くそっ！」
剃刀(かみそり)のように鋭く険しい目つきで、松次郎は、唸った。
杣道(そまみち)に、木立に、磧に、叢(くさむら)に、うごめく夥(おびただ)しい人影を、もしも、一挙に四散せしめる武器があったならば、松次郎は、そうしたかった。
「みろ！　いまに、踊らせてやるぞ！」
松次郎は、唇へ人差指をあてると、鋭く、ひゅっと吹き鳴らした。
それを合図に、下の林の中から、褐色(かっしょく)のけものが、急勾配(こうばい)の青草の、陽のある面へ、走り出ていた。

鹿であった。しかも、その頸は、ひとすじの白毛で巻かれていた。昨日、松次郎が、捕えたそれへ、巧みな細工をほどこしたのである。

矢のように掠めすぎる鹿影をみとめて、勢子が、どっと喚声をあげて、それにむかって、殺到しはじめた。

「ふん！　追っかけろ！　追っかけろ！　ざまをみろ！」

狂気のように口走る松次郎のそばへ、林の中から走り出たおりょうが、息をはずませつつ、攀じ登って来た。

「うまく、いったね！」

「うむ。……もうあの林から上へは、来やがらねえぞ」

そう云った途端、松次郎は、愕然となった。

十数人の徒士が、こちらの方角へむかって、猛烈な勢いで走って来るのをみとめたのである。

鹿がとび出した場所に、それを放った者がひそんでいるとにらんだ予定の行動であった。

「しまった！　計られた！」

迂闊(うかつ)にも、松次郎には、いまはじめて、それが判(わか)った。

浪人者が、珠数かけの鹿がいる、と公言したのは、領主に狩をさせるためだけではな

かったのである。山中深くふみ込まれることをきらう者があるならば、勢子を途中で阻止するために、注文通りの鹿を作って、それを放つに相違ない、と考えたのである。だから、珍獣は、珠数かけの鹿ではなく、赤い猪(いのしし)でも、白い狸(たぬき)でもよかったのである。

「おりょう！　お前、あの林から、南へ走れ！」

咄嗟の思案で、松次郎は、そう命じた。

おりょうは、ちょっと、逡巡(ためら)った。

「早くしろっ！　このままじゃ、とも仆(だお)れだ。お前は、捕っても、色狂いの殿様を、どうにでも、まるめ込むことができるんだ。……それとも、お前が、おれを裏切ったのか？」

「と、とんでもない！　あ、あたしは……」

おりょうは、山猫(やまねこ)のように目を光らせて、烈しくかぶりをふった。

「浪人者に籠絡(ろうらく)されたんじゃねえな？」

松次郎は、食いつきそうに睨んで、念を押した。

「あたしを信じておくれっ！」

「おいっ！　早くしろっ！　あそこまで来たじゃねえか！」

せきたてられて、おりょうは、反射的に、岩から跳び降りると、無我夢中で駆け出した。

それを見おくって、松次郎は、陰惨な笑いを、顔に刻んだ。

おりょうの姿が、林を抜け出て、丈のひくい樅の木や、赤い毒実をつけた接骨木が、まばらにちらばっている斜面を、飛ぶように走り過ぎて行きはじめるや、松次郎もまた、それに平行して、木立を縫って疾駆した。

徒士たちもまた、おりょうを追跡しはじめた。

やがて、古代山腹を匍って流れ落ちた熔岩が、怪奇な形状をのこしている地点に達した時、松次郎は、

「うむっ！」

満面を朱にして、攀じもならぬ絶壁上の岩を、突いた。

岩は岩を嚙んで、落下の連れをつくりつつ、騒然たる土煙りを宙に舞わせて、おりょうめがけて、襲いかかった。

松次郎は、おりょうの白い顔が、高く仰いで、鋭い悲鳴を発する状を見とどけ、すぐにそれが、濛々たる土煙りにつつまれるや、さらに、悪鬼のように、次の岩へ、手をかけた。

松次郎は、どうしても、おりょうを殺さなければならなかった。おりょうは、捕ったならば、必ず、口を割らされるに相違ないのだ。

「う……うむっ！」

渾身の力をふりしぼって、岩を動かそうとした——とたんに、
「阿漕な真似は止せ！」
冴えた一声が、背後からあびせられた。
松次郎は、一間を躍って、すっくと向かい立った。
浪人者は、朝陽を顔半面に受けて、両手をダラリと垂らしたなり、薄ら笑った。
「いろいろと心胆を砕いた模様だが、どうやら骨折損のくたびれ儲けだったようだな」
「うぬっ！」
松次郎は、帯の背に挿していた武器を、抜き持って、身構えた。
それは、漆黒に光る楕円形の、一種の利鎌であった。
「その兇器は、海のむこうの土人が使うしろものだろう。空へ投げて、飛鳥を切ると、また手もとへ舞い戻るときいているぜ。そいつを使って、川原で、織田なにがしの首を刎ねたろう。……熟練を要するということは、貴様が、海のむこうで、長い年月を暮していた証左になる」
浪人者は、鮮やかに、きめつけた。
松次郎の面貌は、憤怒と畏怖のために、かえって、静かな色にもどった。
息づまる、殺気漲る数秒間があった。
一瞬——。

松次郎の右手が翻って、兇器ぶうめらんは、異常な唸りを生んで、浪人者のまっ向へ、飛んだ。

躱(かわ)す間を与えぬ、おそろしい速力であった。両手を空けて待った浪人者に、居合の迅(はや)業(わざ)が具備されていなかったならば、その頸は決して安全ではなかったろう。

目にもとまらぬ水際立った冴えで、兇器を両断した浪人者は、からかうように、

「どうした？　刀は不得手か――」

と、云った。

「おのれがっ！」

松次郎は、腰の脇差を抜きはなちざま、地を蹴った。

この男には、ぶうめらんを使うほかに、意外の技があった。そして、その技に、絶大な自負があった。

彼にとって不運だったのは、それを受ける浪人者に、その意外の技に備える絶妙の刀法が用意されていたことである。

松次郎の五体は、半分あまりに縮まって、浪人者の頭上を翔けた。翔け過ぎつつ、白刃を、びゅうんと山気を搏(う)って、大きく旋回させた。

いわば、白刃を翼として、五体を宙に滑走させたのである。同時に、その翼にふれるものを仆す技は、必殺の一機閃電(せんでん)というべきであった。

まことに、松次郎の虚空よりの一撃は、神速の業をあやまってはいなかった。ただ、浪人者の動作が、それよりも間髪の差で、迅速であったということである。

　地上へ降り立った瞬間、松次郎は、よろめきつつも、ふみこたえた。

　浪人者は、その位置を半歩も変えては居らず、依然として、刀身を携げたなりで、じっと、松次郎を見戍っていた。

　白刃を杖にして、身をささえた松次郎は、緩慢に首をまわして、浪人者を、見た。その瞳孔は、すでにひらいて、焦点を喪っていた。

　生命なきからだが、さらにそれから、いくばくか、地上に立っていたのは、この山中をわがものにする妄執をすてかねたからであったろうか。

　にぶい音をたてて、死骸が、葎を割って伏した時、いつの間にか、そのかたわらに一匹の狐があらわれていて、哀しげに、その冷たくなりゆく足へ、顔をすり寄せると、小さく鳴き沈んだ。

　この時、岩のなだれ落ちた箇所へ、ようやく、徒士たちが馳せ着いて、その岩のひとつへ、下半身を下敷かれて、しろじろと仰向かせた顔を、眩しい陽ざしになぶらせているおりょうを発見していた。

　その寝顔は、ふしぎに、安らかで、清らかであった。山の娘が、山へもどって、その

ふところに抱かれた安らぎであったろう。

「息絶えたらしいな」

一人が、そっと近づいて、覗き込もうとして、地上をのびて来た一個の影法師に、愕(ぎょ)っとなって、あとずさった。

そこに立ち現われたのは、まさに、衆生の妄業力(もうごうりき)にふける閻羅(えんら)獄卒のたぐい——窮鬼(きゅうき)そのものの姿の一僧であった。頭髪も髭(ひげ)も、ぼうぼうとして乱れ、衣は襤褸(ぼろ)、四肢は枯木と化していた。

ただ——。

その悪臭穢軀(わいく)を白日に曝(さら)し乍ら、凝然と息をのんだ徒士たちに、みじんの悪寒(おかん)をも与えなかったのは、大きく瞠(みひら)いた双眸(そうぼう)が湛(たた)えている、ふしぎな澄みきった光であった。

「大なるかな心や、天の高きや極むべからず、而(しか)も心は天の上に出(い)づ。地の厚きや測るべからず。而も心は地の下に出づ。日月の光や踰(こ)ゆべからず。而も心は日月明の外に出づ。……天地、我を待ちて覆載し、日月、我を待ちて運行し、四時、我を待ちて変化し、万物我を待ちて発生す。……これを、最上乗と名づけ、また無上菩提(ぼだい)と名づけ、また正法眼蔵(しょうぼうげんぞう)と名づけ、また涅槃(ねはん)妙心と名づく」

その眸子(ひとみ)の光は、この会得をわがものにしたことを証しているかに思われた。

洞窟内に結跏趺坐(けっかふざ)すること月余、悟りを得て、飄乎(ひょうこ)としてあらわれた良源にまぎれも

なかった。
ゆっくりと、岩に近づいた良源は、瞑目合掌ののち、岩肌を撫でるがごとく両手を置いた。
すると、大きな岩は、かるがると動いて、おりょうの肢体から、どいた。
良源は、おりょうのからだを、かかえあげた。
「南無！　……観世音菩薩――」
目を遠くに置いて、良源は、ひくく、そう呟いたことだった。

それから半刻あまり後のことである。
浪人者は、ひとり、攀登（はんとう）を尽して、山頂の一角に佇（たたず）んでいた。その眼前にひらけているのは、けんらんたる赤色にうめつくされた広大なお花畑であった。
それは罌粟（けし）の花であった。
松次郎が、人知をつくしてまもろうとしたのは、この魔毒を含有する花だったのである。

終の章

古文書によれば、良源は、おりょうを葬ったのち、地民の懇望によって、前山村と大沢村の境である丘陵上に、一宇の庵室をむすび、黙照枯坐すること二十年を閲している。時折、里へ下って来て、道俗の応化や無限の法益をほどこしていたが、また、庵室にあっては、一木をえらんで、こつこつと、観音像を刻みつづけたのである。

そして、それが成って、いくばくもなくして、ある春の暁、なんの遺偈も残さずに、五十余年の生涯を終えている。

ところで——。

飄然として来って、また飄然として去って行った浪人者の素姓については、古文書は、次の数行しか費していない。

「家中及び村民等、しきりに、その姓名を問えども、応えず。去るに臨んで、一同の熱願もだし難ければ、浪士笑って、

眠狂四郎

と名のれり。けだし、その場にて思いつきたる仮名なるべし。爾後、その消息をきくことなくうち過ぎたり」

のぞきからくり

一

永らくご無沙汰いたしました。はやいものでございますね、おうかがいするのは、五年ぶりでございます。

いえ、べつにご当地へまわって来るのを、避ける事情があったわけでもなく、べつに、わずらいついていた次第でもございません。

実は、一年中旅をしているのに、厭気がさして、柄にもなく、江戸で、蕎麦屋をやっていたのでございます。隅田川沿いの諏訪町の角で、ほんの小さな店を、二年ばかりひらいて居りました。

てまえは、信州の生れでございますから、手打ちにはいささか自信があったのでございますが、江戸というところでは、味のよさだけで、店が繁昌するものではないことを、イヤというほど思い知らされましてね。

なにしろ、江戸趣味というのは、面倒なものでございまして、鰻屋の古漬、寿司屋の番茶、蕎麦屋のしたじなど、粋な江戸っ子衆の舌に合わぬと、それアもう、まるで盗っ

人のようにあしざまにののしられます。しきたりもうるそうございましてな、店をひらいた当初、入ってみえたお客から、一本つけてくれ、と云われて、燗をしようといたしますと、とたんに、べらぼうめ、蕎麦屋で、一本つけろ、というのは、もりをすってからだ、そんな作法も知らねえ田舎っぺの店の蕎麦が食えるけえ、と呶鳴りつけられたものでございます。酒が一本、空になった頃あいを見はからって、天ぷらを出し、それから、ざるをお出しする、というあんばいなのでございます。

一本の銚子を、ゆっくりと召し上るおひともあれば、あっという間に空になさるおひともございます。それに合せて、天ぷら、ざるをお出しする加減は、ご自分の紋所を打った割箸を持参なさるようなおなじみなら別でございますが、ふらりとおみえになったはじめてのお客には、これは、むつかしゅうございます。

そんな、こんなで、また、旅ぐらしの薬売りにもどってしまいました。やはり、餅は餅屋で、このあきないの方が、この松次郎には、性分に合っているのでございますね。

……はい。

ああ、いつぞやお話申し上げたご浪人さんのことでございますか。

あのご浪人さんのことなら、いくらでも、お話申し上げますよ。なにしろ、七年前に、はじめて、甲府街道でお近づきになって以来、なんと申しますか、切っても切れぬ合縁奇縁——と申しては、ちと大袈裟でございますが、ともかく、てまえには、生涯忘れら

れぬ御仁でございますからね。

この前お話申し上げたと存じますが、甲府を出た時から、前になり後になって、江戸への街道をひろって行くうちに、声をおかけしたくなり、

「江戸へお帰りでございますなら、おともさせて下さいまし」

と申し上げ、鄭重に腰をかがめた時、じろりと見かえされた——その冷たい目つきに、ぞくっと、すくみあがったとたんから、てまえは、あの御仁に、魅せられてしまったのでございます。

供をさして頂きたい、とお願いしても、べつに、否とも応とも、ご返辞をなさらずに、歩きつづけておいでででございましたが、てまえの方は、もう息がつまってしまい、商売柄の日頃のおしゃべりが、さっぱり、舌に乗って参らず、ただもう、その後姿の、もやもやと妖気でもただようているようなけしきに、固唾をのんで、あとをついて歩いているばかりでございました。

決して、てまえを無視なさっていたわけではなく、ものの二町も過ぎた頃あい、

「薬屋、連れになったからには、あまり神経をつかわぬことだな」

と、仰言ったことでございます。

てまえは、あっとなって、大あわてで、

「おそれ入ります」

と、頭を下げつつ、顔の冷汗をぬぐったのでございます。
肩をならべて歩くように、と無言でお示しになったしぐさが、別人のようにおやさしかったのも、てまえを、どぎまぎさせたものでございました。
……いえ――はい、最初の出会いのことは、この前、きいた、と仰言いますか、つい、あの御仁のこととなると、はじめての出会いの日の場面が思い出されて、くりかえして申し上げることになるのでございます。

二

去年の春、と申してもまだ桜がつぼみの、うすら寒い季節でございました。
下の諏訪の湯宿で、首尾よくお逢いできて――なにしろ、てまえは、あの御仁に巡り逢いたくて旅をしている、と申してもよろしいくらいでございましてね――、この街道をひろっていると、屹度お逢い出来る、と、予感がして、それがふしぎにあたるのでございます。
江戸へ戻る、と仰言ったので、大よろこびで、お供をいたしました。
お供をしたために、あの御仁に襲いかかる敵に、まきぞえをくって、あやうく、てまえも生命を落しそうになったことは、一度や二度ではございませず、こんどもまた、お

供をしているうちに、なにか異変が起るぞ、という気はいたして居りました。

笛吹川を越えますと、石和(いさわ)で、御代官のご陣屋がございます。川中嶋(じま)は、次の宿に相成ります。

石和宿はずれの茶店で、憩(いこ)うていた折でございました。

遠く馬の蹄(ひづめ)の音が起った、と思うと、あっという間に、そこへ近づいて参りました。江戸表へ至急の報(しら)せでもするお使い番か、と思うて首をのばして、眺(なが)めやりますと、陣笠(じんがさ)に野袴(のばかま)の馬責めのおさむらいでございました。

恰度(ちょうど)、茶店の前を、荷車を曳(ひ)いた老爺(ろうや)がさしかかって居りました。

老爺は、疾駆して来た騎馬をさけようとしたはずみに、あわてたあまり、路傍の野仏さんの供物(くもつ)石に車輪をひっかけ、積荷をひっくりかえしてしまいました。

地面に散乱したのは、雛(ひな)人形と雛祭の道具類でございました。甲府城下の問屋へとどける品でございましたろう。笹子(ささご)峠のむこうの都留(つる)郡の貧しい山がいの村々には、いつの頃からか、雛人形造りの技が発達して居り、名人と称(い)われる者も二三人いて、かれらが丹精こめて作った雛人形は、甲府勤番支配の検分吟味を経て、千代田の大奥へもお納めするということでございました。

馬をとばして来たおさむらいは、地面に散らばった可愛(かわい)い雛人形を、蹄にかけたばかりか、駆け抜けざま、

「邪魔ものめが！」
一喝とともに、老爺へ、びしっとひと鞭くれて行ったのは、あきれた光景でございました。
「畜生っ！　なんてえことをしやがる！」
叫んで、とび出して行き、倒れた老爺を助け起こしたのは、隣りの床几で、甘酒を飲んでいた旅姿の渡世人でございました。
三度笠も丹波産の合羽も紺の手甲脚絆もまだ新しく、どうやら、楽旅（修業の旅）のようでございました。
てまえは、その茶店に入った時から、この旅人に、目を惹かれて居りました。笠の下の顔が、まだ二十歳に満たぬ、目もとのすずしい、はっとするほど綺麗な造作だったからでございます。頬や口もとなどには、少年の稚さをのこして居りました。
てまえも出て行って、老爺を茶店の中へはこぶ手助けをしてやりました。額から唇までの鞭痕はひどいもので、どうやら片目はめくらになりそうにみえました。
てまえが、いそいで、背負い荷の中から、傷薬をとり出して、手当をしてやるあいだに、旅人は、せっせと、路上の雛人形をひろい集めて、荷車へもどしてやって居りました。そのうちの幾個かは、馬蹄で踏みつぶされ、首がはねとばされて、あわれな姿になって居りました。

雛人形をひろい終えた旅人は、茶店の婆さんに、
「あの気ちがい野郎は、どこのどいつだい？」
と、訊ねました。
怒気を含み乍らも、その声音は優しいひびきを持って居りました。
婆さんは、あれは石和御代官の弟御で、高山秀之進様といい、手のつけられぬ乱暴者ゆえ、地下の者はどんな目に遭わされても泣き寝入りするよりほかはない、と告げて、かぶりを振ってみせたことでございます。
「くそ、畜生！　代官の弟が、なんでえ。外道め！」
旅人は、憎悪に燃えた眼眸を、街道へ送って、
「戻って来やがったら、どうするかみてやがれ！」
と、叫びました。
てまえは、ちらと、ご浪人さんの横顔を視やりました。いつもそうであるように、その彫の深い面貌には、なんの表情もございませんでした。
てまえは、再び馬蹄の音が起ると、旅人が、ぱっと、往還上へとび出すのを見て、
「兄さん、止しなされ。対手がいけないよ」
と、一応は、とどめました。
「なに云ってやがんでえ。代官が怕くて、渡世人になれるけえ！」

そう云いかえしつつ、丹田(たんでん)に力を入れるべく、黒三の帯を、ぐいと押し下げておいて、左手で長脇差(ながわきざし)の鯉口(こいぐち)を切りました。

「兄さん、たとえお代官の弟でなくても、渡世人は、さむらいと喧嘩(けんか)をしてはならぬ渡世の掟(おきて)があるのを忘れなさったか。……よしんば、対手を手負わせても、お前さんばかりか、継場(つぎば)の親分衆まで迷惑しますよ」

てまえの忠告がおわらぬうちに、騎馬は半町のむこうへ戻って来て居り、旅人は、長脇差を抜きはなちました。

「来やがれっ！」

全く逆上しきった様子でございました。

てまえは、ご浪人さんをかえり視ましたが、相変らずの無表情のまま、冷たい視線を旅人にあてておいででございました。

駆け戻って来た石和代官の弟御の方は、行手をふさいだばかりか長脇差を抜いて歯向って来ようとする博徒(ばくと)の姿をみとめるや、なにか呶号(どごう)して、これも、ぎらっと、宙に白刃を閃(ひらめ)かせたことでございます。

旅人と騎馬との距離は、あっという間に縮まりました。

しかし、さいわい、そこで斬(き)り合いは行われずにすんだのでございます。

高山秀之進の白刃が、三度笠めがけて振り下されようとした刹那(せつな)、茶店の中から、

――ご浪人さんの手から、甘酒茶碗が、投げられたのでございます。つぶてとなった茶碗は、秀之進の額にあたり、その上半身をのけぞらし、そのまま、逆落しに、五体を地面へたたきつけました。

　主人を落した馬の方は、旅人がめくら滅法にふりまわした長脇差の切先で、どこかに薄傷を負ったらしく、いったん棹立ってから、狂ったように、駆け去ってしまいました。

高山秀之進は、昏倒したとみえて、それきりビクとも動きませんでした。

どうやら旅人は、ご浪人さんの助勢があったとは気づかぬていで、息をはずませ乍ら、

「ざまアみやがれ！　この糞ったれ野郎め！」

と、秀之進の顔へ、べっと唾を吐きかけました。

その時、ご浪人さんは、もう茶代を置いて、往還へ出ると、歩き出しておいででした。

てまえが、そのあとにしたがい乍ら、

「あれは勝気というのじゃなくて、乱気の血すじでもひいて居るのでございましょうね」

　と云いますと、ご浪人さんは、

「娘だてらに、博徒の身装をして、あのような無謀な行為に及ぶには、なにか仔細があるのだろう」

　と、仰言ったのでございます。

――ああ、やっぱり！

てまえも、実は、――この渡世人は、もしかすると、女子ではあるまいか、となかば疑っていたのでございました。

三

てまえが、その娘渡世人に再び逢ったのは、石和から一里ばかり東に入った古寺の庫裡でひらかれている賭場でございました。

薬売りが、その土地土地の貸元と知りあいになっておくのも、あきない上欠かせないつとめのひとつでございます。なにせ、喧嘩のあとは、怪我人が多勢出るので、薬を必要といたしますからね。

その南田中の貸元・勝沼の茂兵衛という親分とは、むかしから知りあいでございましたが、色も欲も旺盛で、それだけにずいぶん悪いこともやって、渡世仲間にもかたぎの衆にも評判のよくない男でございました。

しかし、なにぶんにも乾分の頭数をそろえて居り、その縄張りをあらす貸元が近くにいないので、薬売りとしては、挨拶をせずに通り過ぎるわけには参りません。

栗原の旅籠で、夕餉をすませて、小半刻ほどして、てまえは、ご浪人さんに、おこと

わりしておいて、その賭場へ出向きました。
てまえが入った時、裸蠟燭の焔に照らし出された盆胡座を二十人あまりかこんで居りましたが、恰度この時刻は、勝負が絶頂に達し、大層な熱気をみなぎらせて居るはずなのに、妙に陽気な空気をはらんで居りました。
そのわけは、すぐに判りました。
中盆のすぐとなりに坐っている渡世人のせいでございました。
それが、あの娘渡世人だったのでございます。
胸まで白い晒を巻いた半裸で、胡座をかいている姿が、男どもの色情をそそっていたのでございます。
緋縮緬の蔭から内股をちらちらのぞかせる莫蓮の姿は、しばしば、賭場で見受けますが、まだ二十歳前の娘が、股引をはいてい、肩も太股も、惜しげもなく柔肌をさらし乍ら、無職の恰好を気負ってみせているのは、たしかに、めったにおがめない光景でございました。絖のように、白くなめらかな、まだよごれを知らぬ肌だったのでございます。
負けがこんで、とうとう、長脇差も着物も抵当にしてしまい、好奇で淫靡な視線をあつめ乍らも、必死に羞恥心を押し伏せて、身がまえているのが、かえって、男どもの色情をそそっている模様でございました。
「勝負っ！」

中盆の声がかけられ、壺振りがさっと壺皿をあげました。
「三五の丁！」
娘渡世人は、この最後の勝負に、半と賭けて居りました。
「ちぇっ！　とうとう、目が出ねえままにオケラだあ――」
立ち上ろうとする娘渡世人に、貸元の勝沼の茂兵衛が、にやにや笑い乍ら、
「兄哥、つづけたけりゃ、駒をまわすぜ」
と、申しました。
「親分、おらアまだ無垢だぜ。からだなんぞ賭けられるけえ」
「なアに、その股引で十両貸そうじゃねえか」
茂兵衛が云うと、男どもは、わっとはやしたてて、
「やんねえ！　男なら勝負しねえ」
「負けて、拝ませてくれるのなら、お賽銭をあげて、柏手を打つぜ」
「おれは、十七年前に、嬶のを見たきりだあ。その嬶だって、未通女だったかどうかわからねえや。ひとつ、生れてはじめて、未通女の赤貝を覗きてえや。賭けてくれろや」
と、そそのかしたものでございます。
「ええい、こうなりゃイチかバチかだ。十両借りた！」
娘渡世人が、肚をきめると、賭場は沸きたちました。

――あきれたものだ！
胸で呟きつつも、てまえも、思わず、固唾をのみました。
娘渡世人は、こんどは、丁と賭けました。
「勝負っ！」
中盆が叫んだ瞬間、
「待て！」
ひくいが鋭い、てまえがこれまでいくたびも、じいんと五体にしみ込ませた声音が、いつの間にか、この賭場に、ご浪人さんが現れておいでだったのでございます。
壺振りの手を抑えました。
「なんでえ！　どうしようといいなさるんだ？」
中盆が気色ばんで、ご浪人さんを睨みあげました。
ご浪人さんは、冷やかに、
「その壺の中は、半であろう」
と、仰言いました。
「丁か半か、壺をあげなけりゃ判るけえ！」
「それが、お前にも、壺振りにも、貸元にも、判って居る」
「てめえ、場荒しだな、素浪人め！」

中盆が、匕首を抜くよりはやく突きかかるのを、躱しもせずに、利腕をつかんでねじあげ、無言の気合で、大きくそのからだを宙がえりさせて、土間へ抛りつけておき、ご浪人さんは、抜く手も見せず、壺へ、一閃なさいました。

盆の上の壺が真二つに割れると、中の二個の賽も四つに両断されて居りました。

それは、鉛を仕込んだまぎれもないイカサマ賽でございました。

四

おかしなものでございました。

旅籠へ戻って来た時、連れて来た娘渡世人を、ご浪人さんは、てまえに都合をつけさせて、洗い髪の、娘姿に還させましたが、そうなると、しぜんに、物腰もしおらしくなり、言葉遣いもあらためて居りました。

旅人姿の時は、銀次と名のっていたが、本名はぎん、川中嶋の水呑み百姓の娘でございました。

旅籠の部屋で、ぎんがあらためて礼をのべると、ご浪人さんは、

「お前は、よほど、石和代官に恨みを抱いて居るようだな？」

と、お訊きになりました。

「石和代官は、百姓の敵でございます」

ぎんは、こたえました。

「そんなに、しぼりあげるのかね？」

てまえが、訊きますと、ぎんは、

「しぼるだけじゃありませんや。助郷のために、うちらの村は、爺婆は、首をくったり、山へすてられたり、娘という娘は売られて居ります」

と、こたえて、唇を噛みしめ、俯向いてしまいました。

このような京都のまん中で、裕福なくらしをなさっている貴方様などには、助郷のおそろしさなど、とても想像がおつきになりますまい。

お大名衆の参覲交替には、むかしは、宿駅の問屋場の人夫と馬だけで、足りたようでございますが、元禄頃からは、足りなくなって、助郷がきめられ、宿駅の近く一里か二里の村々から、人馬を徴発した由でございますが、近年は、それでもなお不足で、五里以上十里も遠くにある村々から人馬を狩り出して居るのでございます。

東海道や山陽道なら、百姓もまだどうにか、助郷の余裕がございますが、中仙道とか甲州街道の、山の中の村とも相成りますと、もうすでに、菜種をしぼるように年貢を取りたてられて、死なさず生かさずに、喘がせられて居りますゆえ、とうてい、助郷などという課役をはたせるものではございません。

街道から十里も奥の村ともなりますと、一日の課役に就くために、往復に四日五日もかかります。農繁期などは、たった一日でも惜しいのは、申し上げるまでもございません。

助郷に出なければ、人一人につき七百文、馬一匹につき一貫文という法外な金を、問屋場へ支払わねばなりません。問屋場は、その金で、雲助を安く雇います。かりに、請負(うけおい)の金が千両であれば、そのうちから三百両以上をさし引いて、問屋場は雲助を雇い、ピンはねの三百両を、宿役人の得分として居ります。

助郷の悲惨な哀話は、二十年も旅をしているてまえ自身が、かぞえきれぬほど、この目で見、耳で聞いて居ります。

助郷のために、破滅してしまった村がある、と申し上げても、お信じになれましょうか。本当に、破滅した村があるのでございます。

ぎんの村も、そうでございました。

ぎんの村は、本高(ほんだか)八百石、新高二百石——千石のあがりときめられて居りましたが、それは、戸数が百数十軒もあったむかしのことでございました。

千石を収穫するには、人口は八百五十人から九百人がいなければなりません。ところが、ぎんの村は、助郷のために、家数がしだいに減って、いまは、わずか七十軒——三百人そこそこになり、したがって、たがやす田もわずか二十数町歩しかなくなり、あと

は荒地となって居りました。
これでは、年貢さえも、なかなか納められません。
まして、助郷など及びもつかぬ仕儀でございました。
千石の村からは、五十人を助郷にしたがわせる定めでありますゆえ、七十戸の家数では、不可能であることは、容易にお判りでございましょう。
一軒に平均二人の壮丁がいることは、めったにございません。七十戸から五十人の働き盛りの男を、助郷課役に取られては、五百石はおろか三百石の収穫もできません。
一年に延べれば、一万四千人となり、馬は四百匹と相成ります。人馬を出す代りに金を出すとなれば、その金高は千両に及びます。それが平年のことで、大名行列の往来のはげしい年には、千五百両、二千両にも相成ります。
ぎんの村から、どうして、そんな大金が出せましょう。
十五歳以上、五十歳以下の男たちが、五十人、毎日、宿場人足として勤めさせられ、川中嶋百八十間の街道の掃除をはじめ、丁場や路普請(みちぶしん)に使役させられて居るわけでございますから、しぜん、田畑をたがやすのは、老幼、女子の手にゆだねられます。作物の豊作など、のぞむべくもございません。
一方――。
このあたりは天領（幕府直轄地(ちょっかつち)）でございますから、宿駅では、人夫二十五人と馬二

十五匹だけ出し、その他一切は助郷に課してよい、という定めでございました（東海道などの大名領地は、人夫五十人、馬五十匹の定めでございました）。

で——ついに。

ぎんの村では、半月前に、むしろ旗を押し立てて、川中嶋の問屋場を襲ったのでございました。

その結果は、一揆(いっき)に加わった百姓の大半は、石和代官の指揮による役人隊に、斬り殺され、ぎんの兄栄吉は、捕えられて、目下代官所の牢(ろう)に入れられている、ということでございました。

五

ぎんが、宿場女郎に売られるよりは、いっそ、男に化けて渡世人になってやれと、自棄(やけ)の振舞いに出たのも、充分に同情できることでございました。

「それで、お前さんは、代官の弟ときいて、かっとなって、あんなまねをしたのだな？」

てまえが、申しますと、ぎんは、きっと宙を睨(にら)んで、

「兄(あん)ちゃんは、明日、江戸送りにされるんです。江戸で、磔(はりつけ)にされるんだ！」

「………」

「兄ちゃんは山梨郡十四箇村の百姓の柱なんです。一揆を起したのも、兄ちゃんなんだ!」

「………」

「ご浪人さん、あっしら兄妹(きょうだい)は、両親もねえ二人です。……だから、あっしは、明日は、渡世人の姿になって、笹子峠で、唐丸籠(とうまるかご)の行列に斬り込みます」

「………」

ご浪人さんは、ぎんの語るあいだ、終始無表情でございましたが、斬り込む、ときかされても、止めようとはなさいませんでした。てまえがたまりかねて、「若い綺麗ないのちを散らすことはあるまいに——」と申しますと、ぎんは、つよくかぶりを振り、「十八の小娘でも、いざとなると、阿修羅(あしゅら)になるのを、木っぱ役人どもに見せてくれるんだ!」

と、云いはなったのでございました。

その時、はじめて、ご浪人さんが、口をひらいて、

「お前の兄をかしらとする一揆は、幾人だったのだ?」

と、お訊ねになりました。

「二十三人です」

「十四箇村の柱であるお前の兄がかしらとなって、わずか二十三人しか、一揆に加わらなかったのか？」
「一揆のことは、あっしは、すこしも知らされなかったんです」
「十四箇村なら、すくなくとも二百人は集められたはずだ」
「すぎてしまったこった。どうでもいいや！」
ぎんは、ご浪人さんがはじめて示された不審な表情に、投げ出すようにこたえて居りました。
ぎんには、隣りの部屋をとってやり、こちらは、二人になりました時、てまえが、
「どうなさいます？」
と、うかがいましたが、ご浪人さんは、
「すてておくことだ」
冷たいご返辞をなさいました。
てまえが、夜が明けてすぐ、唐紙越しに声をかけた時には、もう、ぎんの姿は、隣りの部屋から消えて居りました。夜明け前に、そっと、抜け出て行ったのでございました。
流石のてまえも、十八の娘がたった一人で、唐丸籠を襲うのを、知らぬふりをしていなさるご浪人さんを、いささか、うらめしく思ったことでございます。

思いがけなくも、唐丸籠破りは、成功したのでございました。
ご浪人さんとてまえが、栗原宿を発って、山梨郡と八代郡の境の鶴瀬の関所へさしかかりますと、関所の門が閉じられて、道中をさしとめられた旅人たちが、その噂でもちきっていたのでございます。
襲ったのは、渡世人たった一人ではなく、百姓の一団であった、ときいて、てまえは、ほっといたしました。
「ぎんが指揮をとって、襲ったのでございましょうかね？」
てまえが、申しますと、ご浪人さんは、
「襲ったのは、百姓ではあるまい」
と、意外な言葉を、口になさいました。
「どうしてでございます？　なぜ、百姓ではないことが、おわかりなので──？」
「わたしたちが、栗原の旅籠を出ようとした時、百姓が数十人、おもてを、足早やに過ぎて行った」
「じゃ、やっぱり、百姓衆じゃございませんか」
「百姓の身装はしていたが、頰かむりした顔の中に、昨夜の賭場の中盆の顔があった」
「へえ……？」
「百姓に化けたやくざどもが、唐丸籠を襲ったことになるようだ」

「勝沼の茂兵衛という、あの貸元に、そんな義俠心があろうとは、思えませんが……」
「猿芝居らしい」
ご浪人さんは、ぽつりと仰言いました。
そう仰言られても、てまえは、なんとも見当さえもつかず、首をかしげるばかりでございました。
「松次郎」
「はい」
「この近くに、しばらくのんびりとできる湯治場はないか？」
「それは、いくらもございますが……」
「案内してくれ」
「怪我をしたり、中風などをわずらった百姓衆が、湯治する、ごく粗末な小屋ばかりでございますよ」
「そんなところでよいのだ。猿芝居の終幕を待つには、ぜいたくな温泉宿など、ふさわしくない」
薄ら笑って、そう云いすてておいでございました。

六

それは、まさしく、我欲のからんだあさましい猿芝居でございました。ご浪人さんの推測は、見事というほかはなかったのでございます。

と申しても、その終幕までの十日間、てまえは、うすぎたない塩山の湯治場で、何ひとつ話して下さろうとせぬ御仁と、苛々し乍ら待つのは、やりきれたものではございませんでした。

恰度十日目の宵でございました。

「松次郎、明朝、街道へ出て行って、川中嶋あたりで騒動が起ったかどうか、きいて来てくれ」

ご浪人さんが、仰言いました。

「騒動——と申しますと？」

「甲府金山から採られた、荒金が江戸表へ送られる日は、定められて居る。それが明日だ。甲府城を夜明け前に発つゆえ、石和を過ぎた頃は、朝霧の中だろう。襲うには、恰度いい時刻だ」

まるで、その襲撃をあらかじめ、下手人の口からきいてでもいなさるお口ぶりでござ

いました。

「何者が、そんな大それたまねをしようというのでございます？」

「たぶん……、ぎんの兄の栄吉を首領とする一揆の百姓団であろう」

「へえ？　ぎんの兄の栄吉が、どこかにかくれていて、そんな騒動を起すと、どうして推測できますので？」

「どんな猿芝居にも、筋書きがあり、終幕がある」

それが、冷たい語気のご返辞でございました。

永年のおつきあいで、これ以上、しつっこくお訊きしても、何も教えて下さらぬことは、てまえは充分承知して居りました。

ご浪人さんの推測は、ぴたりと的中したのでございました。

次の朝――。

てまえが、栗原へ出て行きますと、はたして、甲府御用金を百姓一揆八九十人が、川中嶋で襲って、役人衆をみな殺しにして、掠奪(りゃくだつ)するという途方もない一大事が、半刻前に起って、大騒動になって居りました。

てまえが、ご浪人さんのお待ちになっている場所へ、すっとんで行き、お報せいたしたことは、申し上げるまでもございますまい。

意外だったのは、そこに、娘姿のぎんがいたことでございます。

「どうして、ここに？」

てまえが、いぶかりますと、ご浪人さんは、

「唐丸籠破りに行こうと、栗原の旅籠を、夜明け前に忍び出ようとするのを、呼びとめて、わたしの推測を告げて、今日、この場所で落ち合う約束をさせたのだ」

と、申されたのです。

つまり、てまえが、睡りこけているあいだに、ご浪人さんは、ちゃんと、手を打っておいでだったのでございます。

ご浪人さんが、ぎんとてまえを連れて、おもむかれたのは、石和代官所でございました。

胡乱な者は入れぬ、と立ちはだかる門の番士二人を、ご浪人さんが当て落された迅さは、目にもとまらぬものでございました。

左様でございます。

ご浪人さんのお強さは、すでにもう、前に幾度かお話申し上げて居ります。

代官所内でも、人間ばなれしたそのお腕前は、存分に発揮されました。

すべて、峰撃ちでございましたが、代官の弟高山秀之進だけは、一閃裡に斬り仆しておしまいになりました。

そして――。

代官高山主水正に対して、その頸根に白刃をあてて、
「お主が指嗾した栄吉を、ここへ、連れて来てもらおうか」
と、命じられたのでございます。
栄吉は、しかし、すでに、高山秀之進によって、新刀試し斬りにされて居りました。
栄吉が、二十三人の一揆を起したのは、実は、石和代官高山主水正の奸計に踊らされた猿芝居だったわけでございます。
「一揆を起した、とみせかければ、その方は、江戸へ送って、士分にとりたててやる」
石和代官の言葉を、栄吉は、あさはかにも信じたのでございました。
栄吉を、唐丸籠に乗せて、江戸送りをするようにみせかけ、これを百姓に化けた勝沼の茂兵衛の乾分どもに襲わせて、破り、一時、栄吉に身をかくさせる。それから、栄吉を先頭にたてて、茂兵衛の乾分全員に、甲府金山の御用金を掠奪させ、これを一揆の百姓どものしわざだと、ご公儀にも世間にも信じ込ませる。まことに、手の込んだ石和代官の猿芝居だったのでございます。
ご浪人さんのつきつけた白刃が、高山主水正に、栄吉の屍骸を、ぎんの前に、はこばせました。
兄が、実は、山梨郡各村の百姓たちの裏切り者であった、と知らされて、痴呆のように、泪もなく、立ちつくしたぎんの姿が、いまも、てまえには、ありありと思い泛ぶの

でございます。

ぎんの身の上が、その後、どうなったか、てまえは、耳にいたしては居りませぬ。

はっきりと申し上げられるのは、苛酷な助郷の課役が、いまもなお、つづいていることとだけでございます。

贋者助太刀（にせものすけだち）

眠狂四郎市井譚（しせいたん）の内

一

——くだらぬ！
真崎兵吾は、猪口を口にはこび乍ら、胸のうちで、呟いた。
自分に対しても、世間に対しても、嫌悪をおぼえていた。生きているのがいやになる、といったほどの、大袈裟な嫌悪感ではなかった。
理由があった。五年もつづけた内職が、今日、だめになったのである。
真崎兵吾は、祖父の代からの浪人であった。父の兵十郎が、手さきの器用な、思いつきの名人で、七福神の絵を描いて、ある問屋を説き、十月二十日の夷講の前夜、大伝馬町に立つ市に、売り出し、それが、あとの一年は寝て暮せるほどのかせぎになった。
夷講の市では、それまで、道具類、沢庵漬などをあきなっていたが、七福神の絵など売ってはいなかった。
夷講の当日は、商家では、床の間に、蛭子の像の懸軸をかけたが、七福神の絵など、かざらなかった。蛭子というのは、伊弉諾・伊弉冉二神の子で、七福神の一の恵比須が、

この神だといわれている。

江戸の商家では、いつの間か、この蛭子を、商売繁昌の神にしていたのである。

もちろん――。

七福神の絵は、存在していた。天正のおわり頃(ころ)、狩野松栄が、はじめて、七福神を描いたといわれている。尤(もっと)も、七福神に、福禄寿の代りに吉祥天が入ったのは、元禄頃であった。寿老人も、まだ入っていなかった。

真崎兵十郎が、はじめて、大黒天・恵比寿・弁財天・毘沙門天(びしゃもんてん)・寿老人・布袋和尚(ほていおしょう)・福禄寿を、七福神に定(き)めたのである。

この絵は、飛ぶように売れた。

しかし、本当に大もうけしたのは、問屋であった。兵十郎は、裏店(うらだな)をひきはらって、屋敷を構えるところまではいかなかった。

専売特許(パテント)のある時代ではなかった。

五年前、兵十郎が逝(い)き、兵吾が父のあとを継いで、七福神を描く頃には、本職の絵師たちがあらそって描いていて、夷講の市には、その絵が氾濫(はんらん)していた。

そしてまた、ある頭のいい絵師が、七福神を舟に乗せ、問屋が、この宝舟を、大みそかに、枕の下に入れると縁起がいい、という慣習をつくって、大もうけをしていた。

真崎兵吾は、父親ほど器用ではなかったし、食わねばならぬために、しかたなく、七

福神を描いていたが、所詮（しょせん）、本職の絵師に及ばなかった。
問屋では、兵十郎に対する義理から、兵吾の絵を、買ってくれていたが、今日描きためたのを持参した兵吾に、
「もうすこし工夫はありませんかねえ」
と、云った。
兵吾は、自分ではすこしはうまくなったつもりでいたところであった。
むっとなって、
「おれは、素人だ。これ以上、上手には描けぬ」
と、居直ったのが、いけなかった。
売り言葉に買い言葉で、
「来年は、もう描かぬ！」
「どうぞ、ご勝手に――」
という次第になったのである。
――くだらぬ！
内職というよりも、父が残してくれた本業を失って、兵吾は、なかば絶望の気分になっていた。
――なにが、工夫だ！　布袋の腹をもっとふくらませろ、というのか。福禄寿の頭を

倍にも長くしろ、というのか。ばかばかしい。
兵吾は、問屋に腹を立てるよりも、迷信に乗っかってくらしをたてていた自分とそんな絵を有難がる世間に対して、嫌悪をおぼえていた。
銚子はもう三本も、台にならんでいた。
ここは、馬喰町の旅籠の竝ぶ通りの横丁にある居酒屋であった。

二

陽が傾いて、急におもてが閙がしくなり、この居酒屋にも、荷をかついだ薬売りや、女衒らしい男や、職人や人足などが、どやどやと入って来た。
「おう、おっ！　はき溜に鶴のご入来だぜ」
職人の一人が、大声で云ったので、兵吾も、頭をまわしてみた。
旅装の武家娘が、一人で入って来て、べつにとまどう気色もなく、腰を下ろすのへ、客たちの視線が集中したのである。
美しかった。かなりの厚化粧でもあったが、造作が大きく、目立った。
「どういうんでえ、あれァ？」
「おれにきくより、お嬢様に、じかにたずねてみろい」

「おれは、嬶と女郎の夜鷹のほかは、親しく口をきいたことがねえんでね」
「おうおう、八岐大蛇が入って来たんじゃねえや。目ン玉を白黒させやがって、みっともねえ。お武家の娘御が、一杯ひっかけたくなったところで、なんのふしぎもあるめえ。神様だって、お神酒をあがらあ」
「そうだ、おめえの山の神は、一升酒をくらわあ」
「うるせえや。……せっかく、入って来なすったんだ。ゆっくり、腰を据えて、飲んで頂こうじゃねえか。ねえ、お嬢様、そうでがしょう」
「はい」
武家娘は、にっこりして、うなずいた。
「ういういしいや。……お嬢様、ごらんの通り、うすぎたねえがん首がならんで居りますが、貴女様のお愉しみを邪魔するような不人情な唐変木は、一人もいませんから、ご安心なすって、飲んで下さいまし。……なあ、おい、おれたちゃ、みんな、人情の厚い江戸っ子だろう、え、そうだろう？」
「そうとも。ただ、助平が玉に疵だ。こう、じろじろ、見られていたんじゃ、お嬢様も、しりがおちつかねえやな」
「へへ、お嬢様、かんべんしておくんなさい。貴女様が、あんまり別品すぎるんで、どいつもこいつも、そわそわしてやがるんでさ」

「べらぼうめ！　お武家の娘御だろうと、お公卿の姫様だろうと、おれは、おぼこになんざ、目もくれねえぞ」

片隅から、もうかなり昼酒のきいているらしい職人が、酔眼を据えて、呶鳴った。

「おぼこなんざ、へっ、面だけだあ。

　おぼこのうちなら

　面見て、惚れよが

　二十過ぎれば、心意気

　三十年増は、

　閨の良し、悪し

　どうだ、野郎、女の味は、三十過ぎが食べ頃だぞ！」

「なにをこきやがる！　てめえの胴間声で、お嬢様の酒が、まずくなったぞ、あやまれ」

「あやまれ、だと——とんちきめ！　人には分限というものがあらあ。公方様が吉原へ女郎買いに行けるけえ。婚礼に、坊主が乗り込んで、経をよんでみろ、ってんだ。……武家娘が、白馬に入り込んで酒をくらうなんざ、酔興にもほどがあらあ」

「うるせえ。つべこべほざかずに、出て行きやがれ！」

「テコでも、ここを動くもんけえ。おれァ、日当二十文の叩き大工だぞ。ここよりほか

に、飲むところがあるか。てめえだってそうだぞ。てめえのような半端職人が、八百善へ上って、一杯三両の茶漬けが食えるか。食えたら、おれは、観世縒で、首をくってやらあ」
「こん畜生！」
胸ぐらつかんで、ひき立てようとした。一方は、猛然と反抗した。
見かねて、兵吾が、
「止さぬか！」
と、叱咤した。
職人たちは、殺気立っていて、兵吾の仲裁など耳に入れようともしなかった。
兵吾は、鬱憤のはけ口をみつけたあんばいで、
「止せといったら、止さぬか！」
吸号しざま、もみ争う二人を突きとばした。
「やりやがったな、痩浪人め！」
「おめえさんなんぞの出る幕じゃねえぞ！」
こんどは、仲よく、兵吾へ向って来た。
「たわけ！」
兵吾は、一喝した。

「おれを、誰だと思う！」
「誰だとは、誰でえ？」
「おれは、眠狂四郎だ！」
兵吾は、思わず、そう名のった。
「へえ?!」
一人が、目をみはり、もう一人が、
「ほ、ほんとですかい」
と、首をすくめた。
奇妙な仮名を名のるその浪人者の強さは、府内外に、知れわたっていた。
居酒屋の客たちは、しかし、誰も、眠狂四郎の顔を見知っている者はいなかった。
鼻梁(びりょう)高く、頬の殺(そ)げた、長身の兵吾は、その仮名を名のっても、べつにおかしくはない、一種の凄味(すごみ)らしいものをおびていた。目もとや口もとに甘さがあったが、それをおぎなう皮膚の蒼白(あおじろ)さがあった。家の中にひきこもって、絵筆ばかり把(と)っているせいであった。
「そうだ。おれは、眠狂四郎だぞ」

三

――くだらぬ！
居酒屋を出て歩き出すと、兵吾は、こんどこそ、本当に、自分をくだらぬ奴だと思った。
――眠狂四郎の名をかたるとは、なんという見下げはてた奴だ、貴様は……。あの武家娘に、いい恰好をしてみせようとした性根は、腐りはてて居るぞ、真崎兵吾！
「あ――もし」
後ろから、呼びかけられて、兵吾は、振りかえった。
居酒屋にいた武家娘が、追って来ていた。
「すまぬ」
兵吾は、頭を下げた。
「おわびをするのは、わたくしの方でございます。わたくしが、はしたない振舞いをいたしましたばかりに、町内の衆をおさわがせいたしました。貴方様にも、ご迷惑をおかけいたしました。おゆるし下さいませ」
「そう申されては、恐縮する」

兵吾は、昏れなずむ街なかに、娘の顔が、白く浮き立っているのを、あらためて、美しいものに眺めた。

「眠狂四郎様、おねがいがございます！」

娘は、急に、上ずった声音で、一歩寄って来た。

「い、いや、わたしは……」

眠狂四郎ではない、と云いかける兵吾に、

「おやすくねえや、旦那」

顔見知りの職人が、ぽんと肩をたたいておいて、脇をすり抜けて行った。

「どこか、しずかな場所に、ご案内下さいませ。お供いたします」

娘は、ねがった。

やがて、兵吾が、武家娘をつれて行ったのは、柳橋の舟宿であった。

陽が落ちると、もう川風は、肌にしみ通るほど寒かった。

兵吾は、舟宿になどあがったのは、はじめてであったので、障子を開けて、夜の光をうつした川面を眺めたりして、自分をおちつかせようとしたが、川風の寒さに、あわてて、閉めると、わざとそっけない語気で、

「用向きを、うかがおう」

と、云った。

武家娘は、端近にひかえて俯向(うつむ)いていたが、

「わたくしは、父の敵(かたき)を討ちに、この江戸表へ出て参った者でございます」

と、打ち明けた。

「仇討(あだう)ちに――？　そなた一人でか？」

「兄が居(お)りましたが、返り討ちに遭って居ります」

「返り討ちに！　それは、気の毒な……。親戚(しんせき)縁者で、そなたに助太刀(すけだち)をする者は、居られぬのか？」

「敵の小藤田弥九郎が、道場をひらいていたほどの腕前なので、家中では、みな、おそろしがって、助太刀はしてくれませぬ」

進藤さえと名のったその娘は、越前ノ国の二万石ばかりの小大名の家中であった。その父は、酒癖がわるく、酔うと見さかいなく、人にからんだ。そのために、斬られた。

争いの利は、敵の小藤田弥九郎の方にあった。

さえの兄源太郎は、父に非があったとみとめつつも、子として、敵討ちをせざるを得なかった。国許(くにもと)を出たのは、四年前であった。

敵の小藤田弥九郎は、江戸に住んでいた。

源太郎は、江戸屋敷から一人も助太刀をしてもらわず、単身で、仇敵(きゅうてき)に挑み、腕前の差は如何(いかん)ともし難く、深傷(ふかで)を負って、三月後に逝ってしまった、という。

「眠狂四郎様、おねがいでございます。わたくしに、助太刀して下さいませ。……何卒、助太刀を──」

さえは、両手を合わせた。

「…………」

兵吾は、内心あわてた。

──眠狂四郎の名をかたった罰だ。

そう思った。

「眠様！　その代り、お礼は、今宵うちに、させて頂きます」

「いや、礼など……」

「いいえ、貴方様ほどの使い手に、助太刀をおねがいするからには、お礼をしなければなりませぬ」

「わたしは、金など……」

「存じて居ります。貴方様は、このような場合、決して、金子など所望なさらず……、ただ、一命を賭けるからには、たのむ側にも、いちばん大切なものを出せ、とおもとめになるとか……」

「…………」

「わたくし、さしあげまする。……この操を、貴方様に、さしあげまする」

「そんな……、わたしは、女子（おなご）の操を、欲しがりなど……」

「おもとめになったのではありませぬ。わたくしの方より、すすんで、さしあげるのでございます。……わたくしは、まだ、男子に、手もにぎられては居りませぬ。……敵に肌身を許して、仇を討った例もございます。それを思えば、貴方様にさしあげることなど、助太刀をして頂いて、首尾よく敵が討てるのであれば、わたくしは、よろこんで……」

さえは、平伏すると、おねがいでございます、と嘆願をくりかえした。

いくばくかの後――。

舟宿の二階には、牀（とこ）がのべられ、行燈（あんどん）のあかりを消し、窓からさし込む月の光の中で、兵吾は、さえを抱いていた。

兵吾は、まだ独身者で、二度ばかり吉原の小格子女郎を買っただけの、きわめて乏しい経験しか持っていなかった。

長襦袢（ながじゅばん）一枚になって、傍に入って来たさえを、すぐに抱き寄せることさえ、ためらった。

さえの方が、大胆に身を寄せて来たので、兵吾は、あわてて、そのからだを抱いたが、胸の隆起をさぐったり、前をめくって、猿臂（えんぴ）をのばすようなまねを、しかねた。また、

さえのからだは、処女らしく、本能的に、ひらくのを拒否しているようにかたさがあった。

兵吾が、ついに、勇気を出して、片手をそろそろと、下へさしのべたとたん、さえは、急に、さらに一層からだをかたくした。

「いやなのか？」

兵吾は、訊ねた。

「い、いいえ――」

さえは、不意に、兵吾に、しがみついた。

兵吾は、やむなく、前を捲ろうとした片手を、臀部にまわすと、力をこめて、抱き締めた。

興奮の極限状態が来て、兵吾は、さえの上へかぶさったが、もうその時は、さえはさからわず、下肢をひらかれるにまかせた。

営みは、あっけなく終った。

ふうっ、と深く吐息して、さえの上から降りた兵吾は、おのれを押し入らせた瞬間にもらした苦痛に堪える処女の悲鳴が、まだ耳にのこっていて、満足感に、かるい悔いがともなっていた。

四

進藤さえの敵討ちは、それから三日後に、行われた。
場所は、馬喰町馬場、時刻は明け六つであった。
奉行所に届け出て、正式な敵討ちになったためもあり、かくすより、ひろまる方がはやく、夜明け前から、見物人が、馬場へつめかけて来た。馬場端の火見櫓(やぐら)の上も、たちまち満員になった。
「眠狂四郎が、仇討ちの助太刀をするそうな」
その噂(うわさ)が、見物人を蝟集(いしゅう)させたのである。
真崎兵吾は、眠狂四郎になりすまさなければならなかった。
――噂をきさつけて、本物が現われて、代ってくれればよいのだが……。
そんな願いも、胸の片隅には、わいていた。十四五歳の頃に、町道場にかよっただけの、きわめて心細い腕前なのであった。
文字通り、決死の覚悟をきめた兵吾は、宗十郎頭巾(ずきん)におもてをかくして、馬場へおもむいた。
敵の小藤田弥九郎の方に、助勢者はなかった。

奉行所から出張して来た与力立合いの中で、双方ゆっくりと歩み寄った。

「小藤田弥九郎、父と兄の敵――いかに！」

さえが、高く鋭く叫んだ時、小藤田弥九郎は、ちょっと怪訝（けげん）そうに、ひとつの疑問を、口にした。

「進藤久左衛門殿に、そなたのような娘御が、いたか？」

「だまれ！　進藤久左衛門はわが実父、同じく源太郎はわが兄にまぎれもない。……覚悟っ！」

小藤田弥九郎は、その叫びにうなずいてから、兵吾に向い、

「貴殿が、眠狂四郎殿でござるか。助太刀ご苦労に存ずる」

と、かるく会釈した。

――おれは、斬られるかも知れぬ！

兵吾は、足もとから、戦慄（せんりつ）が匍（は）いあがって来るのをおぼえた。

白刃を抜き合せてから、兵吾は、たちまち、対手（あいて）の鋭気に、威圧された。

小藤田弥九郎が進むにつれて、兵吾とさえは、後退した。

群衆が、なにやら喚（わめ）きたてている模様であったが、兵吾には、自分をあざけりののしっているように思われた。

「おれは、贋者（にせもの）だ。助太刀は、止（や）めだ！」

そう絶叫して、刀を抛り出したい衝動に、いくどかおそわれた。
ついに――。
後退しつづけて、兵吾とさえは、火見櫓下まで、追いつめられた。
小藤田弥九郎が、はじめて、足を停めた。
そして、徐々に、白刃を上段に移した。
――斬られる！
恐怖が、兵吾の全身をかけめぐった。
小藤田弥九郎は、まず、眠狂四郎と一騎討ちしようとしていた。さえを無視していた。
兵吾は、弥九郎の一撃を、かわすことの不可能を、本能で感じた。
弥九郎の剣が、完全に上段にふりかぶられた刹那、兵吾は、
「ちがうっ！」
と、叫んだ。
いや、叫んだつもりであったが、奇妙な悲鳴に似た声音を発しただけのようであった。
すると、弥九郎の五体が、なぜか、ぐらりとゆれた。その顔面が、苦痛で、歪んだ。
さえが、その隙をとらえて、まっしぐらに、小刀を突きかけた。
したたかに、脾腹を刺し貫かれて、弥九郎は、目蓋を閉じて、頤をあげた。
兵吾は、ただ茫然と、突っ立ったなりで、弥九郎が、のけぞるのを、眺めていた。

その足くびに、小柄が刺さっているのを、兵吾は、みとめたが、べつにおどろきも、合点もせず、さえが折り重なって地ひびきをたてるのを、眺めつづけていた。

兵吾をわれにかえらせたのは、群衆のどよめきであった。

兵吾は、あわてて、いそぎ足で、馬場を出た。

「ありがてえ、旦那！　別品の助太刀、ご苦労さんでした」

「一太刀もくらわせずに、気合で敵をふるえあがらせるたア、すげえや、旦那――」

意外な讃辞をあびせられて、兵吾は、瞬時もはやく、この場を遁れたかった。

木戸口を出て、ほっとした。

とたんに、横あいから、

「お主、助太刀した娘が、男であると気づいて、買って出たのか？」

その冷たい問いが、かけられて来た。

深編笠で顔をかくした、黒の着流し姿が、そこに佇んでいた。

「な、なに!?」

「どうやら、あれは、殿様の寵愛でも蒙っていた色小姓のようだな」

――この御仁が、小柄を投じて救ってくれたのだ！

兵吾は、背すじや脇の下に、冷汗が流れるのをおぼえつつ、

「お、お手前は――？」

と、訊ねた。

浪人者は、歩き出し乍ら、

「眠狂四郎とおぼえておいて頂こう」

その返辞を、のこした。

義理人情記

眠狂四郎市井譚の内

一

当時は、江戸と下総・上総・安房をつなぐ、ちゃんとした街道はなかった。
勝浦とか小湊とか館山などから、江戸に往来するのは、陸路を辿るより、海路の方が便利であった。
尤も、べつに、定期の乗合船があるわけではなく、旅客は、御用船に便乗した。
天領や旗本の知行地から、米や麦やその他の産物を江戸へ運ぶのを、御用船といった。
下総の突端である銚子から、昼すぎに出帆して、勝浦や洲崎や木更津に寄港し乍ら、翌朝、江戸へ着くのであった。
その日——。
御用船に便乗したのは、二十三四人であった。
五六十人を容れることのできる広い胴の間なので、それぞれ、くつろいで座を占めることができた。人種・職業さまざまの旅客たちであった。下級の武士もいたし、鹿島詣での隠居もいたし、旅商人もいたが、いずれも、もの静かに、連れと交わす会話も、ひ

そやかであった。
一人だけ、ひどくさわがしい男が、いた。
上総の勝浦から、乗り込んで来た若い渡世人であったが、もうその時は、したたかに、酔っていた。
朱の塗りの剝げかかった一升樽を、かかえて、ふらふらと胴の間に降りて来ると、胡坐をかいたとたんから、大声で喋りまくりはじめた。
「酒は、いいやな、酒は――。天の美禄っていわあ。浮世の憂いを掃う玉箒、ともいうんだぞ。なにもかも、忘れさせてくれらあ。……え、そうだろう。利息五割の金を借りても、朝酒を飲め、と誰だかが教えているんだぜ。……なんでえ、どうして、おめえさんがたは、飲まねえんだよ、百薬の長をよう」
血走った酔眼を、ぐるぐるまわして、誰か酒の対手をしてくれる者は、いないか、と物色していたが、片隅に、刀を抱いて、うっそりと板壁に凭りかかっている浪人者を、みとめた。
ただの面貌ではなかった。彫の深い、頰の殺げた、蒼白な――一瞥しただけで、背筋を寒くするような暗い翳を刷いた浪人者であった。
渡世人は、その浪人者の前へ、いざり寄った。
「旦那、ひとつ、どうですかい。酒は、やっぱり、対手がいなけりゃ、うまくねえや」

「わたしを、虫の好く対手と見たのか」
「へへ……判ってまさ。旦那は、潮来あたりの親分衆のところに、いなすった。へへ……、用心棒をしていなすった御仁とお見かけ申しやした。つまりは、あっしと同じ樹の下に宿って、同じ濁った流れを汲んだ——他生の縁もあさからぬ、失礼さんでござんすが、仲間うちと考えさせて頂きてえ」
さし出された茶碗を、眠狂四郎は、拒否はしなかった。
「ありがてえ。対手をして下さるんですかい。……あっしゃ養老政——養老川の奥で取れた政五郎というケチなやくざでござんす」
自分は名のったが、べつに、こちらの名前をきこうとはしなかった。
船が、安房の洲崎をまわろうとした頃合、養老政は、胡坐をかいていられないくらいの状態になった。
狂四郎は、注がれるままに、茶碗酒を重ね乍ら、平然としていた。
養老政は、首をぐらぐら振り乍らも、なお、しきりに喋りつづけていたが、そのうち、がくんと、前へのめり伏した。
狂四郎は、目蓋を閉じた。
——人を殺して来た自責の念を、酒でまぎらわそうとしている。そういったところか。
小半刻が、過ぎた。

音もなく、養老政へ、忍び寄った者があった。二十歳あまりの、商家の娘であった。面高の、色白な、美しい顔だちをしていたが、目もと口もとにあふらせたのは、文字通り必死の殺意であった。

すでに、乙夜（午後十時）をまわって居り、旅客たちのうち、目蓋をひらいている者は一人もいなかった。

娘は、白鞘の匕首を、抜きざま、養老政の背中へ――心の臓めがけて、突き刺そうとした。

刹那――。

匕首をつかんだ右手くびを、刀の鐺が、ぴたりと押えた。

「…………」

娘は、大きく双眸をみはって、浪人者を睨んだ。睡っているものとばかり思っていたのである。

「お前が女であっても、酔いつぶれた男を刺す卑怯なふるまいは、看のがせぬ」

二

朝――。

御用船は、ゆっくりと大川をのぼって、新大橋袂の船着場に、着いた。
狂四郎は、河岸道へあがると、ふところ手で、深川元町へ歩み入った。
それぞれ、目的の方角へ散って行く旅客の中に、養老政と、その生命を狙う娘がいたのだが、狂四郎は、目をくれようともしなかった。
「旦那——もし」
元町を通り抜けて、猿子橋を渡り、南六間堀へ入ろうとした時、背後から呼ばれた。
養老政が、追って来ていたのである。その顔は、血の気を失っていた。宿酔のせいばかりでない、なにやら思いつめた様子であった。
「旦那、昨夜はどうも、とんだご迷惑を、おかけして、ごかんべん下せえや——」
「…………」
狂四郎は、黙って、歩いて行く。
「実は、ご迷惑ついでに、おねげえが、ひとつ、ござんす。ききとどけちゃ下さいますめえか」
「…………」
「あっしは、これから、猿江の五郎次、という兄弟分に、斬られに行こうとして居りやす。……旦那に、おねげえしてえのは、あっしの屍を、本所の回向院へ、無縁仏として葬って頂きてえ——そのことなんで……。十両ふところにして居りやす。埋葬代と読経

料は一両もありゃ足りるでござんしょうから、あとはお礼にさしあげやす」

「…………」

「旦那、おねげえできやせんか？」

「斬られなければならぬ不義理を犯した、というのか？」

「へえ……いえ、あっし自身は、不義理を犯したわけじゃござんせんが、……五郎次の女房のお咲、というのは、あっしの幼な友達でして、そのお咲が、家出をして、あっしのところへ、やって来たのでござんす。べつに、あっしが、そそのかしたわけじゃござんせん。お咲とあっしの間には、何もありゃしなかったのでござんすが……、お咲は、亭主に残した置手紙に、政五郎に、惚れてしまって、どうしても一緒になりたいから、許して欲しい、と書いた由でござんす。当人が、そう申したのだから、まちがいねえと存じます」

「お前自身、不義を働いたのでなければ、べつに、五郎次にわざわざ殺されに行くまでもあるまい」

「そりゃ、その通りなんで……、お咲が生きていりゃ、ひっくくっても、猿江へ連れて行って、あっしは、自分の潔白をあきらかにしてみせやすが……、お咲は、自害しちまやがったんでござんす。あっしに、家出の理由を打明けもしねえで、姿を消した、と思ったら、次の朝——つまり、一昨日のことでござんすが——母親の墓の前で、死んで居

りやした。おかげで、周囲の者たちは、たよって来たお咲を、あっしが、すげなく追い出したものだから、自害しちまった、という目つきで、見て居りやした。死人に口なしで、あっしは、五郎次に、下手な弁解などせず、いさぎよく、斬られてくれよう、と覚悟をきめた次第でござんす」

「すると、お前は、密通したのをみとめた結果になるが――」

「いたしかたござんせん。渡世人のはしくれとして、未練たらしく、無実だと弁解してもはじまりやせん。養老政は、生命が惜しくて、五郎次に、土下座した、と世間にわらわれるよりは、いっそ、男らしゅう……」

「お前は、まことは、胸の奥底では、そのお咲という女を、想っていたのだろう」

その言葉は、図星だったようである。

狂四郎が、ちらりと視線をくれた養老政の顔の表情は、それを否定してはいなかった。

三

養老政の兄弟分五郎次の家は、小名木川沿いの猿江町五本松に、あった。かなりの構えであった。

ただの博徒ではなく、猿江土着の郷士の裔（すえ）とも受けとれる、古びてどっしりした門を

持ち、庭も広く取っていた。

門前に立って、狂四郎は、養老政に云(い)った。

「お前は、一人で、入るがいい。わたしは、頃合をみはからって、お前の死体をもらいに入ろう」

「へえ。おねげえしやす」

養老政は、十両の包みをさし出したが、狂四郎は、回向院へ運んでから、貰うことにしよう、と受けとらなかった。

養老政は、門をくぐって、一歩々々を踏みしめ乍ら、玄関に至った。

「ごめんなすって……、養老政がめえりやした」

屋内は、ひっそりとして居り、応答はなかった。乾分(こぶん)が、いつも、十数人ごろごろしているはずであったが、一人も姿を現わさなかった。

養老政が、三度、案内を乞うてから、ようやく、廊下を踏んで来る跫音(あしおと)が、きこえた。

玄関へ出て来たのは、五郎次自身であった。

五郎次は、養老政と同年の二十八歳であったが――人には、養老政より二つ三つ、若く見られる童顔であったが――、どうしたことか、げっそりと、やつれて、四十過ぎともみえる面相と化していた。無精髭(ぶしょうひげ)ものび放題で、着たきりのよれよれの浴衣一枚をまとっていた。

長脇差も、手にしてはいなかった。
「よう来てくれた」
五郎次は、さびしげな微笑をうかべると、云った。
――どうしたというのだ？
養老政は、茫然となった。お咲の自害のことは、早飛脚で、昨日、報せておいたのである。
「上ってくれ」
五郎次は、養老政が、なにか云おうとする前に、踵をまわしていた。
座敷に通された養老政は、この家に、五郎次一人しかのこっていないのを、知った。
「乾分の衆は、どうしたので――？」
「一人のこらず、盃を返させて、当座こまらねえだけの金をくれて、出て行かせた」
五郎次は、こたえた。
「どうして――？」
「渡世の足を洗っただけのことだ」
「…………？」
「あいにく、酒もきれたが……、水で、兄弟分の誓いを流させてもらうことにするぜ」
「…………？」

「ふふふ……、こうしてたった一人きりになってみると、気楽なものだぜ、養老の――」

「猿江の！　あっしは、おめえさんに、斬られに来たんだぜ」

「斬られに？」

五郎次は、いぶかしげに、眉宇をひそめた。

「そうだ！　お咲さんは、置手紙したろう。この政に、惚れて、一緒になる、と書いていたろう？」

「うむ。書いていたな」

「おめえさんは、あっしを憎んだろう？　女房を寝取った野郎を殺してやる、と憎んだのじゃねえのかい？」

「ああ、読んだ時には、かあっ、となった。しかし、すぐに、嘘だ、と思った」

「どうして、嘘だと思ったんだ？」

「…………」

「え、おい！　猿江の、どうして、お咲さんの書きのこしたことを、嘘だ、と思ったんだい？　きかせてもらおうじゃねえか！」

養老政は、烈しい語気で問い詰め乍ら、おのが予想と全くちがったいまの状況に、なかばとまどっていた。

いきり立たねばならぬのは、五郎次の方なのだ。それだのに、五郎次は、しょんぼりとしていて、斬られに来たはずの自分の方が、いきり立った態度になっている。

「猿江の、きかせてくんねえ！」

とまどいつつも、養老政は、迫った。

しばらく重い沈黙を置いてから、五郎次は、口をひらいた。

「お咲は、まだ、未通女のままだったのだ」

「なんだと!?」

「そうだったのだよ、養老の――」

「三年も、一緒に、くらし乍ら、夫婦にならなかった、というのか？　そんな、莫迦な！　……冗談もやすみやすみに、云っとくれ」

「亭主だったおれが、云うのだから、まちがいはねえ」

「一度もか？」

「そうだ、一度もだ」

「どうして、夫婦にならなかったんだ？　え、どうしてなんだ？　おめえさんは、お咲さんに、首ったけ、惚れていたじゃねえか」

「惚れていた、たしかに――」

「それなのに、どうして、一度も、抱いてやらなかったんだ？　え、おい、どうしてな

んだ？」

「………」

「黙っていちゃ、わからねえ！　教えてもらおうじゃねえか！」

養老政は、呶鳴るように、返辞をもとめた。

四

門外の往還上に、佇んでいた狂四郎は、自身の足をはこぶ代りに、生きて出て来た養老政を迎えた。

母屋内で、このやくざが斬られたならば、こちらは、無数の修羅場を経て来た者の鋭い神経で、それと感じたに相違ない。感じなかったので、佇立して、待っていたのである。

門を出て来た養老政は、なんとも名状しがたい歪んだ面持になっていた。

「申しわけありやせん。五郎次は、長脇差をすてて居りやした。腑抜けになっていやがって……」

「対手が斬らぬのなら、べつに、死に急ぎをする必要はなかろう」

「あっしゃ、覚悟をして、やって来たのに、あんな……奇妙なあんばいに、はぐらかさ

れちゃ、たまったものじゃござんせん。莫迦にしてやがる！　五郎次の奴、人をこけにしやがって、……水盃で、兄弟分の誓いを流そうとぬかして――。挙句の果ては、女房の置手紙は、嘘を書いていたとか、三年も一緒にくらして居り乍ら、お咲は、未通女だったとか……」

いまいましげに、養老政が、石ころを川へ蹴とばした時、狂四郎は、ふっと、予感したように、頭をまわした。

娘姿が、その家の門をくぐって行くのが、ちらと見えた。

――昨夜、船で、この男を刺そうとした娘だ。

狂四郎は、直感した。

「おい、お前は、そこの茶屋で、待っていてもらおう」

「へえ？　……なにか――？」

「五郎次が、お前を斬らなかった理由が、もしかすると、判るかも知れん」

狂四郎は、そう云いのこして、ひきかえして行った。

猿江の五郎次は、玄関で、その娘と応対していた。

「お義兄さん！」

娘は、五郎次をそう呼んで、白鞘の匕首を、さし出した。

「姉さんは、これで、のどを突いて、死にました。……わたしは、姉さんを死なせた養老政が、憎くて、仇討ちをしてやろうと、追って来たのじゃけど——、お義兄さんが、仇を討ちなさるのが、筋道だと思いなおしました。これで、姉さんのうらみを、はらして下され！」

「………」

娘は、五郎次に、匕首を受けとらせると、

「お願いします！」

叫ぶように云って、頭を下げるや、身をひるがえした。

「お幸！」

五郎次は、あわてて、義妹を呼びとめようとしたが、娘の走りかたは、すばやかった。

五郎次は、暗い眼眸を、その匕首に、落した。

どんな想念が、脳裡を去来したのか、やがて、ひくく、呻くように、

「す、すまねえ！」

と、詫びの一言を、もらした。

それから、よろめく足どりで、奥へ入った。

座敷へ坐ってからも、かなりのあいだ、五郎次は、虚脱のていでいた。

やがて——。

五郎次は、われにかえったように、匕首を抜いてみた。白刃は、血のりで、うっすらとくもっていた。
ゆっくりと、それを逆手に持った五郎次は、おのが胸へ、突き立てようとした。
その瞬間――。
小柄が、庭から飛来して、五郎次の右手の甲を貫いた。
「うっ！」
五郎次は、痛みを怺えて、自決をはばんだ者へ、視線を向けた。
それが、見知らぬ浪人者であるのに、不審の表情になり、
「お前様は――？」
「養老政の代理と思ってもらってよい」
しずかに、座敷に上って来た狂四郎は、座に就くと、
「きかせてもらおうか、真相を――。兄弟分や義妹には、打明けられなかったが、いっそ、縁もゆかりもないあかの他人なら、しゃべりやすいだろう」
と、うながした。
五郎次は、うなだれて、「へい」とこたえた。
それから四半刻ののち――。
養老政が、しょんぼりと待つ腰掛茶屋へ、狂四郎は、ひきかえして来た。

狂四郎は、息をつめてこちらの言葉を待つ養老政を、じらせるように、茶汲みへ、酒を命じた。

はこばれて来た銚子を把(と)って、

「まず、飲め」

と、すすめた。

「へ、へい」

狂四郎は、養老政が、茶碗酒を、ひと息に飲み干すのを待ってから、意外な事実を、口にした。

「お咲は、五郎次と腹ちがいの妹だった」

「えっ？」

「五郎次は、婚礼の前日まで、そのことを知らなかった。その前日、むかし使っていた下僕が、たずねて来て、この婚礼はいけない、とかぶりを振った」

五郎次の父親五郎左衛門は、女房を喪(うしな)った際、上総から葬式の手伝いに来た女房の妹を、出来心で暴力で犯した。義妹は、すでに、人の女房であった。その亭主は、漁師であった。

義妹は、十月後に、お咲を出産した。それが、実は、亡姉の良人(おっと)五郎左衛門の子であることを、知っているのは、産んだ母親自身だけであった。

いや、もう一人、いた。五郎左衛門の下僕であった。主人が義妹を犯すのを、偶然、かい間視てしまったのである。

「……五郎次は、しかし、お咲に、惚れていた。下僕の忠告をしりぞけて、お咲を、女房に迎えた。……だが、抱けなかった。妹を抱くわけにいかなかった。……お咲は、どうして、良人が抱いてくれぬのか、いぶかり、うらみ、なやんだ。……その挙句、お咲に、本当の女房にして欲しい、と迫られた五郎次は、ついに、真相をぶちまけた。……お咲が、家を出たのは、それから、一月後だった、という次第だ」

きかせ了えて、狂四郎は、養老政の膝にのせられたままの空の茶碗へ、酒をなみなみと盛ってやった。

「お前は、昨夜は、死ぬ覚悟のために泥酔したが、今日は、生きのびるために、酔うがいい。ふところの十両は、酔いつぶれるまでの飲み代だと思え」

武蔵・弁慶・狂四郎

エッセイ

一

剣豪作家という商標をかかげてから、もう五年になる。当人自身が、得意になって、かかげたわけではない。ジャーナリズムの方が、勝手に、商標をつくってくれたので、この点、東芝や森永とは、聊かちがう。尤も、かかげてしまうと、営業政策上、はずすわけにいかなくなった。雑誌のグラビアなどにも、いかにも、剣豪らしい面構えで登場すべく、心掛けるようになったから、奇妙である。カメラマンも、せっせと、そういうポーズや表情をねらってくれるようである。

剣豪作家になったら、すこし風格が出て来た、と十返肇が、いってくれたそうだが、馬子にも衣裳で、五年間も、滅法腕の立つ剣豪ばかり書いていれば、当人だって、てめえが剣客になったような錯覚が起ろうというものである。生来、とっつきは悪いし、人相は険しいし、名前だって、柴田錬三郎源知盛――これで、五分月代で、紋服を着流し、朱鞘の大小を落差したら、いちだんと風格が上るだろう。

おかげで、銀座のバアなどで、自縄自縛的状態におちいることがある。

「なんだ、あの野郎が眠狂四郎か。ふん――」て嘲罵を、こちらの耳にきこえよがしにうそぶく愚連隊がいる。すると、こっちは、遽に、臍のあたりが、じーんと冷たくなって来る。もし、売言葉に買言葉で、立廻りと相成った場合、もともとこっちは腕力はさっぱり自信がないから、勝敗の帰趨おのずから明白である。ところが、いやしくも、眠狂四郎という表看板のてまえ、ここで、あっけなく、ひっくりかえって、ダアとなったら、周囲にいる客人ならびに美女連に対して、なんの面目あって、ふたたび顔が合せられようか、という気持がある。剣豪作家の悲哀である。そこで、やむを得ず豎子相手にせず、という態度をとらざるを得ない。それが、貫禄と錯覚されるから、便法と申すものである。

むかしの、浪人ものの兵法者たちの中には、多少、私のような状態ですごした者もいたろうと考えられる。もともと、私など、性格的に、あまり常識的ではないから、剣豪ものを書きはじめたので、いいかえれば、剣豪といわれる人物は、いずれも、どこか、神経が正常でないムキがうかがわれるのである。

宮本武蔵の「五輪書」の冒頭に、

兵法の道二天一流と号し、数年鍛練の事、初めて書物に書き顕さんと思ふ。時に、寛永二十年十月上旬の頃――生国播磨の武士、新免武蔵藤原玄信、年つもりて云ふ、

> 我、若年の昔より、兵法の道に心をかり、十三歳にして初めて勝負を為す、その対手新当流の有馬喜兵衛といふ兵法者に打ち勝ち、十六歳にして、但馬国秋山といふ強力の兵法者に打ち勝ち、二十一歳にして都に上り、天下の兵法者に逢ひて、数度の勝負を決すと雖も、勝利を得ずといふ事なし。その後、国々所々に至り、諸流の兵法者に行逢ひ、六十余度まで勝負すと雖も、一度もその利を失はず——云々。

と、書いてある。

大変な自慢話であるが、これは、武蔵自身が書くべき事柄ではない筈である。直木三十五も、このことを指して、自らの勇を恃み、猛獣の如く、うそぶいている態度を、好ましからざるものとしている。尤も、当時は、マス・コミがないから、自分で、宣伝につとめるほかにテはなかったろう。

武蔵は、死ぬ前に、独行道十九ケ条を書いている。これは、立派なものだが、その行状とは、必ずしも一致していない。

一、万づ依怙の心なし。二、身に楽をたしなまず。三、一生の間欲心なし。四、我事に於て後悔せず。五、善悪につき他を妬まず。六、何の道にも別を悲しまず。七、自他ともに恨みかこつ心なし。八、恋慕の思なし。九、物事に数奇好みなし。十、

居宅に望なし。十一、身一つに美食を好まず。十二、古き道具を所持せず。十三、兵具は格別、余の道具をたしなまず。十四、道にあたつて死を厭はず。十五、老後財宝所領に心なし。十六、神仏を尊み、神仏を頼まず。十七、我身にとり物を忌むことなし。十八、心常に兵法の道を離れず。十九、世々の道に逆くことなし。

以上であるが、はたして、武蔵は、どうであったか。

年少時代、武蔵は、父無二斎と、非常に仲がわるかった。武蔵が、天稟を誇って、傲慢不遜で、実父としても見るに見かねたのである。

「丹治峰均筆記」に、

武蔵、幼年より父が兵法を見こなし、常に誹謗す。無二斎、子たりと雖も、そのことによつて心に叶はず。ある時、無二斎、楊子を手づから削るに、武蔵、一間をへだてて居たり。無二斎、その小刀をもつて、手裏剣に、武蔵を討つ。武蔵、おもてをそむければ、小刀は後の柱に立ちぬ。無二斎、甚だ怒りて、平日我が兵法をなみするは不都合なりとて、更に手裏剣にて、これを撃たんとせしに、武蔵はまた面をそむけてのがれぬ。されど遂に父の怒りにふれて、家を出て播州にいたり、母方の叔父某の僧となれる庵にゆきぬ。時に九歳なり。

とある。親不孝な、鼻もちならぬ餓鬼だったようである。
関ケ原の合戦に従った時は、十七歳であった。友人と二人で、竹藪の上の細径を歩いていた。藪の中には、ななめに切られた削げ竹が、無数に突立っていた。武蔵は、友人をかえりみて「もしこの下を敵が通ったなら、おぬしはどうする」と問うた。友人は「飛び降りると、竹で足を刺されるから、見遁すよりほかはあるまい」とこたえた。すると、武蔵は、いきなり、身を躍らせて、藪の中へ跳んで降り立った。その片足には、ぐさと、削げ竹が、突き刺さったが、武蔵は、平然として「おれなら、こうする」といいはなってみせた。まさに、匹夫の勇で、銀座新宿をねりあるく愚連隊の行動と五十歩百歩である。
こういう匹夫の勇は、晩年にいたってからも、なおってはいない。
ある時、町に火事が起こるや、一人の老人が屋根から屋根へ、飛鳥のごとくに、飛び移って梯子を渡している光景が、見受けられた。人々は、猿のようなその身軽さに、舌をまいたが、それが武蔵と判って、成程と合点した。どうも聊か、阿呆らしい話である。
実は、その頃、武蔵は、足もとがよろめいていて、玄関の箱段をのぼるにも、袴の腰に手をかけて、やっ、と声をかけなければならなくなっていた。それを見て、人々が、「いかに武蔵と雖も、老齢には抗しがたい」と囁きあったのを、武蔵は、耳にしていて、

火事場に於て、その飛躍を見せたのである。

「撃剣叢談」に、次のような逸話が記されてある。

武蔵が、九州廻国の際、細川忠利侯の城下に近い松原で、兵法を教授していた。折から夏の頃であったので、伊達な帷子に、金箔で紋をつけた、目ざましい装いで、夜な夜な出て稽古をしてやっていた。もとより軽捷自在の人物であるから、左右前後に奮撃する有様は、愛宕山の天狗もかくやあらん、と専ら評判になった。

忠利の近習で、松山主水から二階堂流の極意印可をうけた村上吉之丞が、武蔵の評判をきいて、人を介して、試合を申込んだ。武蔵は、ひそかに、吉之丞の業をきいて、その太刀筋のおそるべきを知り、おのれが及びそうもないと思われたので、その日のうちに退転してしまった。しかし、後年、武蔵の名は天下に高くなり、吉之丞を知る人はなかった。戦国時代でも、たとえ武勇の場数はあっても、一国内だけで立てた功名は、ついに全土に遍く知られずにおわるのが常であり、吉之丞の場合がそうであったと考えられる。

山田次郎吉も、武蔵のことを評して、次のように記している。

> 吉岡との立合、及び幾多の記事は、悉く信を置きかねるものである。吉岡との試合は、相撃ちであった。よし、武蔵が勝とするも、吉岡家が断絶するまで、あるいは

打殺し、斬殺したというのは、如何に当時未だ政令完たからぬ時代でも、相当の制裁なくして、看過することはできない。単に試合に傷つけ、あるいはあやまって死に致らしめたというのであれば、公許せらるる規定であったろう。武蔵が江戸に出て、夢想権之助を伏さしめ、大瀬戸隼人、辻風なにがしを試合に打殺したことなど決して特筆の価はなく、みな兵法未熟の者共であったからである。武蔵が、真に江戸に伎倆を試みんとなれば、当時、柳生の配下には、庄田、木村など、錚々たる傑物が控えて居る。その他、天下の御膝元とあって、各流の名家が雲集しているにも拘らず、武蔵は之を避けて、一人も訪問した形跡がのこって居らぬ。甚だ不審といわねばならぬ。凡そ道の修業に、諸州を徘徊する者が、その土地第一ときこえる人を訪れぬのは、業理の上に於て、自分を知るという計量を失っているものである。二天一流が、ある程度までに限られていては、天下の兵法とは、いわれぬ。よろしく、名人達人と、純精なる太刀風の下に、その妙理を発揚してこそ、はじめて称讃の辞を捧ぐべきで、武蔵の武者修業が、吉岡を除く外、大家に接触せぬのは、後世より見て、武蔵のため、特に兵法のため、極めて遺憾なことである。

二

武蔵が、一流兵法者ではなかった、と否定するわけではない。ただ、剣豪として、その生涯をつらぬいているものは、傲慢辛辣、勇武を誇りつづけているところが、面白いといえる。

どうやら、剣豪には、二つのタイプがあるようである。剣の道に入って、武を蟬脱し、名僧君子の寛仁の悟りの境地に到着するタイプと、死ぬまで敵の存在を忘れず、豪勇のみを維持しようとするタイプと。

前者は、塚原卜伝、上泉信綱、飯篠家直、柳生宗厳、伊藤一刀斎、針ケ谷夕雲、紙屋頼春、小田切一雲、男谷信友など。

後者は、宮本武蔵、佐々木小次郎、神子上典膳（のちの小野次郎右衛門忠明）、平山行蔵、島田虎之助、平手造酒など。

どうも、私などは、剣聖などと称せられる大人物には、あまり興味がわかない。後者の人間くさい兵法者たちの行状の方が面白い。これは、剣豪だけではなく、各界を通じて、いえることだろう。

劇化された武蔵は、「花筏巌流島」以来、女に惚れたり惚れられたり、大いに色男ぶっているが、実際は、一生、女気なく、独身で下男一人をつかってくらし、風呂にも入らず、髪を梳らず、老年にいたって、在宅の折は、無腰で、五尺杖を携えていた。壮年の頃は、長髪を帯のあたりまで垂らしていた、という。身の丈六尺、骨太く、顴骨が

出て、双眼がぎょろっとしているのだから、見ただけで寒気がする。これが、二刀をかまえて、「いざっ！」と、ひと睨みすれば、たいがいの未熟兵法者は、それだけで、ちぢみあがってしまうだろう。

尤も――。

武蔵が、達人である逸話も多くのこっている。

ある時、武蔵は、細川忠利の前へ出た時、

「御家には、剛毅の士が数多いるように見えますが、只今廊下にてすれちがった士など、殊更に秀れているように思われました」

と、いった。

「それは、誰か？」

「名は存じませぬが……」

武蔵は、その風貌を告げた。

すぐにしらべたが、どうもよくわからなかった。

武蔵は、軽輩の溜りに行き、その武士を指さした。それは、都甲金平という若い軽輩であった。うち見たところ、どこにも特徴はなく、骨格も並で、態度もひかえめで、きわめて凡庸な人間に思われた。

後年にいたり、将軍家では、江戸城修築にあたって、諸公に、金品石材を賦課したこ

とがあった。各藩の石材は、直ちに運ばれて、一定の場所に堆く積みあげられたが、細川家では、係りの役の手ちがいから、ひどくおくれ、その場所に、石材がいまだ到着していなかった。

公儀から、その怠慢を咎められて、忠利は、ふと、武蔵が指摘した都甲金平を思い出し、これに役を与えた。

金平は、日を夜に継いで、奔走し、たちまちに、各藩よりも先に納め済みにした。あとの雁が先になったので、各藩は、甚だ面白くなかった。細川家の運搬役都甲金平は、配下に命じて、他藩の置場から石材を盗ませて、あのように早く納め済みにしたのであろう、という風説が流布された。そのために、金平は、嫌疑によって、公儀に捕えられ、獄に投じられてしまった。拷問は残酷をきわめたが、金平は、一語も発しなかった。

篠揉みという責めがくわえられた。これは、管竹の小口を薄くくりぬき、これを股におしあてて揉むと、小口の竹へ肉が入る。その竹を引けば、股に小さな孔ができる。この孔へ、沸騰する醬油を注ぎ込むのである。

金平は、篠揉みをされても、眉宇もひそめず平然たるばかりか、

「責めの仕様がにぶうござるな」

といって、自ら、おのれの股へ篠を揉んで孔をあけて、醬油をさしてみせた。そのために、肉がはじけて、桃の実のようにふくれあがってしまった。

幕吏たちもあきれて、

「石盗人都甲金平儀、もはや疑いなし、放免す」

という放免状を手渡した。すると、金平は、憤然として、

「石盗人都甲金平とは何事でござる。石盗人でないことが判ったから、放免されるのではござらぬか」

と、抗議して、その粗忽の言葉違いを革めさせた。

武蔵が、この人物を、一瞥で見出したのは、流石であったといわねばなるまい。

武蔵について、興味があるのは、すべての試合において、敵の意表を衝く作戦をとっているとともに、常に、生活上の工面もよかったことである。

「丹治峰均筆記」にも、

武蔵、一生福力あり。金銀に乏しからず。歴々の浪人、武蔵随仕のもの数多くあり。暇を申して他所へ出る時には、金銀なくては、何方へ行きても、落ちつきがたきものなり。その用意ありやとて、いつも之を与へき。平日、居るところの天井の廻り縁に、金銀を木綿の嚢に入れて、かけおき、何番目の嚢をと指図して、矢筈竹にて、それを下ろさせて与へたりといへり。

と書いてある。かなり細心のところもあったのである。

三

ところで――。

剣豪ではないが、古今を通じて、私が、好みといえば、実は、弁慶である。

実在はしていたらしいが、出現するところが、悉く、出鱈目な伝説的な場所ばかりだから、愉快である。

宇治川、一の谷、屋島、壇の浦など、正史にのこる戦場には、いっぺんも姿を見せない。

五条橋、舟幽霊、安宅関、衣川など、ひとつとして信頼できない場所ばかりである。おかげで伝説的人物として、いろいろな逸話をのこし、それがユーモラスで、川柳になったり、駄じゃれになっている。

鬼若丸のむかしから、女嫌いで通していたが、播州書写山円教寺で修業中に、たった一度無名の女と契った、という。一生に一度、女にふれたなど、なかなか人間的ではないか。お通さんと契ったのか契らないのか、さっぱりわからぬ武蔵と比べて、よほど血があたたかい。

弁慶と小町は、馬鹿だなあ嬶あ
という川柳になるわけである。
弁慶の泣きどころ、だとか、陰弁慶、だとか、立往生だとか、いずれも、甚だ庶民的でいい。
悲壮なるべき衣川の立往生の最期も、大変ユーモラスである。
文治五年閏四月――。
ついに、義経一行の討死する時が来た。
弁慶は、何思ったか、せっせと、大きな藁人形を作った。
伊勢三郎が、
「いったい、何をする？」
と、訊くと、弁慶は、笑って、
「まあ、見ておれ」
藁人形が出来あがると、弁慶は、これに、自分の黒皮縅をきせ、大薙刀を持たせ、熊手、槌、鋸、鉞、突き棒、指す叉、袖がらみの七つ道具を背負わせて、夜のうちに、衣川の橋ぎわへ立てておいた。
あかつきにいたって、敵勢は、どっとおしよせて来たが、
「おっ！　弁慶がいる！」

と、怯じ気立って、一歩も進まなくなった。

遠矢を、びゅんびゅん射かけて来て、そのうちの数本は、突き立ったが、もとより藁人形である。平然として、つッ立っている。

苛立った一人が、決死の勇をふるって、駒を進めて、迫り寄り、大矢を見事に、胴のまん中へぐさと立てたが、それでも、弁慶がビクともしないので、顔色を変えて、ひきさがってしまった。

ほんものの方の弁慶は、商標である黒皮縅と大薙刀と七つ道具を藁人形にくれてしまったので、萌黄縅に胴へ蝶を二つ打たせた鎧をきこみ、二丈二尺の八角棒をかいこみ、高館の裏門からとび出して、

「やあやあ、遠からん者は音にもきけ、近くば寄って目にも見よ、西塔の武蔵坊弁慶とはわれにあり。われと思わん者は、出あえ！」

と、呼ばわった。

いつもなら、これをきいただけで、敵陣はひそとしてしまうのであったが、

「贋者ぞ！」

「七つ道具も大薙刀も持って居らんではないか」

「本ものは、裏門の橋たもとにいるというぞ」

と、一斉に、殺到して来た。

おかげで、弁慶は、大汗をかいて、八角棒をふりまわし、大奮戦しなければならなくなり、そのうちにくたびれて来て、味方の加勢を待たなければならなくなった。

一方——。

裏門の陰弁慶が、やっと藁人形であることが判って、敵勢を憤激させた。

やがて、義経が、館(やかた)の内で、割腹したのを見とどけておいて、弁慶は、いつもの姿にかえって、橋へあらわれた。

しかし、敵勢は、こんどもまた、藁人形と思って、どんどん、進み寄って来た。

弁慶は、どうせ死ぬのだから、人殺しはすくなくしようと思い、黙って、迫られるままにまかした。

矢が、びゅんびゅんと飛んで来はじめたが、それに対して微動もせずにいることに、弁慶は甚だ苦痛をおぼえつつ、はやく、心の臓へ、ぐさと突っ立ってくれぬものかとねがった。

こういうあんばいの豪傑は、どうも、剣豪の中には見当らぬようである。

巨人伝説として、弁慶の話など、今日の人々は、信用しないかも知れないが、武士というものの中には、相当な豪傑は、いたようである。

武士の武芸鍛練は、実に凄(すさま)じいものであったようである。

大河内政朝(まさとも)という人物は、十歳を過ぎた頃から、三州の山の中に行って家にも帰らず、

山や谷を家として、飲食を断ち、三州やつるぎ川や天竜川で、背中に大きな石を背負って、泳ぎまわった、という。また、相州小田原は大浪の打つ処ときくや、わざわざ出かけて行って、海上を一里あまり沖へ泳ぎ出して、鱶とたたかった。

また、抜け走りといって、疾駆の稽古をしたが、三間柄の槍をひっさげて、三十余町を一気に走った。はじめは、息つぎが少し荒かったが毎日怠らずに走ったので、後には、すこしの鼻息もしないようになった。

政朝は、大弓をもちいたが、尋常の人は、肩を入れることさえ叶わなかった、という。政朝は、毎日、厚さ二寸ずつの青石を立てておいて、これを射ていたが、筈もかけないで、射抜いてしまった。何人も、この石を射抜くことは不可能であった。

まさしく、鍛練によって、豪傑は、生れたのである。

そして、武士の本質は、異常神経であった。

むかし、短かい脇差をさしている侍があった。十二三になる前髪立ちの少年が、それを見て、

「耳くじりを差している」

と、嘲笑した。

その次に出会った時も、少年が、同じせりふを口にしたので、武士は、いきなり、少年をとらえて、おのれの膝の上へ、うしろ向きに抱き据えて、

「よいか、そなたが、いつも笑う耳くじり、そなたの腹へ通るか通らぬか、見よ！」
と、いいざま、抜きはなって、その腹へ突き立てた。
少年は、苦痛をこらえつつ、
「耳くじりでは、思うように、わが腹へは通り申さぬ」
といいかえし、おのが差料を抜きはなち、わが腹から、うしろの武士の腹まで、田楽刺しに突き貫いて、ともに果てた、という。
これは、実話である。「異説まちまち」に出ている。
単純素朴（そぼく）にして、凄絶（せいぜつ）な心気を持った世界であるから、思いもよらない程のすばらしい剣豪が出現したとしても、べつに、不思議はないのである。

四

一刀斎伊藤景久（かげひさ）の生涯など、神気を湛（たた）えて、ちょっと信じられぬ程だが、その凄じい修業ぶりは、人間の力の限界を超えたものとして、語るに価値がある。
一刀斎は、伊豆の大島に生れ、十四歳の時、武道をもって身を立てようと志して、板子一枚にすがって、三島（伊東の東南半里）に泳ぎ渡った。その折、長時間、海中にあったために、恐ろしい形相（ぎょうそう）と化していたので、村人たちは、島鬼が来た、と騒いだ。そこ

で、自ら鬼夜叉と称し、三島神社の床下で寝泊りして、一人、兵法修業にはげんだ。

三島の神主は、鬼夜叉の志をはげますために、奉納されていた備前の名刀一文字を与えた。この刀は、ひさしく棟木にくくりつけてあったのだが、縄が腐って落ちた際、下にあった御酒甕を貫き、すこしも損じなかったというしろものであった。

鬼夜叉が、これをもらった夜、偶然にも、数名の強盗が押入って来た。鬼夜叉は、まだ柄ごしらえもしていない一文字の刀でわたりあい、たちまちのうちに、強盗たちを斬り伏せた。そのうちの一人が、おそれて、酒甕の中にかくれるや、鬼夜叉は、とびかかって、甕もろとも、強盗を、まっ向まっ二つに斬り割ってしまった。この刀は、甕割と名づけられて、後年、小野次郎右衛門へ譲られた。

鬼夜叉は、江戸へ出て、中条流の達人鐘巻自斎の門に入った。

三年も経たないうちに、業が進んで、多くの門弟中、一人も鬼夜叉におよぶ者がなくなった。師の自斎は、ひそかに、おそれをいだいて、容易に、おのが秘伝を教えようとしなかった。

某日、鬼夜叉は、師の前に出て、剣の妙理をさとったようにおぼえる、と告げた。

自斎は、憤って、

「わずか三年足らずで、妙理をさとったとは、なんたる不遜か！」

と、叱りつけた。

すると、鬼夜叉は、粛然（しゅくぜん）として、頭を擡（もた）げて、

「妙とは、一心の妙にして、師伝によるものではなく、また修業の年月の長短によるものとも、おぼえませぬ。おうたがいならば、それがしのさとった妙理をごらんにいれましょう」

と、いった。

「よし、その高言、みじんにくだいてくれる！」

自斎は、木剣をとって、道場へ降りた。

ところが、一合せすると、たちまち敗れた。再び立合ったが、これも、あっという間に負けた。かさねて、三度び、対峙（たいじ）したが、鬼夜叉がするすると進んで来て、ぴしりと打ち込む迅業（はやわざ）を、自斎は、ふせぐすべがなかった。

自斎は、まったく不思議の感に堪えず、

「わしは、これまで諸国を遍歴して、数多の兵法者と立合って、三度のうち二度も敗れるということはなかった。お前の剣に、こうもかんたんに負けるとは、わし自身、納得がいかぬ」

と、いった。

鬼夜叉は、こたえて、

「人間は、夢寐（むび）の間にも、足が痒（かゆ）いのに、頭をかくものは、ありませぬ。足が痒ければ

足、頭が痒ければ頭をかく——これが自然であります。人間には、自ら機能があって、害をふせぐようにできているようであります。……されば、てまえが打とうとするところに、先生のおのれを守護する本能が働きます。そこを打ったところで、勝を占めることは叶いませぬ。打たれないと、本能が安んじている箇所こそ、てまえの狙うところ……この虚実の岐れめこそ、勝敗を決定する、と申せます。常に、てまえは実を以って、先生の虚を打って居ります」

と、述べた。

自斎は、感服して、悉く秘伝を授けた、という。

この虚実問答は、上泉信綱と柳生流の始祖柳生宗厳とのあいだにも、おこなわれている。

柳生の庄に、上泉信綱が、やって来たので、宗厳は、試合を申込んだ。

信綱は、つれていた門弟疋田文五郎を出した。

宗厳が立向うと、文五郎は、

「右をとります」

と宣言して、ぱんと、右を打った。

「左をとりますぞ」

いいざま、苦もなく、左に入れた。

まるで格段のちがいであった。門弟がこれぐらいだから、師の信綱がどれくらい強いか、わからない。

宗厳は、辞をひくうして、教えを乞うた。信綱は、教えて、剣には虚と実があると述べた。

五

この虚と実との業を、私は眠狂四郎の円月殺法で使っている。

水月——という極意がある。

移すとも、月も思わず、うつるとも、水も思わず、猿沢の池。

この歌にあらわされた無心の境地をいう。

しかし、これは、狂四郎の場合、おのれの境地とはせず、立合う敵の境地にすることになるのである。ここが、円月殺法のミソである。

狂四郎の恩師は、剣の道は、流通円転して終始するところなく、循環変動常なき、天地神意の表象であると、教えたのである。ところが、狂四郎は、おのれの太刀をして、無想剣たらしめずに、敵をして、空白の眠りに陥らしめる殺法をあみ出したのである。

白状すれば、これは、作者の理窟である。

敵と相対した時、その刀尖をもって、大きく円月を描く殺法。敵の闘魂をうばい、一瞬の眠りに陥らせておいて、一刀で斬り下げる――いわば、敵をして、一切皆空の状態たらしめ、おのれは、心中で、堪え難い罪悪感を呻く。

すなわち。

極意を悟った兵法者の姿が、「花下の睡猫、意は舞蝶にあり」とすれば、狂四郎の姿は、羽を休めた蝶を一撃で落す無情な野良猫に似ているのである。

真の剣豪のすがたというものは、五味康祐が「喪神」で描いた兵法者であろう。敵を斬る刹那、おのれは、喪神しているのである。ところが、こういう人物は、私が意図する物語では、どうにも、しまつに困るのである。

私は、眠狂四郎を剣豪として描こうとしたわけではなかった。狂四郎に、現代の罪悪感を背負わせて、そのジレンマに苦しみながら生きて行かねばならぬ業を見たかったのである。いわば、剣豪が進む道とは、逆の方角へ歩かせてみるために、円月殺法をあみ出したのである。

斬られた方が、喪神する。だから、斬られる苦痛はない。斬った方は、人を斬ったという罪悪感を、意識の中に一杯にしている。逆なのである。

だまされ、犯されている女の方が、一切の苦悩を忘れて、恍惚の陶酔にひたっている。だまし、犯しているドンファンの方は、一人の女性の将来を滅茶々々にした罪悪感で、

なんともやりきれない苦痛をおぼえている。
狂四郎が、剣豪でない所以である。
ところで――。
剣豪小説という商標のもとに、剣戟描写をやろうとすると、これは、甚だ大変である。刀を抜き合って、どっちかが斬られるだけのことで、かんたんにやろうとすれば、三行もあれば足りる。
これを、行間に殺気をはらませつつ、長々とやらねばならぬとすると、いろいろと、あの手この手を考えねばならない。
狂四郎は、一足引いて、腰間の利刀をすらりと抜いた。
円月殺法は、敵の鋭気を吸い寄せる汐合を測るために、しばし、構えを不動のものにした。この不動の中に、無量の変動が生じ、懸る中に待ち、待つ中に懸る覚知があった。懸待一致すれば、技熟して理に至り、理きわまって技に至る。
汐合は終った。
狂四郎の心中は、一個の人命を断つ暗然たる業念に満ち、同時に、その手は、ゆるやかに、刀身をまわしはじめた。
くわっと双眼を瞠いた相手は、狂四郎が、半月を描くまで能くもちこたえ、次の刹那、ふっと陥ろうとする目晦みを猛然とはねのけて、

「ええいっ！」
と、凄じく斬り込んで来た。
こういうのは、オーソドックスで、たいしたことはない。
対手（あいて）が強敵で正剣の使い手である場合、狂四郎の円月殺法は、利（き）かなくなるおそれがある。さればといって、狂四郎を敗れさせるわけにもいかない。こうなると、大いに工夫を要する。
そこで、狂四郎に、あらかじめ、眠り薬をのませておく。だから、狂四郎は、円月殺法を使うわけにはいかない。
したがって、次のような描写と相成る。
刀尖を、爪先（つまさき）前三尺に落した。狂四郎に生涯に二度とないおそろしい危機が見舞っていた。
脳髄（のうずい）、臓腑（ぞうふ）、四肢（しし）を徐々に犯しはじめた麻酔薬の効力に耐えるために、蒼白（そうはく）の顔は、いちめんに汗を吹き出させ、眥（まなじり）を裂くまでにひき剝（む）いた双眸は、黒瞳をひとまわり膨（ふく）れあがらせていた。暗紫色に変じた唇（くちびる）は、絶間なく痙攣（けいれん）しつつ、ぎりぎりっと歯ぎしりを洩（も）らしていた。
——今だぞ！　狂四郎！　絶体絶命のこの刹那こそ、卍字（まんじ）殺人刀即活人剣の極意がある！　業をすててこそ、機根（きこん）の神気が生ずるのだ！

師の声が、何処（いずこ）からともなくひびいた。

ついに――。

狂四郎の視野いちめんが、灰色にけむり、それまで遠のき近づき、大きく小さく揺れていた上段構えの戸田隼人の姿が、あとかたもなく消えはてた。

完全なる暗黒の世界で、狂四郎は、堪えに堪えぬいた気魂が、虚空（こくう）の中に溶け果てる「無」を悟るや、しずかに、しずかに、刀尖をまわしはじめた。

ああ、今こそ、無想正宗は、美しき円月を描き終った。

一瞬、戸田隼人の、碧空（へきくう）に切先を刺して直立にかざされていた豪剣は、きえーっと唸（うな）りを生じて、狂四郎の頭上へ振りおろされた。

だが――、刃が月代（さかやき）にふれたかふれぬかの一刹那、無想正宗は、一条の白光を閃（ひらめ）かせて、その豪剣を、鍔元（つばもと）より二寸あまりの先において、すぱっと断ち切っていたのであった。

と、こういうあんばいになる。

対手の刀を二つに切るのは、書いているうちに、ふと思いついたテであった。名人は、兜（かぶと）をまっ二つにするというから、刀を切ることは不可能ではない筈である。

殺気をみなぎらせる描写には、ここらあたりから自信がつき、「剣は知っていた」では、主人公を、百余名の陣へ、単身斬り込ませて、新聞小説で、剣戟描写のレコードを

つくってやろうと、七回ぐらい、あの手この手で、凄惨な修羅場（しゅらば）をひきのばしてみた。
ひどく疲れる仕事で、書いている方が、うんざりした。
所詮（しょせん）、剣豪小説というものは、実在の剣豪とは、無関係のもののようである。

眠狂四郎の生誕

エッセイ

作家は、小説作りの楽屋話をするのを、あまり好まないらしい。私も、好きではない。それぞれの商売には、コツがあり、そのコツをしゃべってしまっては、ミもフタもなかろうし、専売特許を公開する必要はない。

たしかに、これは、秘密にしておくべき手の内なのだが、凡夫というものは、ときどきなにもかも面倒くさくなって、あらいざらいさらけ出したくなる衝動にかられるものである。

私など、べつに、われから好んで、剣豪作家になったわけではないので、剣豪小説のコツなど、ソ連の魔術師のように、ひたがくしにする必要もない。私は、剣豪小説を書きはじめる時、従来の時代小説の法則を、いかに無視するか、あるいは、それに、どのように反逆するか、ということを考えた。いわば、これが、私の専売特許となった。

私が、「眠狂四郎」を創り出したのは、たしかに、「机龍之助（つくえりゅうのすけ）」が、頭の中にあった。

机龍之助とは、まことに、いい名である。いつまで経っても古くならぬ名である。私は、マスコミに売り出す名は、こういう、いい名でなければならぬ、と考えはじめた。机は、小学校へ行かなかった人をのぞいて、すべての人間が使っている。だから、おぼえやすいのだ。そこで、私は、人間が、毎日必要とする品ものを考えた。ところが、どうも、

うまいのがない。そのうちに、

――そうだ。睡眠ならば、誰でも、とらざるを得ないじゃないか。

と、思いついた。生れて死ぬまで、「眠」からはなれることはないのだ。これを姓にすれば、すぐ、おぼえられるではないか。

「眠狂四郎」は、こうして生れた。つまり、私のサービス精神は姓名をつくる時から発揮されたわけだ。名ができると私は、そいつの性格、境遇をつくるために、日本の物語中のヒーローを思い泛べ、かれらが持ち合さない特質をそなえさせようと努力した。

時代小説の主人公は、これまで求道精神主義者か、しからずんば正義派であった。そして、刀を抜くことに、ひどく、もったいぶっている。（丹下左膳のようなバカは論外である）氏素姓は正しいし、女に対してピューリタンで、万事理想的にできすぎている。

そこで、私は、いちいち、その逆をとることにした。

生誕は、最も陰惨であること。これは、かれの運命を、極度にひき歪める根本条件となる。つまり、いつ、殺されても一向にかまわないような人間にしてしまう。こういう主人公は、いままでの時代小説にはなかったはずである。

その陰惨な条件をあれこれと考えているうちに、戦後において、混血児という存在が、奇妙な浮かびあがりかたをして、万人の関心をあつめていることに、気がついた。

そこで、私は、当時、禁教として戦前の「赤」よりももっと、忌避されたキリシタン

をむすびつけることにした。異国の伴天連が、拷問のゆえに、信仰を裏ぎって、ころび、悪魔に心身を売って、女を犯した挙句、生れた子――これほど、形而上的にも、形而下的にも、陰惨な生いたちは、ない。ニヒリストたらざるを得ないではないか。

日本においては、「信仰」というものは、庶民の血の中にまで浸透してはいない。したがって、伴天連が、悪魔に心身を売る、ということは、理解されにくい。その点の不安はあったが、戦前において、共産党員が、特高刑事に、どんなむごたらしい拷問を受けたか――これは、知らない者はないし、また転向した人間の、みっともない行動も、知れわたっている。いわば、「信仰」を「思想」と置きかえて、受けとってもらってよいときめたわけである。

さて、ニヒリストならば、一刀三拝式のさむらいであるわけがない。刀は、「武士の魂」ではなく、あくまで凶器であり、凶器であれば、どう使おうと勝手である。女の衣裳を剝ごうが、犬を斬ろうが、糞を突こうが、かまいはしない。

いわば、眠狂四郎が、剣を修業したのも、刀を抜くのも、従来の求道精神的図式の埒外において、なされる。すなわち、近代人が所有する自虐精神から生れたものであり、自虐が示す虚構のてづま、とでもいえるわけである。尤も、こういう作者の裏切り行為は、作者自身の快感のためであることは、あらそえない。だからこそ、週刊誌に、毎週、一篇ずつ――せっせと、百何十篇も、いまも書きつづけていられるわけだが……。

ところで、私も、「眠狂四郎」ばかり書いていられないから、ほかにも、たくさんの長篇をつくったが、これらは、いつか、このパンフレットの随筆で書いたように(編集部注＝「三友」昭和三十六年九月)、名作としてのこっている作品を下敷きにした。「ハムレット」や、「モンテ・クリスト伯」や、今日でもひろく読まれている名作には、読ませる必然的な魅力がある。それは、あきらかに、主人公の性格と境遇の魅力である。私は、それをぬすむことを、べつに、犯罪だとは思わない。ただ、いかに、それを、自分自身のものにするか——そのコツを心得ていればいいわけである。

極端ないいかたをすれば、「ハムレット」と「モンテ・クリスト伯」と「三銃士」をいかにミックスするか、その板前の庖丁の冴えで、いくらでも面白い大衆小説はつくれる、と思うのである。私の「眠狂四郎」のまねなどするのは愚の骨頂である。新人は、よろしく、泰西名作と四つに組むべきであろう。

わが小説Ⅱ「眠狂四郎無頼控」

エッセイ

「眠狂四郎無頼控」について、公評私評、毀誉褒貶、いささか当方がノイローゼになるくらい目と耳をなやまされたし、目下もなやまされつつある。自分の書いたものが、こんなに読まれるとは思っていなかったし、読まれているとわかってからも、心のどこかではかなりの抵抗感があった。甚だ漠然とした感慨だが、私は、これまで会心の作というものを書いたおぼえがないし（これは決して謙遜ではない）これからもそんな自信は持ち得ないと思っている。「眠狂四郎」をもって代表作とする意志は毛頭ない。

「週刊新潮」から、読切連載の時代小説を、という依頼があった時、実は私は、全く自信がなかった。これは、実作者でなければ、その苦痛はわからないが、一週間で一篇の読切を書きあげることは、容易ではない。文字通りのたうちまわる苦痛に襲われ、何処かへの逃亡を真剣に考えざるを得ないところまで追いつめられる。これは、書きはじめる前からわかっていたことであった。

ただ、私という人間は、妙な片意地な性格であって（そのために、ずいぶん、人から憎まれましたが）糞度胸をきめると、その糞度胸に対する責任をとらざるを得なくなるハメにたちいたるのである。新潮社の斎藤十一氏に「なぜ、私を起用されるのですか」と訊ねたところ、「あなたは、いつか、どこかで、大衆小説評をやっていたが、こんな

ものが大衆小説なら、いつでも束にして書いてみせると見栄をきっていましたよ」というこたえだった。たしかに、そんな放言をしたおぼえがあった。こうなると、私は、いやでも、見栄のてまえ、新しい時代小説を書かざるを得なくなった。

　幸か不幸か、私は、乱読癖があって、あまり人が見向きもしないような書物を、手あたり次第に読みちらして来たし、私生活的には世間の道義を裏切る行状を重ねて来たし……それらを、このあたりで立ててやろう、と考えた。もとより、高度に純粋な文学作品を要求されたわけではない。広範囲の読者層を擁する週刊雑誌の読物である。案外、私の乱行と乱読が役立つかも知れないと考えた。

　ひとつには、私は、小説というものは、エトンネ（人を驚かすこと）の精神を基盤とする、というひそかな考えを持ちつづけていた。例えば、ある夜シャルル・ボオドレエルが、アパートへ帰って行くのを見かけた友人たちが「彼は今晩寝台の下へ寝るだろう、寝台を驚かすためにね」とささやきあったというエピソードがある。「心臓を嘲弄するために、精神を悩ましました」この詩人の運命に、非常な魅力をおぼえている私は、その韜晦（とうかい）ぶりを、どれだけ大衆が痛快がるか、と常々考えていたのである。ゴオティエはボオドレエルを評価して「彼は物事を独特な観点から眺めた」と書き、その論理的な奇異な不可思議は、人をして愕然（がくぜん）たらしめたのだ、と指摘している。私は、これを心に置いて、読物を書こうと思い立ったわけである。

したがって、私は、まず、その主人公からして、奇異な名前をつける必要があった。私は、締切三日前まで、主人公の名前ばかり考えていた。そして「眠狂四郎」を誕生せしめた。いわばエトンネの計算の成果であった。この名前に、眉をひそめた人も、面白そうだと思った人も、たぶん、たったいっぺんで、おぼえてしまった筈である。

曾て、十九世紀の天才たちは、十七世紀のカトリック的カバアルと十九世紀実証的フィリスタンを両楯にした醜怪な怪物に決戦を挑んで、血を流している。そのためには、絶大な慢心が必要であった。

二十世紀の凡夫たる私に、今日の完備された科学に挑戦する気魄はない。しかし、人々の中にいまだ残存している夢想に、ひとときの娯楽を与えることはできないわけではない。それが、目下の私のサービス過剰の剣豪読物となっている。ひろく読まれているとするならば、私の目的は達せられたことになるのである。「眠狂四郎」のアクロバット的剣術を、バカバカしいとわらいすてるむきは、二十年前、原子爆弾の話をきいても、やはり、一笑にふしたに相違ない。狂四郎の剣が、原子爆弾という新しい兇器に対するささやかなヒューマニズムであることを、どなたもお気づきにならぬとすれば、それは作者の手段があやまっているのかも知れぬ。しかし、そのエスプリは、十九世紀の天才から借用していることとは、ここで断言できるのである。

数多くの読者の手紙の大半は、私が意図するところとは別に、毎週の愉しみとしてい

る激励であるが、読物である以上、それはそれで作者として有難いことであって、いま述べたことは、べつに、「眠狂四郎」を書く立場を正当化する卑劣な根性からではないことを、さいごにおことわりしておく。

解説

清原康正

柴田錬三郎が創造した眠狂四郎――このニヒルな剣士が、戦後最大の剣のスーパーヒーローであることは、論を俟たないところであろう。そのニヒリズムは中里介山の『大菩薩峠』の主人公・机龍之助の、出生の暗さは吉川英治の『鳴門秘帖』の頭巾で面を包んだ奇怪な浪人・お十夜孫兵衛の系譜を戦後に引き継いだ形にはなっているものの、こうした戦前のヒーローたちには見られない鋭い現代感覚で、柴田錬三郎は戦後の伝奇ロマンを開花させていったのだった。

暗い宿命を背負って生きる眠狂四郎の虚無的な翳を刷いた風貌と無明の道を歩む孤独のさまは、読者の前に登場するやいなや、たちまちに人気を得ていった。初登場は昭和三十一年（一九五六）のことである。

昭和三十年代に週刊誌ブームが起こった。それまでの新聞社系の週刊誌に肩を並べるように、出版社系の週刊誌が創刊されていった。その一番手が昭和三十一年二月十九日号が創刊号にあたる「週刊新潮」で、新聞社系でなければ取材・編集は難しいとされた

従来の通説を打ち破って、週刊誌の新しいスタイルを確立していった。昭和三十三年には集英社の「週刊明星」や双葉社の「週刊大衆」、昭和三十四年には講談社の「週刊現代」、文藝春秋新社の「週刊文春」、平凡出版の「週刊平凡」などが次々と創刊され、毎週の総発行部数は千二百万部に達し、薬屋の店頭にまで週刊誌専用のスタンドが設置されるほどの週刊誌ブームが出来した。当時の値段は大半が三十円だったことから、〝三十円文化時代〟などとも称された。

　柴田錬三郎の眠狂四郎シリーズは、そんな時代に登場したのだった。昭和三十一年五月八日号の「週刊新潮」から、シリーズ第一弾となる「眠狂四郎無頼控」の第一話「雛の首」の連載が始まった。この昭和三十一年という年は、経済企画庁が七月に発表した「経済白書」で「もはや〝戦後〟ではない」とうたい、神武景気に沸き立った時代であった。国民所得は二年連続して一割以上、設備投資は四割も増加し、各デパートの売り上げは戦後最高を記録した。日本が高度成長期に入っていく段階の時点で、戦前も含めたあらゆる既成の権威の破壊者として、眠狂四郎は登場してきたのだった。それ以降の時代と社会の状況を考え合わせてみると、このスーパーヒーローは生まれるべくして生まれたことがよく分かる。まさに時代が創り出したヒーローでもある。

　眠狂四郎シリーズは、その後、『眠狂四郎無頼控・続三十話』（単行本刊行の折に『無頼控』に収録）『眠狂四郎独歩行』『眠狂四郎殺法帖』『眠狂四郎孤剣五十三次』『眠狂四

郎虚無日誌』『眠狂四郎無情控』『眠狂四郎異端状』と続いた。最後のシリーズの連載が完結したのは昭和四十九年（一九七四）十二月のことで、その四年後の昭和五十三年六月三十日に柴田錬三郎は急逝してしまった。享年六十一歳は、当時でも早すぎる死であった。

こうしたシリーズの他に、シリーズの合間に発表された中・短編の眠狂四郎ものがいくつかある。本書は、『眠狂四郎京洛勝負帖』（新潮文庫）の中・短編計六編と「武蔵・弁慶・狂四郎」のエッセイ、さらに『邪法剣』（同）から「眠狂四郎市井譚の内」の短編二編、眠狂四郎に関するエッセイ二編を追加収録した『新篇 眠狂四郎京洛勝負帖』である。シリーズとはまた別の観点から、眠狂四郎の魅力を楽しむことができるものとなっている。

表題作「眠狂四郎京洛勝負帖」は、京都が舞台となっている珍しい中編である。

京の都、千本通りに面した羅城門跡にある古い小さな旅籠に逗留していた眠狂四郎に、京都町奉行から、突然、呼び出しがかかる。禁裏から高貴の姫君が失踪し、その裏には大阪商人が一枚からんでいると見られた。公儀隠密では歯が立たない事件であり、お主のような八方破れの無頼漢でなければ、大阪商人のしぶとさ、ずるさ、頭のよさに太刀打ちできるものではない、と町奉行は狂四郎に姫君の行方を捜査させることにしたのだった。

狂四郎がなぜ京都にいたのかと言うと、西丸老中から本丸老中となった水野越前守忠邦の政策によるものであった。越前守は幕府と禁裏との間に積もり積もった確執を解決するために、かなりの頭数の密偵を京の都に送り込んでいた。旅籠「千本屋」の主人もその一人で、狂四郎は越前守の側頭役・武部仙十郎の命でその旅籠に逗留していたのだった。

狂四郎は京都町奉行からの依頼を引き受けようとしなかったのだが、相宿の客で駿河から来たという商人・唐兵衛の仕掛けで腰を上げざるを得なくなる。狂四郎が姫君失踪事件の謎と関わっていくプロセスに工夫が凝らされていて、不自然さを感じさせない構成となっている。このあたりの展開の妙は、「小説の面白さは、ストーリーと強烈な登場人物から生まれる」として、「花も実もある絵空事の面白さ」に徹底してこだわり続けた柴田錬三郎の面目躍如の感がある。

京都の町の風情描写、その独特の地域性、京都町奉行と京都所司代との関係、幕府と禁裏の関係、大阪商人の経済力のさまなどを物語の背景に置いて、仙洞御所が美しい姫君を大阪商人に売った、と疑われる事件の真相を狂四郎が追及していく。姫君が大阪の両替商・辰巳屋久左衛門の別荘にいることを探り出した狂四郎は、そこへ乗り込んでいく。狂四郎の人間を見抜く鋭い観察眼が思わぬ結末を導き出すこととなるのだが、ここでは狂四郎の名探偵ぶりを楽しむことができる。

この辰巳屋でかつて、大阪町奉行を巻き込んだ大騒動があったことに、柴田錬三郎は触れている。元文五年（一七四〇）に幕府の評定所が裁いた辰巳屋で起こった跡目相続争いにからむ疑獄事件のことで、大岡越前守忠相が南町奉行から寺社奉行に転じて四年後のことであった。大阪と江戸の町奉行所など幕府役人を巻き込んだ贈収賄事件として、死罪四人、牢死一人、自害一人を出す一大疑獄事件が、物語の中にさり気ない形で紹介され、大阪商人の経済力の一端を示している。

また、この中編では、眠狂四郎シリーズの第一作では西丸老中だった水野越前守忠邦が本丸老中となっている。本丸老中に就任したのは天保五年（一八三四）のことだから、この中編の時代設定はそれ以降のこととなる。シリーズ第一話「雛の首」の時代設定は文政十二年（一八二九）のことで、それから五年以上の歳月が流れたということになるわけだ。だが、第一話「雛の首」の冒頭部で描かれた「異人の血」が混っているのではないかと疑われる程彫のふかい、どことなく虚無的な翳を刷いた風貌」に変わりはない。

物語のラストで、狂四郎が「京のくらしもよいものだ」との思いを吐露する結末が爽やかな印象をもたらしており、こうした構成にも柴田錬三郎の小説巧者ぶりがうかがえる。

「消えた兇器」では、三千石の旗本が湯殿の中で刺殺され、兇器が見当たらない奇妙奇天烈な事件の謎を狂四郎が追う。巾着切の金八はシリーズ第一話以来の懐かしい顔であ

る。

「花嫁首」は、狂四郎が正月の紙鳶あげを湯屋の二階から見上げるのどやかな場面から始まる。「おれには、紙鳶をあげる愉しみもなかったな」と、狂四郎の淋しい孤独な少年の日に触れており、シリーズの原点を再認識することができる。三河譜代の名門・加倉井家の婚礼で、花嫁が首を刎ねられて殺された奇怪な事件の謎を狂四郎が追う。母の思い出とともに、妻の美保代が逝ってからすでに二年が過ぎ去っていることに気がつく狂四郎の心境が描き出されている点にも注目していただきたい。

「悪女仇討」は、山陽道を姫路から西へたどって来た「おれ」狂四郎の独白体で物語が進行する凝った趣向になっている。池田藩士の妻女の仇討の裏に秘められた事情を、狂四郎が備前池田藩に乗り込んで採り出す。敵をして、空白の眠りに陥らしめる独特の円月殺法が描写されている。

「狐と僧と浪人」では、千曲川を挟んで対立する大名領と天領の長年の争いに、狐伝説、修行中の僧、旅の浪人がからむ設定となっている。この浪人が狂四郎で、民話の面白さを採り込んで、フォークロアな味わいを出している。ここでも美しく貞節だった亡き妻・美保代のことが描かれており、狂四郎の胸中に思いを馳せることができる。

「のぞきからくり」は、行商人・松次郎の語りで展開されている。この松次郎は、シリーズでもおなじみの薬売りで、隅田川沿いの諏訪町で蕎麦屋をやっていたのが、ここで

は元の薬売りに戻っている。甲州の石和で狂四郎が代官の悪行を暴いた事件を、松次郎が京都で客に語る設定となっている。助郷という江戸期の課役の過酷さを、狂四郎の活躍を通して理解することができる。

「贋者助太刀・眠狂四郎市井譚の内」は、父の敵を狙う武家娘にいい恰好をしてみせようとした浪人が狂四郎の名をかたったことから、奇想天外な物語が展開していく。狂四郎が完全に脇の人物となっている点が面白いのだが、それでもなお強烈な印象を与えているところに、狂四郎の存在感の強さが証明できる短編作となっている。

「義理人情記・眠狂四郎市井譚の内」は、江戸と下総・上総・安房をつなぐ御用船の場面から始まる。この船に狂四郎と乗り合わせた若い渡世人が、養老川の奥で取れた政五郎というケチなやくざ養老政、と名乗る。猿江の五郎次という兄弟分に斬られに行くところだと言う。その養老政を狙う娘が登場してきて、物語はにわかに複雑な陰影を帯びることとなる。ラストの「昨夜は、死ぬ覚悟のために泥酔したが、今日は、生きのびるために、酔うがいい」と言う狂四郎のセリフが人情譚の趣を醸してもいる。

眠狂四郎に関する「武蔵・弁慶・狂四郎」「眠狂四郎の生誕」「わが小説Ⅱ『眠狂四郎無頼控』」の三編のエッセイからは、柴田錬三郎が眠狂四郎を創造したプロセス、このスーパーヒーローに託した心情などを理解することができる。冒頭部で紹介した、まさに時代が創り出したヒーロー、を実感していただけることだろう。

ちなみに、「わが小説Ⅱ『眠狂四郎無頼控』」に対しては、「わが小説Ⅰ『デスマスク』『イエスの裔（すえ）』」がある。そこでは「メチエ」という語を示して、「私は十年前あたりから、なんとかして『メチエ』を身につけたい、と考えるようになった。そしてどうやら、身につけた、と思っている」「メチエを技巧と翻訳していいかどうか知らぬが、私は私流に、メチエを解釈して、それを試みたのである」と記されている。この「メチエ」こそ、柴田錬三郎の小説の面白さの源泉となっているものだ。

また、「武蔵・弁慶・狂四郎」では、〝剣豪作家〟として見た武蔵と弁慶のそれぞれの技と狂四郎の円月殺法に触れ、武蔵と弁慶への興味の持ちよう、武蔵の実相を描き出している。『孤剣は折れず』で武蔵の養子・伊織を登場させ、『運命峠』では武蔵に『五輪書』の解説をさせた柴田錬三郎は、その独特の武蔵像を長編『決闘者　宮本武蔵』で描き出している。武蔵の孤独な心情をさまざまな事蹟と虚実を取り混ぜた人物をからめて描き、遅れて来た青年とも言うべき武蔵が、関ケ原の合戦、大阪の両陣以降の戦後をどう生きようとしたのか、と柴田錬三郎は日本の戦後社会をそこに重ね合わせてもいる。

本書に収録された中編と短編の小説作品に三編のエッセイから、柴田錬三郎の特色をつかみ取り、それらが物語の中でどんな「メチエ」を駆使して表現されているかを楽しんでいただきたい。

本書は一九九一年九月に新潮文庫より刊行された『眠狂四郎京洛勝負帖』―〈眠狂四郎京洛勝負帖〉〈消えた兇器〉〈花嫁首〉〈悪女仇討〉〈狐と僧と浪人〉〈のぞきからくり〉〈武蔵・弁慶・狂四郎〉、一九八五年九月に新潮文庫より刊行された『邪法剣』―〈贋者助太刀・眠狂四郎市井譚の内〉〈義理人情記・眠狂四郎市井譚の内〉、一九九〇年八月に集英社より刊行された『柴田錬三郎選集　第十八巻　随筆・エッセイ集』―〈眠狂四郎の生誕〉〈わが小説Ⅱ「眠狂四郎無頼控」〉を収録し、『新篇　眠狂四郎京洛勝負帖』としたものです。

〈読者の皆様へ〉

本作品には「白痴」「めくら滅法」「唖」「気ちがい」などの身体・精神障害者に対する差別語や、これに関連した差別表現があります。これらは現在では使用すべきではありませんが、本作品が発表された時代（一九五九年〜一九七二年）には、社会全体として、差別に関する認識が浅かったため、このような語句や表現が一般的に使われており、著者も差別助長の意図では使用していないものと思われます。また、著者が故人のため、作品を改変することは、著作権上の問題があり、原文のままといたしました。

（編集部）

集英社文庫

新篇　眠狂四郎京洛勝負帖

2006年 8 月25日　第 1 刷
2006年12月 6 日　第 2 刷

定価はカバーに表示してあります。

著　者　柴　田　錬　三　郎

発行者　加　藤　　潤

発行所　株式会社　集　英　社
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
〒101-8050
(3230) 6095 (編　集)
電話　03 (3230) 6393 (販　売)
(3230) 6080 (読者係)

印　刷　大日本印刷株式会社

製　本　ナショナル製本協同組合

ISBN4-08-746068-1 C0193